特定非営利活動法人
ぷれいす東京
TOKYO

2015年度
年間活動報告書

目次

1. ご挨拶

「私たちはここにいます」に込めた思い 2

2. 部門報告

事務・総務 3

ホットライン 10

Sexual Health Project 18

Gay Friends for AIDS 20

ネスト 25

バディ 38

HIV陽性者と周囲の人／確認検査待ちの人への相談サービス 42

研究・研修 52

3. 研究報告

厚生労働科学研究報告 55

「私たちはここにいます」に込めた思い

ぷれいす東京　代表　生島 嗣

2015年7月末にはぷれいす東京のWebサイトのリニューアルを行った。そのリニューアルの宣伝効果を高めるために、昨年5月の活動報告会にてスタッフ、理事、賛助会員たちの集合写真を撮影した。Webや印刷物に顔をだしてもいいという人たちだけで撮影を行ったのだ。

改めて、これまでのぷれいす東京の歴史を振り返ると、電話相談では匿名で顔は見えないという関係性だし、直接支援に関わるスタッフたちも黒子的な存在でいることが多かった。バディのスタッフ派遣では、クライアントを見送った場合、セレモニーの場があったとしても、身内の方からお誘いを受けない限りは、あえて参加しないというスタンスを貫いてきた。また、相談サービスに関わるスタッフは、利用者とバッタリ街中であった場合などには、知らぬふりをするのが基本だった。それは、HIVに関する活動やサービス提供に携わるものが、街中で声をかけたりしたら周囲からどう見えるのかということを考慮し、相手のプライバシーを尊重したからに他ならない。市民同士の支えあいのプログラムのスタッフとして、周囲からは見えない存在に徹することで、個人のプライバシーを守ってきたのだ。

いまから10年前、ある都市のLGBT系パレードに参加した際、一緒に歩かないかと以前から交流のあった、現地在住のHIV陽性者に声をかけたことがあった。積極的なスタンスの方であったので、声をかけさせてもらったのだが、「無理、生島さんと一緒に歩いたらエイズだってバレるじゃない」という反応だった。別の都市のパレードでは、一緒に歩いた現地在住のHIV陽性者もいたので、個人差は大きいのだと思うが、自分が地方都市に住む陽性者の困難さを理解していないことを実感させられた。

池上前代表は、HIV陽性者は予防や啓発のパートナーとよく言っていた。ぷれいす東京が提唱した、「LIVING TOGETHER」というHIVとともに生きているというリアリティを啓発するキャンペーンにおいては、HIV陽性者、パートナー、家族の方々に文章を書いていただくという参加なしにはなりたたたないものであった。このプロジェクトでは、支援者、利用者という関係性ではなく、目標を達成するための協働という関係性に他ならないものだった。

普段のぷれいす東京の活動のなかでも、ボランティア・スタッフのなかに、HIV陽性者、パートナー、家族たちが大勢参加してくれていることが大きな力になっている。こうした傾向は、震災があった2011年以降、増えてきているように感じる。

バウンドリーという言葉がある、線引きという意味で、支援の場においては重要な概念なのだが、HIVに関する活動の場においては固定的なものでないように感じている。時間軸とともに変化することもあるし、最初から、利用者でなく手伝いたいという意思で、ボランティアとして登場する当事者も大勢いるからだ。

これまでの、プライバシーへの配慮、当事者を守るというスタンスが、実情を見えにくくしてきた側面は否めない。当事者が自分の責任で語ることについては、シュミレーション段階で一緒に悩むことはあったとしても、誰かが止めたり、制限するものではないのだ。

同じように、支援者としても、相談者のプライバシーは守りながらも、現場での経験を語る必要がある時代になってきているように思う。

昨年の11月から、ぷれいす東京は、認定NPOをめざして、サポーターの募集を行った。これまで、あまりやってこなかったのだが、「私たちを支えてください。サポートしてください。」と声をだしてみたら、団体の内外を問わずおおくの方々から賛同をいただいた。2年かけて年平均100人のサポーターを得ることが目的であったが、実際に呼びかけてみると、早々と目標をクリアしたため、2014年～2015年度の2年間分として200人と目標をひきあげた。その結果、本当にありがたいことに、無事目標を達成することができた。皆様のお申し出にスタッフ一同、本当に励まされた。声をだすと、これまでにつながっていなかった人たちとも新たな関係性がうまれ、広がっていくことを、この経験を通しても学ばせていただいた。ありがとうございました。

「私たちはここにいます。」というキャッチフレーズは、デザイナーさん、写真家さんとミーティングをしていた時に、アートディレクションで力を貸してくれている張由紀夫さんからの提案だった。Web上でぷれいす東京のサイトをみた人々と、ぷれいす東京がつながったことで、何かが変るかもしれない。そうした、無数の点が線になることで、電話や対面サービス提供という関係性だけでなく、さまざま協働を引き起こし、Web上でも広げていきたいと考えている。

1. 2015年度のハイライト

●TOKYO AIDS WEEKS 2015の立ち上げとHIV陽性者支援協会の設立

生島 嗣

【TOKYO AIDS WEEKS 2015の立ち上げ】

第29回日本エイズ学会・学術集会の会長である岡慎一氏からの提案で、国立国際医療研究センターにて学術集会のプレイベントを企画することになった。ここから発展的にTOKYO AIDS WEEKSの立ち上げにつながった。

「TOKYO AIDS WEEKS 2015 UPDATE YOUR REALITY～HIV/エイズをめぐる現実はものすごいスピードで変化している」は11月21日(土)～12月12日(土)に開催された。東京都、新宿区、製薬企業からの後援により11月28日～11月29日に国立国際医療研究センターにて開催された学術集会プレイベント(10プログラム)には、約1,243人の参加者があった。

【HIV陽性者支援協会の設立】

第20回の日本エイズ学会学術集会(会長：池上千寿子)に誕生した陽性者支援スカラシップはこれまでに10回の支援を継続し、400人以上のHIV陽性者の日本エイズ学会参加を支援してきた。運営は、はばたき福祉事業団、JaNP+ [日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス]、ぷれいす東京の3団体であたってきた。この度、この枠組みを法人化することにし、昨年の8月に「一般社団法人 HIV陽性者支援協会」を設立した。代表理事には伊藤雅治(全国訪問看護事業協会会長)を迎え、構成団体から理事などを選出した。

● 連続学習会「ぷれいすトーク」の立ち上げ

テーマごとに講師を招いてトーク＆交流会をセットにして行う連続学習会「ぷれいすトーク」がスタートした。

第1回は「家庭のなかの性教育」、第2回は共催ということでSpecialとして「マイナンバー制度と個人情報」をそれぞれテーマに開催した。

第1回「家庭のなかの性教育」2015年6月27日(土)

池上 千寿子

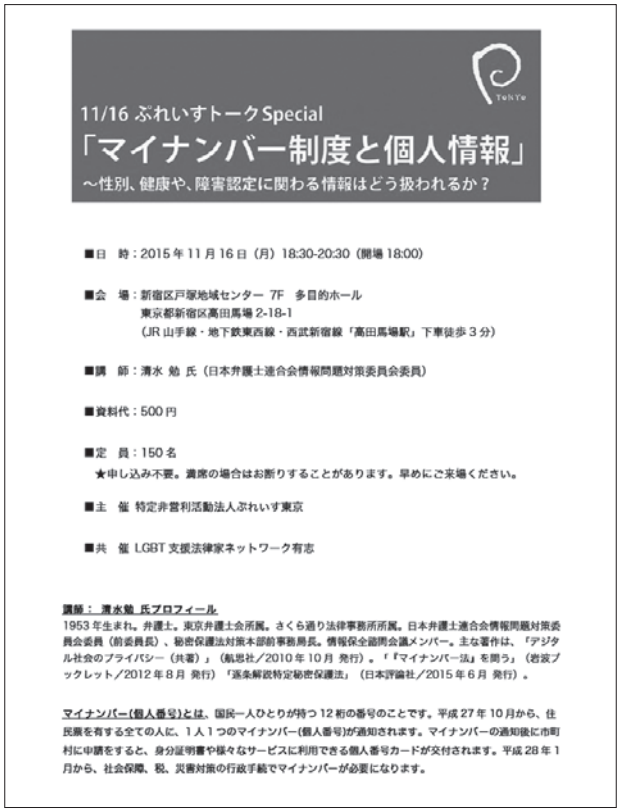
ぷれいす東京の活動のテーマのひとつが「性の健康(Sexual Health)」です。このテーマはHIVの有無や性別・セクシュアリティをとわず、だれにとっても自分のことになります。でも、性は語りにくいし、性の情報は偏っているし、なんとかしたいけど、どうしたらいいか分からない。そこでまずは、安心して性やからだのことを話せる場をもってみよう！　そんな思いで企画しました。当日は思春期の子を持つシングルマザー、養護教諭など10余名が集まり、グループワークでもりあがり「性のこと、リラックスしてしかもまじめに話し合えるんだ！」との感想もいただきました。東京新聞(2015/6/29)も写真入りで報道してくれました。NEWSLETTERやウェブでも報告しています。性の健康の輪を地道に広げる活動に手応えあり、のプログラムでした。

第2回「マイナンバー制度と個人情報」2015年11月16日(月)

2015年10月からマイナンバー(個人番号)の通知が始まり、社会保障、税、災害対策の行政手続でマイナンバーが必要になると報道されています。しかし、個人の視点で、何がどう変わるのか、何が課題なのかなど、実態はあまり見えてきません。そこで、LGBT支援法律家ネットワーク有志との共催で専門家をお招きして「ぷれいすトークSpecial」として学習会を開催し、46名が来場しました。

講師として清水勉弁護士にお話しいただき、司会は、中川重徳弁護士とぷれいす東京代表の生島がつとめました。

後半の質疑応答では会場からの多数の質問にお答えいただき、参加者の理解を深める機会となりました。



11/16 ぷれいすトークSpecial

「マイナンバー制度と個人情報」

～性別、健康や、障害認定に関わる情報はどう扱われるか？

■日　時：2015年11月16日（月）18:30-20:30（開場18:00）

■会　場：新宿区戸塚地域センター 7F　多目的ホール
東京都新宿区高田馬場2-18-1
（JR山手線・地下鉄東西線・西武新宿線「高田馬場駅」下車徒歩3分）

■講　師：清水 勉 氏（日本弁護士連合会情報問題対策委員会委員）

■資料代：500円

■定　員：150名
★申し込み不要。満席の場合はお断りすることがあります。早めにご来場ください。

■主　催 特定非営利活動法人ぷれいす東京

■共　催 LGBT支援法律家ネットワーク有志

講師：清水勉 氏プロフィール
1953年生まれ。弁護士。東京弁護士会所属。さくら通り法律事務所所属。日本弁護士連合会情報問題対策委員会委員（前委員長）、秘密保護法対策本部前事務局長。情報保全諮問会議メンバー。主な著作は、「デジタル社会のプライバシー（共著）」（亜紀書房／2010年10月 発行）。「『マイナンバー法』を問う」（岩波ブックレット／2012年8月 発行）「逐条解説特定秘密保護法」（日本評論社／2015年6月 発行）。

マイナンバー(個人番号)とは、国民一人ひとりが持つ12桁の番号のことです。平成27年10月から、住民票を有する全ての人に、1人1つのマイナンバー(個人番号)が通知されます。マイナンバーの通知後に市町村に申請をすると、身分証明書や様々なサービスに利用できる個人番号カードが交付されます。平成28年1月から、社会保障、税、災害対策の行政手続でマイナンバーが必要になります。

●ぷれいす東京の２つのWebサイトが統合し、リニューアルしました。

ぷれいす東京Webリニューアル・チーム
（生島／大槻／原田／佐藤）

「web NEST」のサイト運営を見直す必要が出てきて、議論している中で「ぷれいす東京Webと統合するのが得策だ」となったときから、大仕事が始まった。

「web NEST」の実績は、運営委員のひとり矢島嵩の言う

『この15年間を俯瞰してみると、
抗HIV薬と情報システムが劇的に変わり、
あえて言葉を選ばずに言えば、
ヘビーなエイズが、イージーな慢性感染症に変わりました。

それでも僕の中にある厳しいイメージは払しょくされていなくて、
もしかしたらそんな僕みたいな人が、
いくつもの中継基地を経たインターネットの先の先にいるような気配がいまでもします。

でも、時代は移ろい、
僕のこの感覚はいまの時代の主流ではなくなっているかもしれません。
おそらく人もシステムももっと軽やかなものにバージョンアップされるべき時期が来ている、
僕もそう思っています。』

～web NEST「運営委員のつぶやき」から一部を引用

がそれを表している。多くの方々が支えてくれた「web NEST」への思いが、多くのHIV陽性者を支えてきたのだと思う。その思いを新しいチームも引き継いで行きたい。

新Webサイトのテーマは「陽性者向け」「陰性者向け」という縦割りをなくし、「HIVをリアルに感じ生活するさまざまな人たちの声に触れやすくする」ことである。スマートフォン対応を考え、ヴィジュアルを多用していたり、生の声を多くの方に届けられるよう配慮した。

開設して6ヶ月以上経って振り返ると、あれだけ考えて構成したが、ここを変えられないか？ここの導線を良くしたい、と意見が飛び交う。まだまだ変化を続けている。でもまだ十分ではない。是非、ぷれいす東京の新サイトにもお越しください。そして感想や意見を投げかけてください。

リニューアルの顛末については、ぷれいす東京NEWSLETTER No.86（2015年8月号）に詳細を掲載しています。

「web NEST」の実績をもっと知りたい方は、「ネスト・プログラム」＞「from web NEST」からご覧ください。

2. HIV/エイズ関係の講師派遣と学会参加

講師派遣のご依頼には、性教育やセクシュアリティ、福祉、心理などの専門家のスタッフが対応しています。講師派遣をご希望の方は、ぷれいす東京Webサイトの「講師派遣・研修の依頼」のページから「講師派遣依頼書」をダウンロードして必要事項をご記入の上、事務所にメール（office@ptokyo.org）かFAX（03-3361-8835）でご送付ください。

2015年度には、のべ58ヵ所（うち13ヵ所は教育機関）に出講しました。詳しくは、52ページからの「部門報告（研究・研修）」をご覧ください。

今年度はまた、以下の学会にスタッフが参加し、ぷれいす東京の活動内容などから発表を行っています。詳しくは、「部門報告（研究・研修）」をご参照ください。

・11月30日～12月1日
　第29回日本エイズ学会学術集会・総会（東京）

3. 外部委員会への参加

生島や池上らが、国や自治体などをはじめとする外部機関にHIV/エイズ関係の委員として参加しています。

東京都内の医療機関などでは、行政や民間団体などと垣根を越えて連携しつつ、HIVにどう向きあっていくのかを協議する場が設けられています。ぷれいす東京は、会議の場への参加のみにとどまらず、会議をきっかけとして保健所や医療機関からくる問い合わせや相談に対して積極的に協力を行っています。

・厚生労働省エイズ動向委員会 委員
・厚生労働省エイズ対策政策研究事前評価委員会 委員
・東京都エイズ専門家会議 委員
・独立行政法人国際協力機構（JICA）エイズ対策支援委員会 委員
・日本エイズ学会 監事
・日本性教育協会運営委員会 副委員長
・公益財団法人エイズ予防財団「同性愛者等に対するHIV/エイズ予防啓発事業」連絡協議会 委員
・独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構「雇用管理サポート事業」協力専門家
・公益財団法人友愛福祉財団 理事
・新宿区HIV／AIDS関係機関ネットワーク連絡会 委員
・東京都「若者の自立等支援連絡会議」委員
・葛飾区エイズ連絡会議 委員
・一般社団法人ブリッジハートセンター東海「免疫機能障害者への支援と理解促進事業」検討委員会 委員
・特定非営利活動法人エイズ＆ソサエティ研究会議 副代表

4. ぷれいす東京事務所のご案内

○事務所開所時間：月～土/12:00 ～ 19:00
○事務所所在地：〒169-0075
東京都新宿区高田馬場4-11-5 三幸ハイツ403
○電話：03-3361-8964
○FAX：03-3361-8835
○E-mail：office@ptokyo.org
○活動会員：218名（うち議決権をもつ会員：51名）
○賛助会員：個人67名、団体5団体
○役員名簿：理事の任期は2年で、現在の理事は以下の8名です。
・生島 嗣（代表・運営委員長を兼任）
・牧原 信也（運営委員長を兼任）
・池上 千寿子
・樽井 正義
・根岸 昌功
・兵藤 智佳
・山下 敏雅
・佐藤 郁夫
○監事：常住 豊
○事務所スタッフ：フルタイム2名、パートタイム6名
○定例会議：事務局会議（毎月2回）、運営委員会（毎月1回）
理事会（随時）

●業務受託事業

厚生労働省
・「HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業（ピア・カウンセリング等による支援事業）」

東京都
・東京都夜間休日HIV/エイズ電話相談
・東京都HIV検査情報webの制作
（http://pc.tokyo-kensa.jp/）
・東京都によるゲイ雑誌・webへの広告制作

企業からの事業受託／後援事業
・鳥居薬品株式会社の後援で、冊子「Living with HIV ～身近な人からHIV陽性と伝えられたあなたへ～」を無償で配布。また、冊子の手記とその活用方法などを紹介するWebサイトを開設。
・総合情報サイト「All About」の「HIV感染症」ガイドを担当。

●協働プロジェクト

・HIV陽性者参加支援スカラシップ
・TOKYO AIDS WEEKS 2015

●活動助成をいただいた団体

公益財団法人東京都福祉保健財団
ザ・ボディショップ ニッポン基金
公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団

ぷれいす東京では、事務局や各事業の運営を維持拡充するために、各種団体に事業助成などの申請を行っています。助成団体などについての情報提供や、申請および報告作業などにご協力いただける場合には、事務所までご一報いただければ幸いです。

●寄付をいただいた団体

アッヴィ合同会社、EY税理士法人、ヴィーブヘルスケア株式会社、MSD株式会社、オフィスTwo I、聖公会東京教区、中外製薬株式会社、TQC東京給水クルー、にじいろ安場、Pharma Delegates、ファンドレイジングヨガ（50音順、敬称略）

～以下は、募金箱によるご寄付～
LGBT HEALTH TALK、News Café（敬称略）、ぷれいす東京・多目的室募金箱

多くの個人の方からもご寄付をいただきました。お名前の掲載は控えさせていただきますが、心よりお礼申し上げます。

また、ぷれいす東京では、2015年11月から認定NPO法人化を目指してキャンペーンを行い、寄付サポーターを募集してきました。多くのみなさまのご協力のおかげで、認定NPO法人の申請に必要な、「2014年4月から2016年3月までの2年間に、3,000円以上の寄付者（サポーター）200人以上」という目標を達成することができました。ご支援いただき、心より感謝申し上げます。ほんとうにさまざまな方々に支えられていることを実感いたしました。2016年度より、認定NPO法人の申請に向けて準備をすすめてまいります。どうぞ引き続きご支援をお願いいたします。

5. ぷれいす東京事務所の日常活動

ぷれいす東京の事務所は、月～土の12 ～ 19時にオープンしています。フルタイム・スタッフ2人、パートタイム・スタッフ6人に加え1人が部門コーディネーターとして活動しています。それ以外に、事務所ボランティアが人員の少なさをカバーしてくれています。

○部門コーディネーター

〔ホットライン部門〕	佐藤
〔Sexual Health Project部門〕	生島
〔Gay Friends for AIDS部門〕	sakura
〔ネスト部門〕	佐藤、加藤、原田
〔バディ部門〕	牧原
〔HIV陽性者と周囲の人/確認検査待ちの人への相談サービス部門〕	生島、牧原
厚生労働省受託事業	佐藤

〔研究・研修部門〕　生島
〔事務・総務部門 経理担当〕　伊澤

●新人スタッフ合同研修の実施

牧原 信也

恒例の「新人ボランティアスタッフ 合同研修会」を今年度も行いました。今回で14年目を迎えましたが、今年も多くの参加者があり、盛況のうちに終えることができました。多くの方が活動に関心をもち、ぷれいすの活動を支えていただけることをうれしく思います。新しいスタッフの加入は、他のスタッフにとっても刺激があり、うれしいものです。今回も講義形式とワークショップ形式を織り交ぜた、ぷれいす東京のオリジナルプログラムで3日間開催しました。

▼合同研修オリエンテーション

8月30日(日)　14:00～16:00
於：新宿NPO協働推進センター　参加者合計29名(個別も含む)

▼新人スタッフ合同研修

9月6日(日)・13日(日)・22日(木・祝)　10:00～17:00
於：新宿NPO協働推進センター　参加者25名
講義は、1日3～4コマを3日間開催。1コマは50分～90分、休憩10分。プログラムの内容は以下のとおり。

○9月6日(日)

1. 社会的な背景　池上千寿子
2. 医学的基礎知識① HIVの基礎知識と検査法　福原 寿弥
3. 手記を読むワークショップ　スタッフ
4. セクシュアリティの多様性について　大槻 知子

○9月13日(日)

1. 陽性者の社会生活　生島 嗣
2. 医学的基礎知識②　性感染症の基礎知識　福原 寿弥
3. セイファーセックス・リスクアセスメント　スタッフ
4. ネストプログラムの取り組み　加藤 力也/佐藤 郁夫

○9月23日(水・祝)

1. 制度や社会サービス　牧原 信也
2. エゴグラムと交流分析　野坂 祐子
3. 相手のある保健行動～コンドーム使用と使用依頼～　スタッフ
4. 3日間の振返り/今後の活動について

●ボランティア交流会の開催

「新人ボランティアスタッフ 合同研修会」を経由して、ぷれいす東京のさまざまな部門で多くのボランティアさんが活動しています。普段、部門をまたがって交流をもつことはなかなかできませんが、今年初めてすべてのボランティアを対象に、交流会を開催しました。

Sexual Health Projectで活動するスタッフ数名が中心となり、企画・運営を行ってもらいました。ゲームなどのお楽しみ企画もあり、集まった30名(運営スタッフを含む)はとても楽しい時間を過ごしました。今後も継続して行く予定です。

●Webサイトの運営

ぷれいす東京のWebサイトは、2015年7月31日に、HIV陽性者とそのパートナーや家族、ともだちのためのサイト「web NEST」と統合してリニューアルし、スマートフォン対応をしました。Gay Friends for AIDS(Gフレ)部門のサイトの他、厚生労働科学研究班の「地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト」、長期療養シリーズのウェブサイト「HIV陽性者の視点で読み解く 長期療養時代」など、情報豊富な各サイトも運営しています。また、冊子の無償配布とともに、「Living with HIV　～身近な人からHIV陽性と伝えられたあなたへ～」、ジャンププラスとの共同プロジェクト「とも・ナビweb」も運営しています。

○WebサイトURL

・ぷれいす東京(PC版・スマホ版)
http://www.ptokyo.org/
・Gay Friends for AIDS　http://gf.ptokyo.org/
・地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト
http://www.chiiki-shien.jp/
・Living with HIV
～身近な人からHIV陽性と伝えられたあなたへ～
http://lwh.ptokyo.org/
冊子無料配布プロジェクトを実施中
特定非営利活動法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスとの共同プロジェクト
・HIV陽性者の視点で読み解く 長期療養時代
http://chokiryoyo.ptokyo.org/
・とも・ナビweb　～HIVで通院されている皆さまへ～
http://www.janpplus.jp/tomonavi/

その他にも、Facebook（http://www.facebook.com/PLACETOKYO）やTwitter（http://twitter.com/placetokyo）といったソーシャル・メディアも活用し、Web上で随時情報発信を行っています。

●冊子などの制作物

ぷれいす東京では、HIV陽性者のサポートや一般へ向けた予防啓発など、さまざまな活動の成果を冊子などの形にまとめています。これらの冊子は、陽性者や周囲の人などの当事者、ぷれいす東京にボランティアなど何らかの形で関わってくださっている方々、あるいは教育やセクシュアリティ、医療、福祉などの専門家をはじめ、広くさまざまな層へ向けて一部を除いて原則有償実費にて頒布しています。

以下の冊子をはじめとする制作物をご希望の方は、ぷれいす東京Webサイト「冊子・頒布物」のページから「印刷物等申込票」をダウンロードして必要事項をご記入の上、事務所にメール（office@ptokyo.org）かFAX（03-3361-8835）でご送付ください。各冊子類の内容も同サイトにて紹介していますので、ぜひご覧ください。

▼HIV陽性者の手記など「生の声」をまとめた冊子

【Living Together シリーズ】

・『Living with HIV　～身近な人からHIV陽性と伝えられたあなたへ～』HIV陽性者のパートナー、家族、友だち、職場の仲間など、身近な人からHIV陽性と伝えられた人とHIV陽性者による計24編の手記と、基礎知識やデータを取りまとめた短いコラムを掲載。通知を受けた人への支援ツールとしても活用できる。2013年制作（A5サイズ　60ページ）。2014年第2刷、2015年第3刷。
鳥居薬品様のご協力により、無償配布を行っています。

・『Living Together "Our Stories"』
さまざまな立場の方から寄せられた19編の手記とチャーミングな写真が、HIV/AIDSとともに生きている人もそうでない人も「すでにみんな一緒に生きている」ことを実感させてくれる。「Sexual Healthコラム」も収載し、学校や家庭、職場で活用できる教材。2005年制作（A5サイズ4色刷り36ページ）。

・『Living Together LETTERS』
HIV陽性者の手記を本人の手書き原稿のまま掲載し、おもにゲイ・バイセクシュアル男性向けに作成。2004年制作（B5サイズ1色刷り20ページ）。

▼予防啓発活動を通じて生まれた冊子

【Sexual Healthシリーズ】

・『Sexual Health Book ②』
Sexual Health シリーズのニューフェイスSexual Health Book ②が誕生。感染予防、避妊、デートDVなど性の健康情報だけでなく、性の多様性とコミュニケーションのポイントについてもとりあげ、わかりやすく、しかも自分の事として気づくための工夫がなされている。学校、家庭、職場などで教材として活用できる冊子。2014年制作（A6サイズ4色刷り16ページ）。

・『Sexual Health ゲーム編』
授業やイベント、セミナー等で活用できる、「ゲームで遊びながら学ぶ性の健康」のノウハウが満載。2005年制作（A5サイズ2色刷り32ページ）。

▼HIV陽性者へのケア活動を通じて生まれた冊子（陽性者およびそのパートナー、家族には無償頒布）

・『Life & Medicine ～日常生活の中で 服薬を続けるヒント～』（制作：ぷれいす東京、発行：ヤンセンファーマ株式会社）
生活者の視点からHIV陽性者の服薬を支援することを目的に作られたツール。陽性者20名に対するインタビューと、全国の陽性者151名から回答を得たアンケートで構成。2012年制作（A5サイズ4色刷り40ページ）。
PDF版は、ヤンセンファーマ株式会社のWebサイトでダウンロード・閲覧が可能。（http://www.janssen.com/japan/patient/hiv）

【長期療養シリーズ】HIV陽性者へのインタビューやアンケートをまとめた冊子

・『239人のHIV陽性者が体験した検査と告知』（共同編集・発行：日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、協賛：鳥居薬品株式会社）
10名のHIV陽性者へのインタビュー調査と、249名のHIV陽性者が回答をよせた検査と告知に関するアンケート調査で構成。2011年制作（B5サイズ4色刷り40ページ）。

・『長期療養時代の治療を考える』（共同編集・発行：日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、協賛：鳥居薬品株式会社）
147名のHIV陽性者へのアンケートの回答分析と豊富な自由記述で構成。2009年制作（A5サイズ4色刷り40ページ）。

・『長期療養生活のヒント』（共同編集・発行：日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、協賛：鳥居薬品株式会社）
HIV陽性者124名へのアンケート結果などを掲載。2007年制作（A5サイズ4色刷り32ページ）。

▼その他制作物（詳しくはお問い合わせください）
・日本エイズ学会学術集会・総会 HIV陽性者参加支援スカラシップ 報告書（第20～29回）
ぷれいす東京とはばたき福祉事業団、日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスが共同発行。
・ぷれいす東京年間活動報告書（2009～2014年度）
・Living Together Manual
・Hの強化書・実践編
・OUR DAYS
・OUR DAYS [Episode 2]
・たんぽぽ
ぷれいす東京のスタッフが制作に協力し改訂を重ねた、東京都発行の新陽性者向け冊子。
・職場とHIV/エイズハンドブック　―HIV陽性者とともに働くみなさまへ―
ぷれいす東京のスタッフが編集協力した、東京都発行の冊子。

●マスメディアへの協力
今年度もテレビ・ラジオ番組、新聞や雑誌など各種メディアからの取材依頼がありました。新聞やゲイ雑誌の取材などにも協力・寄稿し、情報発信をサポートしました。また、研究成果や相談対応に基づく情報提供、可能な範囲でのHIV陽性者の紹介を行いました。事前に企画書を提出していただき、内容の妥当性や取材協力者のプライバシーへの配慮などを確認しています。

・エイデル研究所　季刊セクシュアリティ70号「信じて自分の秘密を打ち明けることから変化は始まった」(5月発行)
・毎日新聞「家庭の性教育考える座談会　新宿で27日」(6/19掲載)
・東京新聞「家庭のなかの性教育　どう子どもと話す？」(6/28掲載)
・産業医・産業看護職の立場から難病患者・中途障害者の就労支援を考える研究会　第2回報告書「良好事例と難病法を学ぶ」(6月発行)
・内閣府自殺予防週間 Yahoo! JAPAN PR企画「ゲートキーパーズカフェ」(9/1掲載)
・朝日新聞「課題まだ 社会の理解を　上京でAIDS文化フォーラム」(10/4掲載)
・京都新聞「エイズの理解深める　上京でフォーラム　性の文化や多様性」(10/4掲載)

・ ひょうご人権ジャーナルきずな2015年11月「12月1日のエイズデーにHIV/エイズへの理解を深めよう」(11月発行)
・Recruit Works Institute Works 133号「今号のフォーカス HIV陽性者　想像をリアルに変えて、不安という感情と決別する」(12/10発行)
・ エフエムおのみち　世界エイズデー特番に協力(12/1, 12/6, 12/12放送)
・Webサイト　UNAIDS Feature story「Japan hosts major conference on financing the response to AIDS, tuberculosis and malaria」(12/17掲載)
・日本評論社 こころの科学186号「HIV陽性者支援の現場から--MSM(男性とセックスをする男性)への支援を中心に」(2月発行)
・ポプラ社　いろいろな性、いろいろな生き方1 いろいろな性ってなんだろう？「HIV・HIV感染症--正しく知って、偏見のない社会を」(2016年4月発行)
・ゲイ雑誌「サムソン」に寄稿　2015年6月号(2015/4発売)～2016年5月号(2016/3発売)に連載中
・ゲイ雑誌「Badi」に寄稿 2015年6月号(2015/4発売) ～2016年2月号(2015/12発売)まで連載

●協働プロジェクトの窓口・調整など

2015年度も、他団体との協働プロジェクトなどに引き続き参画しました。

2006年より日本エイズ学会学術集会・総会の開催にあわせて実施している「HIV陽性者参加支援スカラシップ」(社会福祉法人はばたき福祉事業団、特定非営利活動法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスとの協働運営から、2015年8月に「一般社団法人HIV陽性者支援協会」に継承)では、全国のHIV陽性者38名の学会参加を支援したプログラムの運営に関わりました。詳しくは、Webページ(http://hiv-ppaa.jp/)をご覧ください。

また、「Living Together計画」として、HIVのリアリティを伝えるプロジェクトを、特定非営利活動法人aktaと特定非営利活動法人ぷれいす東京が窓口になって行っています。

今年度はさらに、TOKYO AIDS WEEKS 2015の立ち上げを支援し、第29回日本エイズ学会学術集会のプレイベントを中心に、2015年11月21日(土)から12月12日(土)に、「TOKYO AIDS WEEKS 2015　UPDATE YOUR REALITY～HIV/エイズをめぐる現実はものすごいスピードで変化している」を開催しました。詳しくは、Webサイト(http://www.ca-aids.jp/taw/)をご覧ください。

○ご寄付をいただける場合には、下記の口座宛にお振込をお願いいたします。会員の方が会費を納入いただく場合も、同じ口座宛にお振込ください。クレジットカードによる寄付(1回ごと/毎月の定額)もできます。また、不要になった本やDVD、CD、ゲームなどを「BOOK募金」に送ることで、ぷれいす東京に寄付をすることもできます。

お振込先

・ ゆうちょ銀行振替口座　00160-3-574075
「特定非営利活動法人ぷれいす東京」
※ご送金いただく際に、通信欄に寄付か会費納入かご一筆ください。専用の振替用紙もあります。

・三井住友銀行　高田馬場支店
普通預金　2041174
「特定非営利活動法人ぷれいす東京」
※銀行からお振込いただいた場合は、お手数ですがその旨をご連絡いただければ幸いです。

※クレジットカード決済による寄付とBOOK募金の詳細は、ぷれいす東京Webサイトの案内「寄付・応援する」をご覧ください。

1. 活動のあらまし

HIV/エイズに関して、不安や疑問がある人が相談や情報提供を受ける場として、

＊「ぷれいす東京HIV/エイズ電話相談」

＊「東京都HIV/エイズ電話相談（夜間/休日）」（東京都委託事業）

を運営。そのための各ミーティングの開催・諸機関との連絡等を行っている。

2. スタッフの構成（2016年3月現在）

・コーディネーター　1名
・世話人　5名
・スタッフ　27名（実働）

3. 活動内容

○「ぷれいす東京HIV/エイズ電話相談」

電話番号：03（3361）8909［1回線］
実施日：日曜日　13：00～17：00

○「東京都HIV/エイズ電話相談（夜間／休日）」（東京都委託事業）

電話番号：03（3292）9090［2回線］
実施日：金曜日　18：00～21：00
（但し、祝日の場合は、14：00～17：00）
土／日曜日　14：00～17：00

○スタッフミーティング

毎月1回、第3日曜日 11：15 ～ 13：15
合わせて、ケースカンファレンスや学習会を行っている。

○フォローミーティング/個別ミーティング

不定期。定例ミーティングに参加できなかったスタッフのフォローを行った。

○世話人会

部門内の調整・企画の場として有志により構成。ホットライン部門研修に携わっている。
毎月1回、第3日曜日　10：00 ～ 11：00にミーティングを開催。

○東京都HIV/エイズ電話相談連絡会

東京都エイズ対策係と共同委託先のHIVと人権・情報センターの三者による定例会議。
毎月第2金曜日に都庁にて開催している。

○東京都HIV/エイズ電話相談連絡会全体会

東京都エイズ対策係と共同委託先のHIVと人権・情報センターに係るスタッフで構成され、2012年度から始まった。年1回開催。

4. 2015年度の相談状況

1)「ぷれいす東京HIV/エイズ電話相談」

●相談実績報告（2015年4月1日～2016年3月31日）

年間活動日数	51日間
総相談時間数	204時間
年間相談数	508件 （男性450件　女性57件　不明1件 うち陽性者7件　確認検査待ち3件　陽性者周囲3件　確認検査待ち周囲1件）
活動スタッフ数	延べ55名

●相談件数〈ぷれいす東京〉

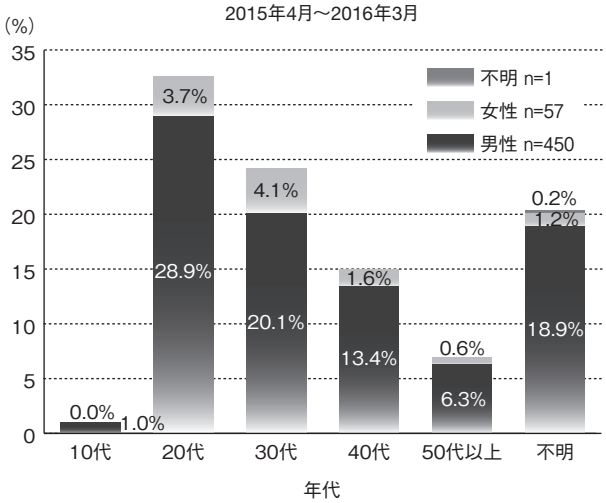
今年度の相談件数は、昨年度より29件増の508件だった。月平均/42.3件、1日平均/10.0件で、昨年と比べると月に2.4件の増加だった。過去5年間の推移は、524件、490件、501件、479件、508件と、この5年間で2番目に多い数字だった。月別の変動は、昨年度と同様の動きを示した。

●クライアントの内訳〈ぷれいす東京〉〔グラフ1〕

クライアントの内訳のうち、男女割合は、「男性」88.6%、「女性」11.2%、「不明」0.2%だった。男女の割合は5年間同様の傾向で、ほとんど変動はなかった。

年代は、「20代」が32.6%と最も多く、「30代」が24.2%、「40代」が15.0%、「50代以上」が6.9%、「10代」が1.0%の順で、「40代」が2.4%、「50代以上」が2.5%増加したが、他の年代は昨年度より減少した。

グラフ1　年代と性別（ぷれいす東京）n=508
2015年4月～2016年3月

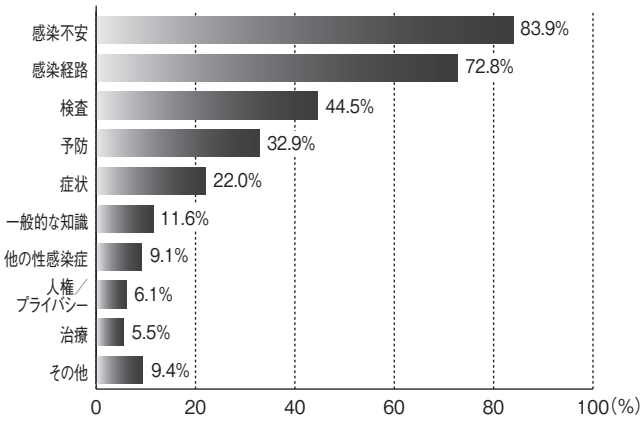


●相談内容（複数回答有）〈ぷれいす東京〉〔グラフ2〕

相談内容の内訳は、「感染不安」が中心で全体の83.9%、昨年度より4.2%増加した。次いで「感染経路」72.8%、「検査」44.5%、「予防」32.9%、「症状」22.0%までは順位に変動はなかった。

以下は「一般的な知識」11.6%、「その他」9.4%、「他の性感染症」9.1%、「人権・プライバシー」6.1%、「治療」5.5%の順となり、「一般的な知識」の3.5%の増加が目立った。

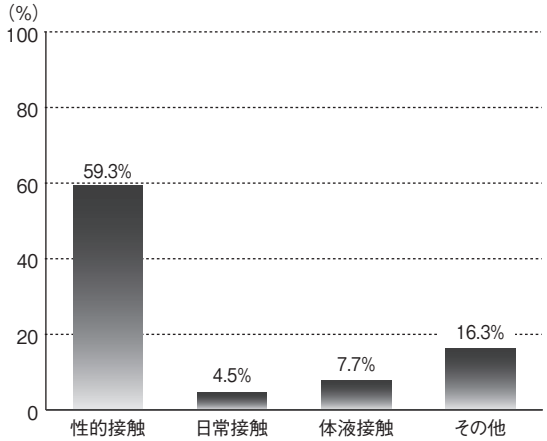
グラフ２　相談内容（ぷれいす東京）n=508 ＊複数回答有
2015年4月～2016年3月



●感染不安の内訳（複数回答有）〈ぷれいす東京〉〔グラフ3〕

「感染不安」のうち、「性的接触」をきっかけとしている相談が、59.3%と多くを占めているが、昨年度より21.6%も減少した。「日常接触」の相談は4.5%、「体液接触」は7.7%、「その他」の相談は16.3%で、他は昨年度ほぼ同様の数字だった。

グラフ３　感染不安の内訳（ぷれいす東京）n=426 ＊複数回答有
2015年4月～2016年3月



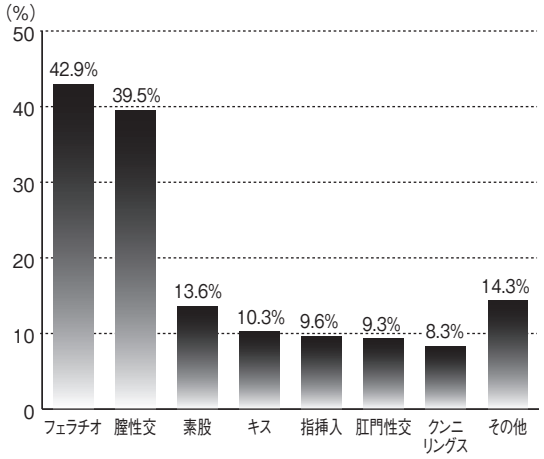
●思い当たる行為の内訳と予防（複数回答有）〈ぷれいす東京〉〔グラフ4〕〔グラフ5〕

「性的接触」の相談の内訳を見ると、「フェラチオ」が42.9%、「膣性交」が39.5%、続いて「素股」13.6%、「キス」10.3%で、「（膣or肛門）に指挿入」9.6%、「肛門性交」9.3%、「クンニリングス」8.3%と続いた。「素股」の 順位は昨年と変わらず、「キス」と「（膣or肛門）に指挿入」、「肛門性交」と「クンニリングス」がそれぞれ入れ替わった。

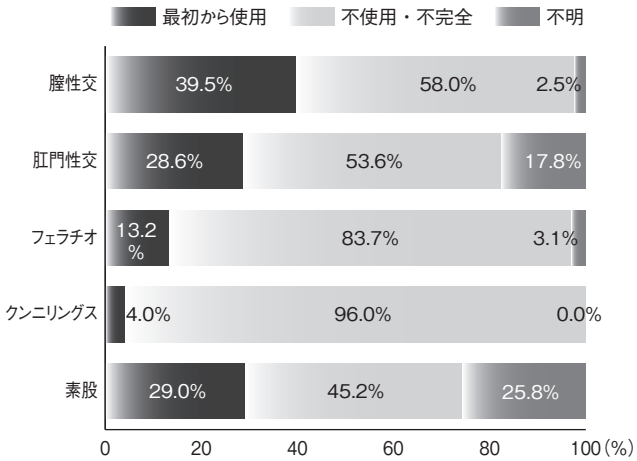
〔グラフ5〕では、行為別のコンドーム使用（クンニリングスでは何らかの予防策）の割合がわかるが、あくまでも感染不安の相談から見える数字である。

相談内容においての予防率が、「膣性交」で昨年度41.9%⇒今年度39.5%、「肛門性交」は20.0%⇒28.6%、「フェラチオ」で7.8%⇒13.2%、「クンニリングス」では3.2%⇒4.0%、「素股」では8.8%⇒29.0%とそれぞれ変動した。特に「素股」が20.2%も増加した。

グラフ４　思い当たる行為（ぷれいす東京）n=301 ＊複数回答有
2015年4月～2016年3月



グラフ５　思い当たる行為での予防（ぷれいす東京）n=508
2015年4月～2016年3月



●検査について（複数回答有）〈ぷれいす東京〉〔グラフ6〕

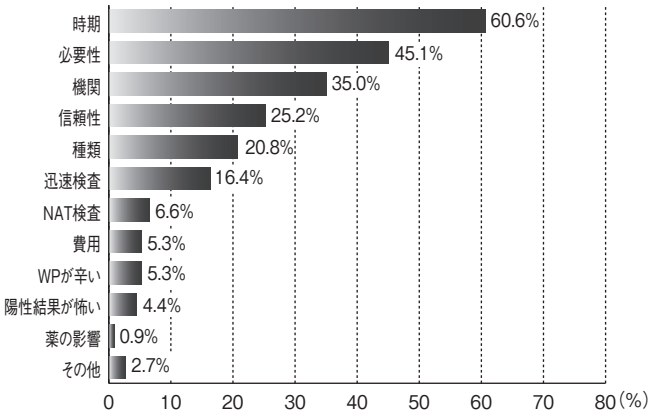
検査についての相談件数全体は、昨年度の61.2％から44.5％と大幅に減少した。

内訳は、「時期（ウィンドウピリオド）」が60.6％と圧倒的に多く、続いて「必要性」45.1％、「機関」35.0％、「信頼性」25.2％、「種類」20.8％、「迅速検査」16.4％となり、以下は「NAT検査」「費用」「ウィンドウピリオドが辛い」「陽性結果が怖い」「薬の影響」の順で、10％を切っていた。

行政や検査機関によってウィンドウピリオドの判断にばらつきがあるので、「時期」の確認や、受けた検査の信頼性、更には再度受けた方が良いのかどうかなど、受検者の混乱が数字に出ている。

ネットでは様々な情報が行き交っているので、正しい判断ができないと、混乱が大きくなる。

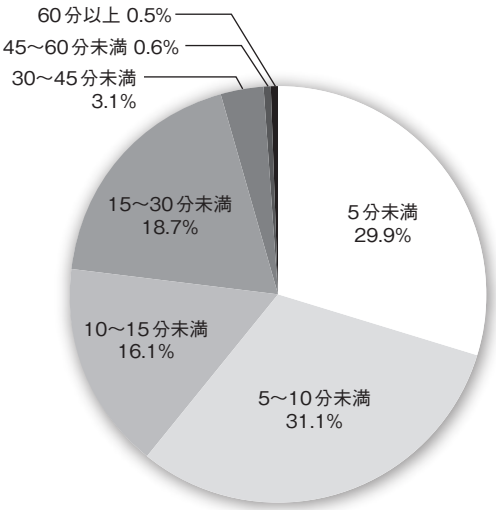
グラフ6　検査相談内容（ぷれいす東京）n=226 ＊複数回答有
2015年4月～2016年3月



●相談時間〈ぷれいす東京〉〔グラフ7〕

今年度は10分以上の相談が昨年度の56.0％から39.0％に下がった。相談時間は例年通り、全体の96.0％が30分未満に収まっている。全体的には昨年度と同様の傾向を示した。

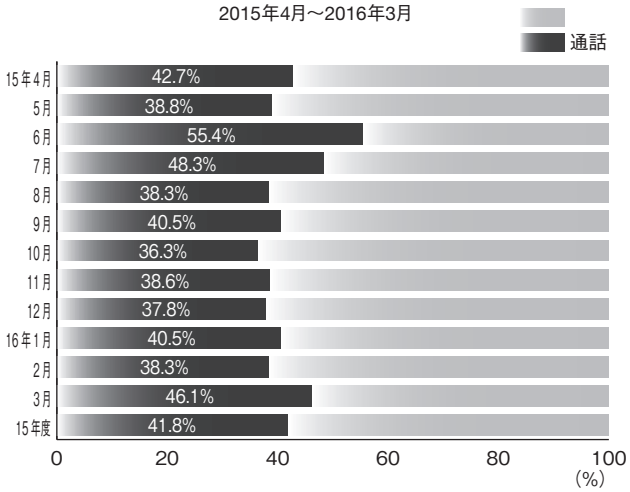
グラフ7　相談時間（ぷれいす東京）n=508
2015年4月～2016年3月



●回線占有率〈ぷれいす東京〉〔グラフ8〕　算出方法：総通話時間／総相談時間（超過は分母に加算）

回線占有率は昨年度、20％台が1ヶ月で、他は40～50％台で推移した。昨年度、2ヶ月あった50％台が、今年度は、1ヶ月だけだった。昨年度なかった30％台が6ヶ月あり、年間平均は41.8％で、約2％減少した。

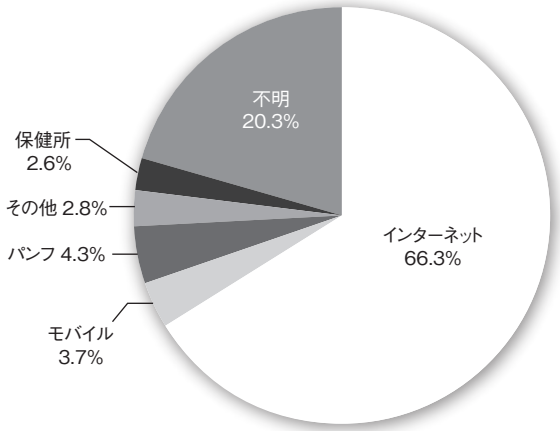
グラフ8　回線占有率（ぷれいす東京）
2015年4月～2016年3月



●情報源〈ぷれいす東京〉〔グラフ9〕

この相談を知った「情報源」は、「インターネット」が66.3％で、他を圧倒している。「モバイル」が6.2％から3.7％に減少したが、スマートフォンの普及により「モバイル」ではなく、「インターネット」と回答する例が多いのではないかと想像する。「インターネット」と「モバイル」を合わせると70.0％となり、大半を占めている。他は「エイズパンフ」4.3％、「保健所」2.6％と数字は小さいが、貴重なアナログ媒体である。

グラフ9　情報源（ぷれいす東京）n=508
2015年4月～2016年3月



●他県の割合〈ぷれいす東京〉

東京都外からの相談は274件(53.9%)と、半数以上を占めているが、昨年度より約4%減少した。

●陽性者及びその周囲への対応〈ぷれいす東京〉

HIV陽性者からの相談は7件で、昨年度より3件減少した。確認検査待ち(スクリーニング検査が陽性/要確認/判定保留/擬陽性で、確認検査の結果が出ていない:以下、確認検査待ち)が3件に増加。陽性者周囲の相談が1件だった。ぷれいす東京の相談における陽性者率は、1.4%だった。

2)「東京都HIV/エイズ電話相談(夜間/休日)」
(東京都委託事業)

この相談は東京都から委託を受け、「HIVと人権・情報センター東京」と分担して行っている事業である。以下は「ぷれいす東京」が担当し、対応したものについて報告する。

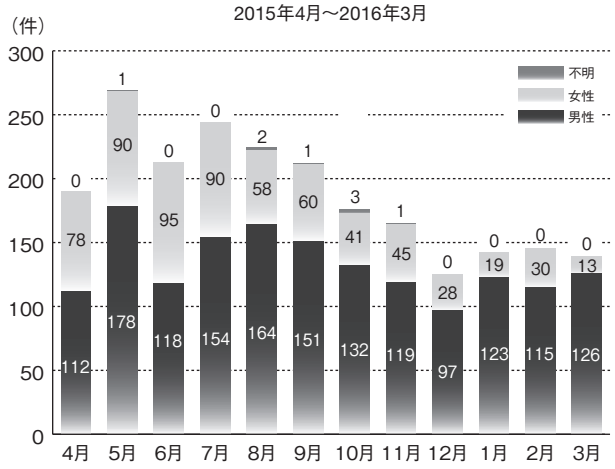
●相談実績報告(2015年4月1日～2016年3月31日)

年間活動日数	153日間
総相談時間数	459時間(延べ918時間)
年間相談数	2,244件 (男性1,589件　女性647件　不明8名 うち陽性者19件　確認検査待ち12件　陽性者周囲8件　確認検査待ち周囲4件)
活動スタッフ数	延べ337名

●月別相談件数〈東京都〉〔グラフ10〕

今年度の相談件数は、昨年度より189件減の2,244件だった。月平均が187件で、1日の平均は14.7件だった。昨年度より1ヶ月あたり15.8件減少した。200件を超える月は昨年度と同様に、今年度も5ヶ月はあったが、10月以降の相談件数が大幅に落ち込んでしまった。

グラフ10　月別相談件数(東京都/男女別) n=2244
2015年4月～2016年3月



●クライアントの内訳〈東京都〉

性別の内訳は、「男性」70.8%、「女性」28.8%、「不明」0.4%だった。昨年度に続いて「女性」が2.5%増えた。「女性」からの相談も一定数来るようになった。

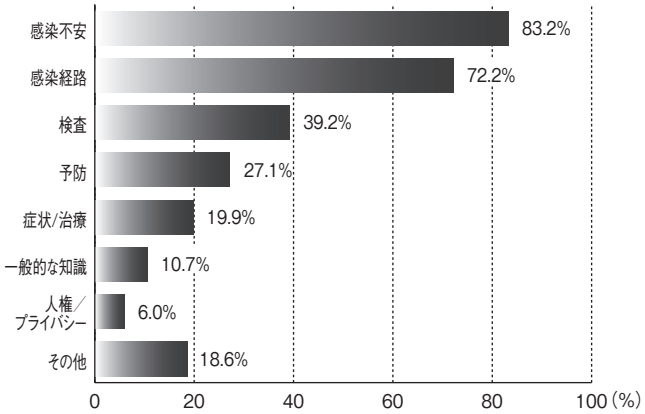
年代は、「30代」21.8%、「20代」が20.1%、「40代」15.4%、「50代以上」10.5%、「10代」1.3%の順だった。「20代」が昨年度より9.8%も減少したので、「20代」と「30代」が入れ替わった。

「50代以上」が2.9%増えたが、他は変動がなかった。

●相談内容(複数回答有)〈東京都〉〔グラフ11〕

相談内容の内訳は、昨年度と変わらず「感染不安」が83.2%で一番多かった。続いて「感染経路」が72.2%、「検査」が39.2%と続いた。「予防」27.1%、「症状/治療」19.9%、「その他」18.6%、「一般的な知識」10.7%で、「人権/プライバシー」6.0%の順だった。

グラフ11　相談内容(東京都)　＊複数回答あり
2015年4月～2016年3月



●相談時間〈東京都〉〔グラフ12〕

10分以内の相談は67.0%と半数以上を占めた。全体の95.0%が30分未満に収まり、60分以上の相談は0.4%と少ない。傾向は昨年度と同様だった。

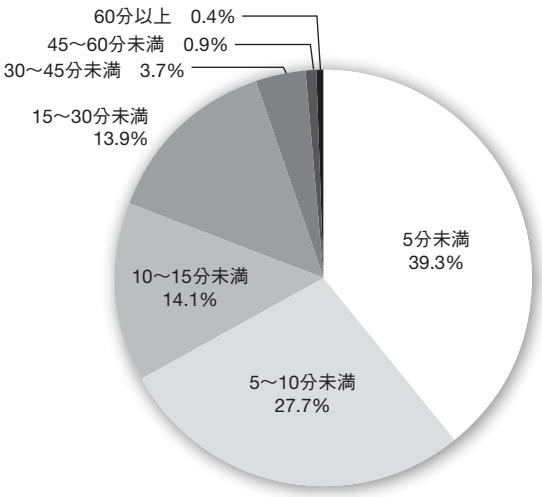
●回線占有率〈東京都〉〔グラフ13〕　算出方法:総通話時間/総相談時間(超過は分母に加算)

今年度の回線占有率は、20%から40%台で推移した。昨年度と同様に50%以上の月が一度もなく、逆に40%を切った月は9ヶ月あった

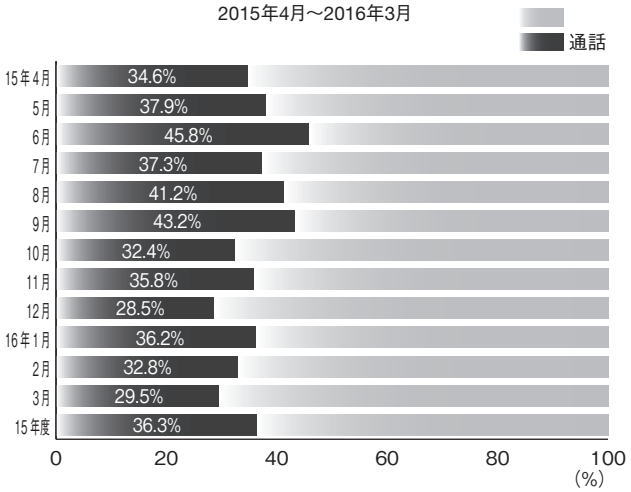
●情報源〈東京都〉

この相談を知った「情報源」は、「インターネット」56.5%、「モバイル」4.0%と傾向は昨年度と同様だった。他は「不明」が31.6%、「エイズパンフ」2.6%、「保健所」2.0%で、「モバイル」が少し減ったこと以外の変化はなかった。

グラフ 12　相談時間（東京都）n=2244
2015年4月～2016年3月



グラフ 13　回線占有率（東京都）
2015年4月～2016年3月



●他県割合〈東京都〉

東京都外からの相談は1,092件（48.7％）を占め、昨年度とほぼ変わらなかった。「東京都」の電話相談だが、全国のニーズに対応していることがわかる。

●陽性者及びその周囲への対応〈東京都〉

HIV陽性者からの相談は19件で、昨年度の43件より大幅に減少した。

確認検査待ちは、13件と増加した。陽性者周囲からは8件だった。東京都の相談における陽性者相談率は、昨年度の1.8％から0.8％に半減した。

3）相談全体のまとめ（ぷれいす東京／東京都）

①相談件数の落ち込み

東京都の5年間の数字は、2,453件、2,251件、2,062件、2,433件、2,244件と推移、ぷれいす東京は、524件、490件、501件、479件、508件という推移を見せていて、単純にHIV/エイズに関心が低くなっていると断定できない状況である。

広報の方法などの見直しの必要性を感じる。

②基本的知識の浸透不足

昨年と同様、HIV/エイズの基本的な知識が理解されていない、誤解しているなどの相談があると、スタッフの年間振り返りで指摘があった。感染経路の知識で、日常接触で不安に感じる人や、同性間／風俗／肛門性交／外国人／不特定多数など、特定の環境でしか感染しないと思っている人がいた。そういった差別・偏見に繋がるイメージしかない人たちの言動を耳にするたびに、HIV陽性者は周囲に陽性と伝えることができないと感じている。80年代のエイズ＝死のイメージ（エイズパニック）は、まだ残っている。電話相談の中でも、積極的に情報をアップデイトする必要があると思う。

③リピーターの相談

今年度もリピーターが存在したが、9月までに集中していた。そのことが件数の推移に反映されている。リピーターの相談は、同じことを繰り返すことや期待する回答を求められたりするので、スタッフには疲労感が残る。また感染の可能性のない相談が多いので、短い時間で終えることが多い。スタッフからは、もう少しじっくりと話しを聞いたら、その人がリピーターにならないかもしれないという意見があった。少しでも相談者の心の声に耳を傾ける必要があると思う。

後半はリピーターが減ったために、本来想定している相談が中心となった。

④対応が難しい相談

電話相談では、スタッフの個性も大切だと思っている。HIV/エイズの電話相談では、微妙な表現をしなければいけないことが多いが、個々のスタッフの表現の仕方を比較したり、部分的に切り取られて追求されることが多くなった。「前回の相談で○○と言われた」「あなたと話して、不安が増した」などと訴えたり、時には激しい怒りをぶつけられることもある。これからもケースカンファレンスを通して、より良い対応を考えたり、スタッフの心のケアをすることも重要だと思った。

⑤陽性者関係の相談

下記のように、とても難しい相談や専門的な相談が増えている。先ずは相談者の気持ちを受け止めるようにしているが、陽性者対応について、陽性者対応の相談員とも連携して、学習会などを積極的に企画する必要がある。

□陽性者

1）感染後半年以内の陽性者

ネットに死ぬ病気と書いてあり不安／感染直後で海外にいる。帰国後のことが心配／生きていけるのか？仕事はできるのか？／医療機関への不信感／ニューモシスチス肺炎で入院。医師から十分な説明を受けていなく不安／間違って連続して服薬をしてしまった／会社にバレる

か？／仕事は続けられるのか？／いきなりエイズになることはあるか？／ここ数日足に力が入らない　など。

2)長期療養中の陽性者

寿命が心配／HIVのことを知られ転居を迫られている／異性愛者で同性愛者と馴染めない／社会やサポート機関へのクレーム／会社の健康診断でバレないか／病気が治らないことや服薬の辛さ／近況報告／生命保険の更新／薬の飲み方／花粉症の薬との飲み合わせ/家族との関係　など。

□確認検査待ちの相談

陽性の時どうなる？擬陽性、感染確率、治療費／ゲイだが、肛門性交はせず、フェラチオだけしかしていなく、ショック／これからの生活が不安／確認検査を受けて結果を待っている。死にたい。この病気は恥ずかしいこと。何年くらいで死ぬか？治療費も高いだろうか／即日検査で判定保留。

リウマチだと判定保留になりやすいか／死ぬイメージしかない病気なので怖い。どうすれば良いかわからない／今月陽性反応が出た。確認検査待ちと言われた。昨年3月にフェラチオをした。その年の5月に陰性。SEXしたがコンドームをつけていた。納得がいかない。など。

□陽性者周囲の相談

陽性パートナーとの今後(不安)×4／パートナーが塞いでいる／パートナーとのSEX／SEX相手からの通知後の不安／陽性者との性行為での不安／母親から息子への対応／友人との日常接触の不安／友人の心配×2／前夫の感染通知から今後／陽性者から性行為後に通知された怒り／SEX相手からの脅迫／離婚問題　など。

5. 活動報告詳細(2015年4月1日～2016年3月31日)

1)活動実績

［シフト稼働状況］*

2)新人スタッフ研修

他部門と共同の募集を実施。合同でのオリエンテーション・基礎学習を行った後、ホットライン部門の専門研修を実施した。毎年のより良い研修になるように修正を加えている。

(1)合同研修事前オリエンテーション

ぷれいす東京の活動理念、各部門からの内容説明など。

(2)ぷれいす東京スタッフ合同研修

HIV活動へ参加する上での基礎的な学習内容を講義。全

＊［シフト稼働状況］

ミーティング等稼働状況	回数	延べ人数	
電話相談シフト	153回	337	
スタッフミーティング	8回	73	4/19, 5/17, 6/14, 8/16, 9/20, 11/15, 12/20, 1/17
東京都電話相談全体会	1回	11	7/20
懇親会＆交流会	3回	57	4/19, 7/20, 3/6
スタッフ講演会	1回	15	4/19
個別ミーティング	2回	6	4/11, 9/12
世話人会	8回	38	4/19, 5/17, 6/14, 8/16, 9/20, 11/15, 12/20, 1/17
HL入力ミーティング	1回	5	12/2
HLオリエンテーション	3回	13	9/26, 9/28, 10/4
HL部門研修	4回	38	10/11, 10/18, 1/24, 2/21
モニタリング	7回	10	
実地研修	20回	26	
新人修了ミーティング	8回	17	12/25, 12/27, 1/22, 2/7, 2/12, 2/29, 3/19, 3/27
東京都電話相談連絡会	11回	33	4/17, 5/15, 6/12, 8/14, 9/11, 10/9, 11/13, 12/11, 1/15, 2/12, 3/11
東京都ボランティア講習会	4回	14	6/29, 8/26, 10/30, 1/7

課程修了後、本人の活動意志を確認し、各部門への専門課程へと進む。

※(1)(2)の詳細については、事務・総務部門の報告を参照

(3) ホットライン部門研修のオリエンテーション

より具体的にホットライン部門の活動内容を説明して、「HIV/エイズの電話相談とは」「検査の基礎」を話し、また研修生へのアンケートも実施した。

〔内容〕

※部門研修オリエンテーション

9月26日(土)・9月28日(月)・10月4日(日):2時間30分

▼グラウンドルールの確認
▼HIV/エイズの電話相談とは?
▼検査の基礎
▼質疑応答/アンケート記入

〔担当スタッフ〕佐藤 郁夫/阿曽 義文

(4) ホットライン部門/部門研修

電話相談員に必要な基礎講義を学習後、各研修生とも相談電話例を用いてロールプレイング、更に実際の電話相談をモニタリング等の個別指導へ。全課程修了後、再度本人の活動意志を確認し、ホットラインスタッフに迎えた。研修の実施・指導はホットライン部門の世話人を中心に、現役スタッフが担当。今年度も、少し内容をリニューアルし、丸2日の日程で行った。

〔内容〕

※部門別研修 ◇1日目◇ 10月11日(日):5時間

▼グラウンドルールの確認
▼ピアカウンセリング 〔講師〕生島 嗣
▼HIV検査について 〔講師〕有手 雅恵
▼相談デモンストレーション(1)及びグループワーク
▼リスクアセスメント
▼相談デモンストレーション(2)及びグループワーク

※部門別研修 ◇2日目◇ 10月18日(日):5時間

▼グラウンドルールの確認
▼検査相談デモンストレーション
▼ロールプレイ実習(1)〜(4)
▼振り返り/モニタリングに入るにあたっての事前説明

※部門別研修 ◇1日目補講◇ 1月24日(日):5時間
※部門別研修 ◇2日目補講◇ 2月21日(日):5時間

〔担当スタッフ〕阿曽 義文/足立 惟子/有手 雅恵/佐藤 郁夫/白幡 素子/染谷 太恵/丸井 淑美

※モニタリング 10月〜各自調整、3時間×1回

現役スタッフの実際の相談をモニタリングして、具体的な対応について振り返りをした。

また現状のニーズや多様な価値観・相談の意味合いなど、個別学習をした。

※実地研修 モニタリング終了後、各自調整、3時間×3回

スーパーバイザーの指導のもと、実際に電話を取り、その後の振り返りで、知識の再確認・相談内容の検討、更に自分らしさを大切にしながら、相談スタイルを確立し、活動参加に繋げた。

6. スタッフの年間振り返り

スタッフの年間振り返りの中で出た、前述の3)相談全体のまとめ(ぷれいす東京/東京都)に網羅できなかった内容を紹介する。

・風俗に行った人からの相談が多い。
・風俗でコンドームを使わなかった相談が多い。
・予防なしのオーラッセックスに、感染の可能性があるということの認識が薄い。
・無言電話が多かった。
・20年前の意見や質問内容と変わらない。
・情報や知識が広まっていない。
・ネット情報に振り回されている人が多い。
・医師や医療従事者からの不適切な発言に振り回されている人も多い。
・陽性になったときに、どのようなことが起こるか。イメージが出来ないと不安が募る。

などの意見がでた。

他に

・相談者がどのような気持ちでかけてくるかを、もう少し受け止めたい。
・ネット社会だからこそ、改めて電話相談の大切さを感じる。

という意見もあった。

7. 来年度の課題

今年度の課題は、以下の3点だった。

(1)各スタッフのスキルアップと人員補強
(2)学習会やケースカンファレンスの充実
(3)次世代の世話人の育成

今年度は8名の補強ができた。しかし様々な理由で活動を休止しているスタッフがいる。なかなか+1稼働(必要最低人数+1名のスタッフを配置)ができなかった。シフト担当や穴埋めを手伝ってくれているスタッフに負担がかかっている。来年度に今年と同様の補強ができるように願っている。

このような状況のため(1)と(3)はスタッフミーティングでケースカンファレンスをすることでいっぱいで、スタッフ学習会はできなかったが、懇親会は3回できた。

来年度は以下の3点が課題である。
(1)各スタッフのスキルアップと人員補強
(2)学習会やケースカンファレンスの充実
(3)次世代の世話人の育成

新年度は、世話人一人が長期休暇に入ることがわかっている。新しいスタッフにも協力を得て、ホットラインの体制強化が一番の目標になる。私も含めて、年々高齢化しているので、新しいスタッフで盛り上げて、次世代の体制作りをしていこうと思う。
１年間ありがとうございました。

［データ入力］小樋井／萩原／前田／山田 恒／横川 峰子
［データ管理・グラフ作成・分析］　山田 恒
［分析・報告］　山田 恒／佐藤 郁夫

性の健康、HIVの啓発を行っていくためのプロジェクトが新たにスタートしました。2015年度の合同研修の参加者を中心に何度かのミーティングをしました。男性も女性も、HIV陽性者を身近に感じている人、そうでない人と多様なスタッフがメンバーとして参加しています。

2015年度は、なかなか交流が少なかったボランティア同士の交流の場を企画・運営、また、「ぷれいすトーク」という外にむけて開いたイベントのスタッフとして広報や準備などに関わりました。

2015年
10月10日　ミーティング（10名）
11月 1日　TOKYO AIDS WEEKS ボランティア説明会
28日～29日
TOKYO AIDS WEEKS メンバーがスタッフとして参加
2016年
1月23日「ぷれいす東京ボランティア交流会」企画会議（5名）
2月10日「ぷれいす東京ボランティア交流会」実施・運営（参加者：30名、うちメンバー：8名）

ボランティア交流会の4人の参加者の声をご紹介します。

（報告：生島）

■「ボランティアもひとりじゃない」

部門：バディ

ちのぱんにいさん（30歳代／男性）

当日は仕事が終わってから駆けつけたため、会場に到着したときにはすでに交流会が始まっていました。

着いた時には「他己紹介」の最中でちょっと入りにくい雰囲気でしたが、タイミングを見て会場内に入ると、司会の方があたたかく迎えてくれたので、あまり抵抗なく輪の中に加えてもらえました。

私は「バディ」として毎月1回利用者宅へ訪問するという活動をしています。ひとりでの活動なので、ミーティングに参加しない限り他のボランティアさんと関わることがありません。他の部門だと活動中に他のボランティアさんと関わることもありますが、バディは多くがひとりで活動するので時折「こんな場面で他の人だったらどうするのかな」と考えることもあります。ミーティングで解決できればいいのですが、必ずしもそれに参加できるとは限らないのです。

今回の交流会に参加した方の多くがバディで活動されている方でした。それはきっと、同じボランティアとしてもっとつながりがあったらいいという思いが強かったからだと思います。会ではゲームやレクリエーションが参加者の緊張感を和らげてくれたので、その後の参加者同士の会話も弾んでいたように思います。

2時間の交流会はあっという間でしたが、今後もこのような会を企画していただけたらと思います。

■「先輩たちに多様性の広さを教えてもらった時間」

部門：Sexual Health Project／事務・総務

あやこ（女性／恋愛対象：男性／39歳）

先日、ボランティアスタッフ交流会に参加してきました。私は、ボランティアと言っても去年の夏、合同研修を終えたばかりで、セクシャルヘルス部門に所属しているものの子育てや家事に追われ、会合参加もままならない主婦です。今回の交流会参加は「新人が交流会だけ参加なんて申し訳ないな。」という気持ちのまま参加しました。

会場には30人位の人たちがいて、男性の方が少し多いですが女性の姿も見かけました。

交流会はみんなでレクリエーションしたり、お茶をいただいたり、初めて会う方とも話が出来るような配慮がなされていました。参加されていた方も、セクシャリティーの多様性に深い理解をしてみているからなのか、セクシャリティー以外の部分、ぷれいす活動歴の長い大先輩や、人生の先輩たちも、先輩然として構えている感じではなく多様性を寛大に受け入れてくれ、同じところで笑い、レクでは面白ポーズを決めて照れ笑いする雰囲気がとても居心地がよかったです。その後和やかに、ぷれいすの活動と、先輩たちの経験を聞く場は、面白くも、ためになる話ばかりでした。もっとたくさん伺いたいなと思いました。また開催してください。お願い致します。

■「絆深まる交流会」

部門：Sexual Health Project／ネスト・プログラム／事務・総務

K（男／ゲイ／30代）

HIVに感染してから不安な気持ちを抱えたままぷれいす東京のドアを叩いたのはもう一昨年のこと。それからネスト・プログラムや対面カウンセリングなどに参加したことにより、少しずつ自分の病気を受け入れることができるようになりました。HIVに感染した当事者として何かぷれいす東京に携わることができないかと思い、昨年よりぷれいす東京のボランティア活動を始めました。ボランティア研修で知り合った多くの仲間とその後一堂に会する機会はなかなかありませんでしたが、今回のボランティアスタッフ交流会で再会することができ、とても楽しいひと時を過ごすことができました。交流会当日の進行を務めたのはボランティアスタッフでもある名司会の2名でした。他己紹介やゲームを通じて、スタッ

フ同士の絆がより一層深まったように感じました。和気あいあいとした雰囲気の中お互いのボランティアの経験を分かち合うことができ、今後の活動の上でも大変参考になりました。次回の開催も期待しています。ありがとうございました。

■「素敵な笑顔あつまりました！！」

部門：Sexual Health Project

シン（40代／ゲイ）

今回のボランティア交流会では、ぷれいすに登録されていても普段中々会う事がなかったり、話をする機会がない方々と一緒に楽しい時間を過ごせた事が何よりも良かったと思いました。

記念すべき第一回目の交流会で、恐縮ながら司会進行という大役をお願いされたので、当初はなかなかのプレッシャーでした。普段ご飯３杯は軽く食べる僕ですが、1杯しか食べられない日々が数日続きました（笑）

それでもいざ準備をはじめてみると、ゲームや進行を考えていくうちに、みんなと楽しく活動してる事を想像できて、色々計画する事ができました。実際に当日の夜はいつものミーティングとはまた少し違う、程よく肩の力が抜けたような空気で、とても楽しい時間をみんなで共有できたと思います。

ボランティアを続けていく事でみんなが時々思い悩む事や、壁にブチ当たる事もあると思いますが、こうした交流会をする事で同じ志を持った仲間がいる事を再確認できるのはとても素晴らしいと思いました。今後も自分にできる事からコツコツと楽しんでやっていこうと思います。

1. Gay Friends for AIDS電話相談

●2015年度活動記録

(1)実施日

毎週土曜日　19時～21時

(2)年間相談活動日数

51日（2014年度：51日）

(3)電話相談活動時間数

102時間（2014年度：102時間）

(4)相談体制

相談員 5名 ＋ シフト担当1名 ＋ 研修中2名

(5)年間相談件数

121件（うち陽性者等の相談：14件）

（2014年度：相談件数87件、うち陽性者等17件）

(6)ろう者ゲイ（聴覚障がい者）のメール相談

0件

●2015年度相談件数

(1) 全般

表1は月別の相談件数および1日あたりの平均件数を表している。

2015年度の年間相談件数は前年度と比べ、34件増加した。4月、5月、6月を除く月で相談件数、平均件数共に増加した。

1日あたり0.66件の増加だった。

表1　月別の相談件数及び一日当たりの平均件数

		2015年度			（参考）2014年度		
年	月	相談件数（件）	実施日数（日）	平均件数（件）	相談件数（件）	実施日数（日）	平均件数（件）
2015年	4月	4	4	1.00	12	4	3.00
	5月	10	5	2.00	10	5	2.00
	6月	5	4	1.25	9	4	2.25
	7月	10	4	2.50	7	4	1.75
	8月	17	5	3.40	6	4	1.50
	9月	12	4	3.00	5	4	1.25
	10月	18	5	3.60	8	4	2.00
	11月	10	4	2.50	6	5	1.20
	12月	10	4	2.50	5	4	1.25
2016年	1月	6	4	1.50	5	5	1.00
	2月	8	4	2.00	5	4	1.25
	3月	11	4	2.75	9	4	2.25
	合計	121	51	2.37	87	51	1.71

(2) 相談時間

表2は相談時間を10分単位にまとめたものである。

2015年度は、前年度同様10分以内で終わる相談が5割以上であった。なお、1件あたりの平均相談時間は16.5分で、前年度の15.3分より若干長かった。

表2　相談時間

相談時間（分）	2015年度		2014年度	
	件数	割合	件数	割合
～10	66	54.5%	49	56.3%
11～20	25	20.7%	17	19.5%
21～30	10	8.3%	9	10.3%
31～40	8	6.6%	4	4.6%
41～50	6	5.0%	3	3.4%
51～60	2	1.7%	3	3.4%
61～	4	3.3%	2	2.3%
合　計	121	100.0%	87	100.0%

(3) 相談者の年代

表3は相談者の年代別の相談件数を表している。

2015年度は、全体的な年代の傾向は大きくは変わらなかった、20代、30代で毎年60～70%の割合を占める傾向は変わらない。

表3　年代別の相談件数

年代	2015年度		2014年度	
	件数	（割合）	件数	（割合）
10代	4	4.5%	4	8.7%
20代	34	38.6%	13	28.3%
30代	26	29.5%	17	37.0%
40代	16	18.2%	8	17.4%
50代	5	5.7%	1	2.2%
60代以上	3	3.4%	3	6.5%
不明	33		41	
合　計	121	100.0%	87	100%
有効データ	88		46	

有効＝（合計－不明）

(4) 相談者の発信地域

表4は相談電話の発信地域を示している。

2015年度は東京からの発信割合が増えた、関東以外からの発信が50%を割り込んだ。

(5) 相談電話の情報源

表5は相談電話を知った情報源を表している。

前年度上昇した「インターネット」の割合がさらに11.9%上昇し最高を記録した。一方で「検査機関・パンフレット」を見て電話をかけている層の割合が前年度同様に減少した。

表４　相談電話の発信地域

地域	2015 年度		2014 年度	
	件数	（割合）	件数	（割合）
東京	25	27.2%	10	20.0%
東京以外の関東	22	23.9%	14	28.0%
関東以外	45	48.9%	26	52.0%
不明	29		37	
合　計	121	100.0%	87	100.0%
有効データ	92		50	

有効＝（合計－不明）

表５　相談電話を知った情報源

情報源	2015 年度		2014 年度	
	件数	（割合）	件数	（割合）
ゲイ雑誌	6	7.4%	2	4.5%
検査機関・パンフレット	2	2.5%	3	6.8%
他の相談電話	1	1.2%	3	6.8%
インターネット	63	77.8%	29	65.9%
携帯電話・モバイル	6	7.4%	5	11.4%
口コミ	3	3.7%	0	0.0%
その他	0	0.0%	2	4.5%
不明	40		43	
合　計	121	100.0%	87	100.0%
有効データ	81		44	

有効＝（合計－不明）

(6) 相談者のセクシュアリティ

表６は相談者のセクシュアリティを表している。

「ゲイ」からの相談が今年度も８割前後を占めている、「男性に性的興味を持った」という相談者は０件ではあるが、「既婚者・バイセクシュアル」「ゲイ」の中には男性に性的興味を持ったばかりの相談者も複数見られた。Gay Friends for AIDS 電話相談（以下、Gフレ電話相談）の対象外のセクシュアリティからの相談が増加した。

表６　相談者のセクシュアリティ

区分	2015 年度		2014 年度	
	件数	割合	件数	割合
ゲイ	84	79.2%	52	81.3%
ゲイ周囲	0	0.0%	0	0.0%
既婚者・バイセクシュアル	9	8.5%	8	12.5%
男性に性的興味を持った	0	0.0%	0	0.0%
レズビアン	0	0.0%	0	0.0%
トランスセクシュアル等	4	3.8%	1	1.6%
異性愛者（男）	9	8.5%	3	4.7%
異性愛者（女）	0	0.0%	0	0.0%
不明	15		23	
合　計	121	100.0%	87	100.0%
有効データ	106		64	

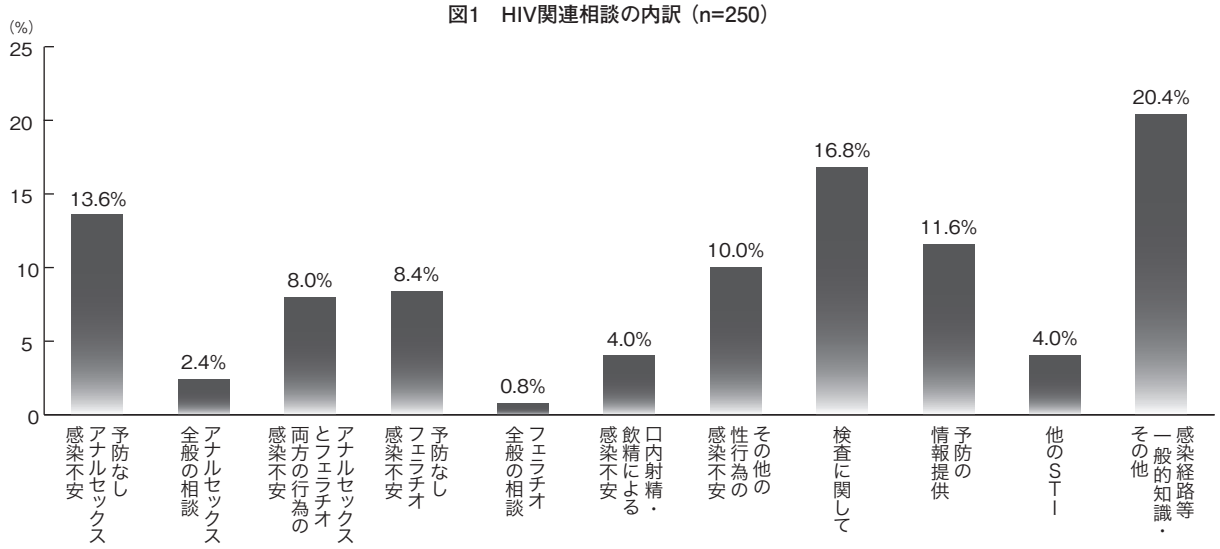
有効＝（合計－不明）

●相談内容について

2015年度は、121件の相談のうち陽性者対応14件（後述）と異性間性行為（男・女）9件と無言2件を除いた96件について検討し、HIV関連相談とHIV以外の相談に分類した。前年度と同様に1回の相談で複数の内容の相談が寄せられているケースも見受けられた。複数の相談を独立させて計上した結果、HIVに関連した相談が250ケース、HIV以外の相談（非HIV関連）が64ケース、合計314ケースとなった。

また、ろう者ゲイ（聴覚障がい者）のメール相談は0件であった。

図1　HIV関連相談の内訳（n=250）



(1) HIVに関連した相談…250ケース(79.6%)

図1はHIV感染不安や検査あるいはHIV以外の性感染症(STI)などに関する相談(以下:「HIV関連相談」)の内訳である。

2015年度の相談特徴を前年度と比較してみると、「予防なしアナルセックス感染不安」が10.0%→13.6%、「アナルセックスとフェラチオ両方の行為の感染不安」が1.3%→8.0%、「他のSTI」が1.9%→4.0%と増加した。その一方で「予防なしフェラチオ感染不安」が12.5%→8.4%、「検査に関して」が21.9%→16.8%と減少した。

リスクのある行為をして相談してくるケースは、昨年度同様にリスクが有る事を分かっていながら、行為を止められないといったケースが複数あった、その様な相談には今後の予防について共に考えると同時に検査により現状を知る事をアドバイスしている様だ。フェラチオに関する相談は、毎年のことであるが、する側・される側ともに予防をしている者は、相談票の記載からは読み取れなかった。フェラチオをする事による感染リスクを知らず行為の後に不安になり相談してきたケースが目立った。

「その他の性行為の感染不安」では、ゲイ向けマッサージ店利用者からの相談が多かった。

「予防の情報提供」に関しては、どの様にセーファーセックスをしたら良いか迷っている相談者に相談員の経験を基に、適切なアドバイスを行っていたようだ。

(2) HIV以外の相談(非HIV関連相談)…64件(20.4%)

図2は、セクシュアリティ(性的指向)、ライフコース(ゲイとしての生き方)、そして人間関係などゲイとしてのアイデンティティに関わる「非HIV関連相談」の内訳である。

前年度と比較すると「ライフコース(ゲイとしての生き方)」が8.5%→26.6%と増加した。また「セクシュアリティ」が21.3%→18.8%、「恋愛・人間関係」が38.3%→32.8%、「メンタルヘルス等」が10.6%→9.4%の相談は減少した。

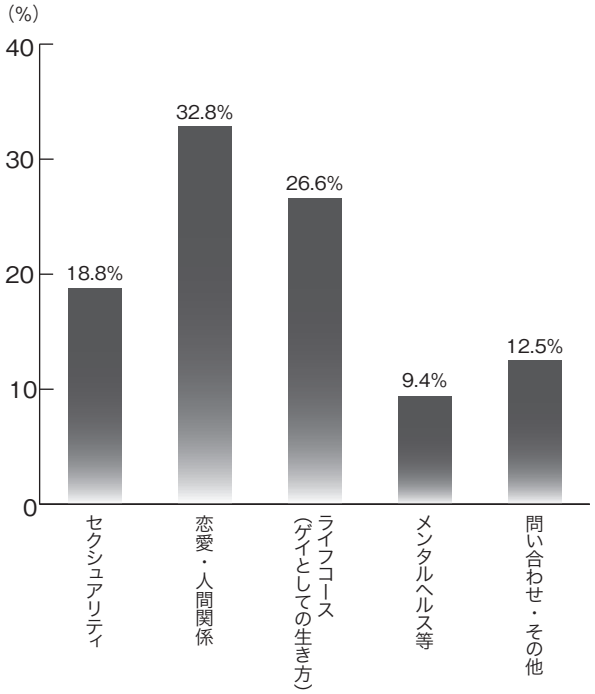
ライフコース(ゲイとしての生き方)」では、カミングアウトやゲイサークルなどのゲイの集まりに参加したいなど、「恋愛・人間関係」では、出会いの機会、恋愛にまつわる相談などが寄せられた。

「セクシュアリティ」では、自分の性的指向への迷いに関する相談などが寄せられた。

(3) 陽性者等の対応について…14件

2015年度の陽性者等の対応は、HIV陽性者からの相談が13件、パートナーや友人など陽性者本人以外からの相談が1件、検査での要確認の相談が0件で、全相談件数に対する陽性者等の割合は7.8%→10.8%→19.5%→11.6%と推移している。陽性者だけで10.7%を示している。

図2　非HIV関連相談の内訳 (n=64)



陽性者の相談内容は、継続的に日常の報告をするケースや、発症による感染発覚後、どれ位、生きられるかといった相談や、健康診断で、分かってしまうのではと不安で相談してくるケースや、思いを寄せる相手への通知をどうしたらよいか、という相談などがあった。

周囲からの相談では、パートナーの感染を知り、どの様に接したら良いか?といった相談が寄せられ、注意する点など伝えると、とても安心している様だった。

●今後の課題

A. 相談員の増員等

昨年度、研修を行い相談員2名がデビューしたが、仕事の関係などで、シフトに入れない状態にあり、引き続き研修継続中となっている。

今年度も仕事の関係などでシフトを変更する事が多々あった。その際にはシフト調整係が活躍した。

今後も仕事などの関係でシフトに入れなくなるスタッフが出る事も考えられるため、引き続き人員の育成を検討していく必要がある。

B. 相談日数・時間枠の検討と広報の必要性

今年度の相談件数は、前年度と比較すると増加し、それ以前の水準を回復した。

今後、更に増加する様なら回線数や日数、時間枠の拡充も検討する必要があるかもしれないが、現状では現在の曜日、時間枠で行うことが妥当であると考えている。

広報では、ぷれいす東京のサイトがリニューアルされたり、

新たにQOGLフライヤーなどへ電話番号の掲載がされた。

今年度はインターネットで、Gフレ電話相談を知った相談者が77.8%に達した、この中にはスマホからのアクセスも相当数含まれていると思われる。

今後は出会い系スマホアプリなどへの広報も検討する必要があると思われる。

C. 陽性者等の対応に関して

今年度も10%台に達した。これは、土曜夜に開いている相談機関が限られていることも影響していると共に相談員がゲイである事への安心感もあると思われた。相談員それぞれにHIVとの関わり方に違いはあるがHIVを身近に感じているゲイとして、陽性者等が孤立しないよう心掛けている。

専門性の必要とされる情報に関しては、適切な相談機関を案内しているが、

Gフレ電話相談実施時間に他の相談電話が実施されていない事を考えると、現在よりも陽性者の必要とする情報等について更に知識を深めて行く努力をして行きたい。

D. 非HIV関連相談に関して

今年度も様々な相談が寄せられた。非HIV関連の相談では、相談員によって価値観の違いが有るのも事実で、相談員によって回答に違いが生じると思われるが、人それぞれ置かれた環境の違いから相談者自身でしか答えを出せない事、他の相談員の場合違う回答になる可能性を伝えた上で、自身の経験など参考になりそうな話をしている。

専門外ではあるが、相談者の今後の人生の選択に大きく影響する事も考えられるので、

今後もミーティングやケースカンファレンスで情報を共有し、様々な考えや指向など共有していきたい。

（電話相談報告：高木伸浩）

2. 各種イベントでの活動

●東京レインボープライドパレード＆フェスタ

4月25日及び26日に、代々木公園で「東京レインボープライドパレード＆フェスタ」が開催された。

土日二日間の開催となり、土曜日は「フェスタ」としてステージイベントを中心に、日曜日はパレードを中心にした構成で、2日間で55,000人が参加した。

ブースで販売したTシャツは白と黒の２種類。

Gフレはaktaなどの皆さんと一緒に「Living Together計画」のブーススタッフとして3名のメンバーが参加した。ニュースレターや手記集などの資材配布を行う一方、日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスを支援するために製作された「AIDS IS NOT OVER」のメッセージTシャツ販売の手伝いも行った。25日にはステージでHIVをテーマにしたシンポジウムが開催されたこともあり、ブースも両日を通して盛況となった。

●LGBT HEALTH TALK

パレード以降のゴールデンウィーク期間は今年も「Tokyo Rainbow Week」と銘打たれ、セクシュアルマイノリティーに関連した様々なイベントが行われた。

この期間の最終日となる5月6日、新宿区大久保地域センターにてトークイベント「LGBT HEALTH TALK」をmedicolor（メディコロル）との共催にて開催した。

medicolorはLGBTと医療をテーマにした活動をしている団体で、筆者（sakura）と共に司会をしてくれたmedicolorの山瀬さんからのFtMトランスジェンダーにとっての婦人科検診に対するハードルについて、そしてGフレはゲイ・バイセクシュアル男性視点でのHIVについての話題を提供した。

司会の山瀬さん（右）とsakura。

イベントの狙いとしては、近年さまざまな大学でLGBTサークルが発足し、ゲイコミュニティーと接点を持つ前により幅広いセクシュアルマイノリティーのコミュニティーに加わる人も出てきている一方、ヘルスケアに関する話題、特に身体の健康に関する話題はセクシュアリティーを超えてシェアされることは少ないのではないかと考え、その機会を提供することにあった。実際に、Tokyo Rainbow Weekはそうした様々なセクシュアリティーについて知るきっかけとなる場であるにも関わらず健康課題を切り口にしたイベントは多くはなく、メンタルヘルスではなく身体の健康を扱ったイベントはこの「LGBT HEALTH TALK」が唯一のものであった。

当日は先述の2つの話題を前後半でひとつずつ取り上げ、司会2名に加え3名のゲストとクロストークをしたが、この5名は全員が異なるセクシュアリティーのメンバーであった。会場となった大久保地域センターの会議室はほぼ満席となり、イベントを作った動機でもある大学のLGBTサークル関係者の方も何人も来られていた。アンケートを見ると、医療や健康に対する当事者の本音が聞けたことを評価していただく声が多く、また今回取り上げていないセクシュアリティーの人たちの健康課題についても知りたいとの意見が寄せられた。来場のきっかけはどちらか片方のテーマへの関心だったが、イベントを通して幅広く「セクシュアルマイノリティーの健康課題」について考えることができた、という方が多かったと感じている。

初めての試みで来場者数の予測もできず、準備不足な面など反省点も多いイベントだったが、様々なセクシュアリティーにおける健康課題を知ることへのニーズを感じられ、手ごたえのあるイベントであった。

●TOKYO AIDS WEEKS

11月30日及び12月1日に、「第29回日本エイズ学会学術集会・総会」が東京で開催された。「TOKYO AIDS WEEKS」は世界エイズデー周辺にHIV／エイズに関連したイベントを集めて開催することでより強く社会にアピールするという企画で、特に11月28日及び29日の2日間は国立国際医療センターで学会プレイベントという位置づけで、シンポジウムや映画上映など多数のプログラムを実施した。

この2日間のスタッフについては、ボランティアを公募しぷれいす東京内の他部門にも呼びかける形をとったが、コアメンバーとしてGフレスタッフが要所に配置され、全プログラムの来場者合計で1,000人規模という一大イベントを裏側からサポートした。

会場が病院内の大会議室などということで、通常のイベント会場とは異なる条件下でのイベントであった。シンポジウムや映画上映が行われた会議室のある建物だけでなく、院内コンビニなどもある吹き抜けのロビーで写真展とゲイコーラスのライブがあったため院内を多数の来場者が往来することが予想された。入院されている方が往来する病院の中で事故を起こすことなく、ご来場いただいた方をスムーズに誘導するという点には細心の注意を払っての実施となった。

結果として2日間を通して事故もなく、多くの方にイベントをお楽しみいただくと同時に、スタッフもたくさんの学びを得られるイベントとなった。

3. QOGL –Quality of Gay Life－

大きなイベントで活動した一方、前年度まで開催してきたQOGL― Quality of Gay Life ―については、前年度に撮影した動画をYOUTUBEで公開したものの、次の開催はできなかった。

杏林大学の大木幸子先生と、ガクさんにご出演いただいたQOGL「見た目重視でイイですか？」の模様は以下のURLでご覧いただける。「YOUTUBE　QOGL」で検索していただくとアクセスしやすい。

https://www.youtube.com/channel/UC8iD_YUN7Nvh-k4DxHheVKQ

イベント以外の活動については、大きなイベントの状況によって左右されがちであるが、先々の見通しを立てながら何かしら形にできればと考えている。

●雑誌「バディ」への連載

前年度から引き続き、ゲイ雑誌「バディ」にて「Living with HIV」と題してぷれいす東京の連載記事を掲載した。誌面リニューアルに伴いこの連載は2015年12月発売号でいったん終了となったが、3ヶ月に1回のペースでコーディネーターのsakuraが執筆した原稿を掲載していただいた。

今年はイベントの年となり、他団体とのコラボレーションやぷれいす東京のGフレ以外の部門スタッフのかたと一緒に活動する機会などがあったが、TOKYO AIDS WEEKSなどではイベントスタッフとしての経験の蓄積が活かされるという場面も多かったと感じている。「LGBTブーム」などと言われる状況で、セクシュアルマイノリティーに関連したイベントが格段に増加した一年だった印象があるが、そうしたムーブメントの中にきちんとHIV／エイズに関するトピックが織り込まれるよう、2016年度も様々な形での情報発信に取り組んでいく所存である。

（イベント関連報告：桜井啓介）

2015年度も多くの個人・団体よりご寄付をいただきました。メンバー一同心より感謝申し上げます。またイベントなどで多くの方にご協力やアドバイスをいただきました。ありがとうございました。

引き続き2016年度もGay Friends for AIDSをよろしくお願い申し上げます。

Ⅰ．活動概要

主な活動は、ネスト・プログラムの企画・運営、プログラムのための人材育成・研修である。

(A)ネスト・プログラム

HIV陽性者やそのパートナー、家族が、安心して話し合ったり、学習や情報交換をしたり、交流したりすることを目的としている。多くのプログラムはHIV陽性者を対象としているが、陽性者のパートナーや家族を対象としたものも開催している。プログラムに参加するには事前の利用登録が必要であるが、事務所にて専任相談員が当事者確認をし、守秘義務などのルールに同意を得た上で行っている。プログラムでは、相談員や司会進行役のスタッフのもと、毎回、最初にグラウンドルールを確認している。

ネスト・プログラムに関わるスタッフ、相談員などで会議を設け、企画運営をしている。また、毎月ネスト･ニュースレターを発行して、ネスト・プログラムの案内や報告などを掲載している。メール版(PC版・携帯版)、PDF版も同時に配信している。

(B)人材育成・研修

2012年度より積極的に人材育成を行っている。ぷれいす東京のボランティア合同研修修了者を対象に、ネストスタッフ研修を行っている。また、プログラムのセクレタリー(受付業務)やファシリテーターとして活動するスタッフには、別途、オリエンテーションと実地研修を行っている。プログラム参加者の中から、スタッフとしても活動に参加するHIV陽性者やパートナーも増加している。これまで新陽性者PGMにほぼ限定されていたピア・ファシリテーターによるミーティングの運用を、新たなプログラムへと拡充して行くことも促進している。

また、2013年度に始まった「地域における当事者支援のための支援プログラム」では、全国各地での当事者支援のための支援をする団体やグループへのコンサルティングや相談対応を行っている。

(C)Webサイト～「ぷれいす東京Web」と「web NEST」の統合

HIV陽性者とそのパートナー、家族、ともだちのために役立つ、情報や経験の共有・共感の場を「web NEST」としてWeb上で提供してきたが、ぷれいす東京のWebサイトのリニューアルに伴い両サイトを統合した。

これにより、陽性者やその周囲の人たちだけでなく、それ以外のさまざまな人たちもそれぞれの立場で利用できる環境が整いつつある。

web NESTで蓄積した多くの情報やノウハウが、昇華する形で今に活きている。web NESTに協力してくれた大勢のみなさま、企画・制作・運営に関わったみなさまに改めて感謝申し上げます。

Ⅱ．2015年度活動実績

(A)ネスト・プログラム

(2015年4月1日～2016年3月31日)

○スタッフ数(2016年3月31日現在)	6名
○ネストスタッフ数(2016年3月31日現在)	32名
○実利用者数	306名
	(うち新規利用者数　88名)
○延べ利用者数	1,166名
(うちピア・ファシリテーターなど積極的参加	92名)
○プログラム開催数	119回
プログラム内容は**表1**を参照	
○ネスト・ニュースレター	月1回　年12回発行

その他に、ネスト・プログラム・スタッフ会議や、新陽性者PGMファシリテーターによる各回・各期の振り返りミーティング、その他各プログラム担当ファシリテーターやセクレタリーの振り返り、多目的室の整備など、ネスト・プログラムを運営して行くために、陽性者が積極的に関わって多くの会議や活動が行われている。

(B)人材育成・研修

○ネストスタッフ研修修了者数	12名
うち　ピア・ファシリテーター	2名
セクレタリー	1名

Ⅲ．2015年度活動報告

(A)ネスト・プログラム

ぷれいす東京Webサイトの「ネスト・プログラム」には、ネスト・プログラムの報告や参加感想文が多数掲載されているので、あわせてお読みください。

(A)-(1)グループ・ミーティング

(A)-(1)-1　新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)

新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)は、HIV

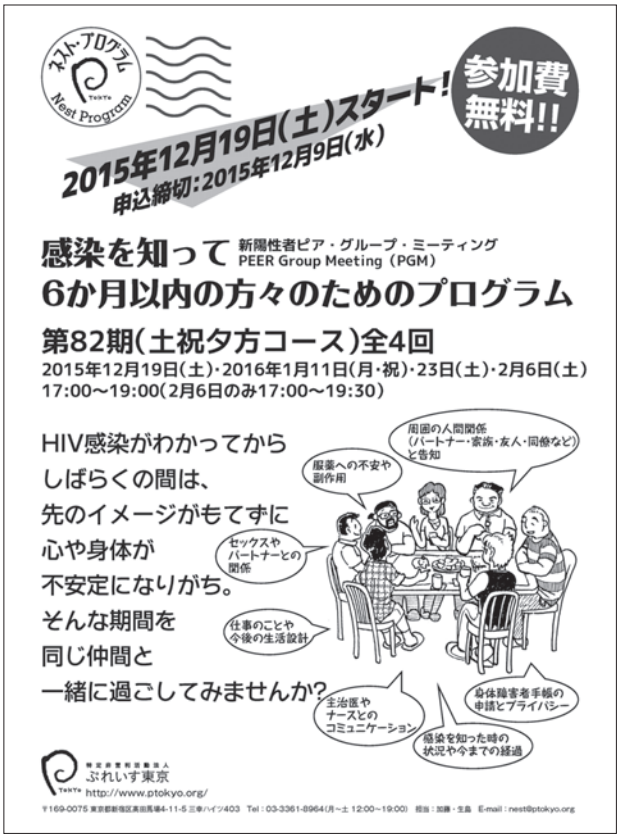
表1　ネスト・プログラムと参加状況

プログラム名	実施回数	のべ参加者	ピア・ファシリテーターなど	スタッフ・ファシリテーターなど	セクレタリー	講師・ゲストなど
(1)グループ・ミーティング	**66 回**	**625名**	**69 名**	**50 名**	**62 名**	**0 名**
1　新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)	15 回	81名	19 名	23 名	15 名	—
2　新陽性者PGM同窓会	—	—	—	—	—	—
3　ミドル・ミーティング(40才以上の男性陽性者)	11 回	213名	—	11 名	12 名	—
4　U40ミーティング(10代、20代、30代男性陽性者)	12 回	134 名	22 名	—	11 名	—
5　異性愛者のための交流ミーティング	12 回	116 名	20 名	1 名	11 名	—
6　Women's Salon(女性陽性者のためのプログラム)	3 回	15 名	—	7 名	2 名	—
7　ミックス・トーク10(MT10)	3 回	19 名	6 名	—	3 名	—
8　陰性パートナー・ミーティング	6 回	37 名	2 名	4 名	6 名	—
9　もめんの会(HIV/AIDSを支える母親の会)	4回	10 名	—	4 名	2 名	—
(2)学習会/ワークショップ/セミナー	**16 回**	**129 名**	**0 名**	**25 名**	**10 名**	**21 名**
1　ストレス・マネジメント講座	6 回	43 名	—	6 名	—	6 名
2　アサーティブ・コミュニケーション　自己表現のABC	4 回	25 名	—	6 名	4 名	5 名
3　専門家と話そう	2 回	32 名	—	8 名	3 名	3 名
4　ベーシック講座「知っとこ！社会福祉制度」	2 回	5 名	—	2 名	1 名	—
5　ベーシック講座「HIVってどんな病気？」	1 回	1 名	—	1 名	1 名	—
6　就職支援セミナー	1 回	23 名	—	2 名	1 名	7 名
(3)交流会	**37 回**	**319 名**	**24 名**	**46 名**	**26 名**	**1 名**
1　就職活動サポートミーティング	12 回	56 名	—	12 名	10 名	—
2　介護職として働く陽性者のための交流会	6 回	52 名	—	6 名	4 名	—
3　看護師として働く陽性者のための交流会	6 回	45 名	—	6 名	4 名	—
4　障害者枠で働く陽性者の交流会	4 回	32 名	1 名	4 名	—	—
5　教師として働く陽性者のための交流会	4 回	24 名	—	4 名	3 名	—
6　ピア＋トーク第6回 セーファー・セックスを語ろう	1 回	6 名	9 名	2 名	1 名	1 名
7　ピア＋トーク第7回 HIV陽性者とキャリアチェンジ	1 回	28 名	7 名	3 名	1 名	—
8　カップル交流会(＋/＋or＋/－カップル)	2 回	33 名	2 名	2 名	1 名	—
9　年末パーティ	1 回	43 名	5 名	7 名	2 名	—
プログラム参加者総数	**119 回**	**1073 名**	**93 名**	**121 名**	**98 名**	**22 名**

陽性と知ってから6ヶ月以内の陽性者5～7名が、2時間のミーティングを2週間毎に計4回(1期)参加し修了となるプログラムである。2001年4月に第1期がスタートしてから、2016年3月で丸15年が経過した。開催数は通算で76.75期(307回)、参加者数はのべ1,651名(実人数：455名)である。

感染告知を受けて心身共に不安定になりがちな最初の数ヶ月間を同じ立場の仲間と過ごすことで、問題の解決のヒントや、先の見通しを得てもらうことがこのプログラムの大きな目的である。また、このプログラムをきっかけとして今後も連絡を取り合う仲間を得たり、ぷれいす東京が提供する他のサービスに繋がるきっかけとなる場合もある。このプログラムへの参加を経験したいわゆる「卒業生」でスタッフとしても参加するピア・ファシリテーターは、2016年3月現在PGMに関わるピア・ファシリテーター全体の約半数で、循環型のプログラムとして順調に機能している。2016年3月現在、PGMの運営に関わるスタッフは、ピア・ファシリテーター9名、スタッフ・ファシリテーター8名、医療情報スタッフ2名、そのうちトレーニング中のファシリテーターが1名となっている。

2015年度は、第80期1回目から第83期3回目までの4期にわたり15回が開催された。以下、今年度内に期を終了した第80期(2015.6.20開始、8.8終了)から第82期(2015.12.19開始、2016.2.6終了)の3期分についての報告を行う。参加者はのべ



61名、実人数は17名であった。1期平均の参加人数は5.7名（昨年度6.3名）、出席率は89.7%（同93.4%）であった。

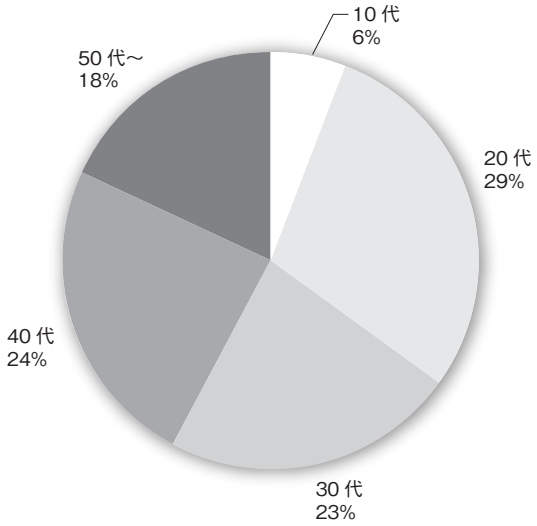
参加前アンケートによると、性別は男性16名、女性1名。過去女性参加者は非常に少なく、今年度久し振りのエントリーとなった。年齢分布では20代の割合が増加した昨年度と比較すると、各年代均等に分布している。特徴的なのは昨年度同様周囲への感染を通知した人数で、「0人」と答えた割合が全体の約40%にものぼる。「5人以上」と回答した割合が今回も8%程度と低く、現在でもカミングアウトに難しさを感じている人がこのプログラムに参加していると推察される。

また参加後のアンケートより、参加者がこのプログラムをどう評価しているかが読み取れる。「期待していたものが得られたか」という質問に対して、全体の93.3%が「とても得られた」「得られた」と回答している。具体的には「似た境遇の人と会えて安心できた気持ち」「自分以外の人の状況を知ることで得た視野の広がり」「孤独感の軽減」を挙げる参加者が多かった。

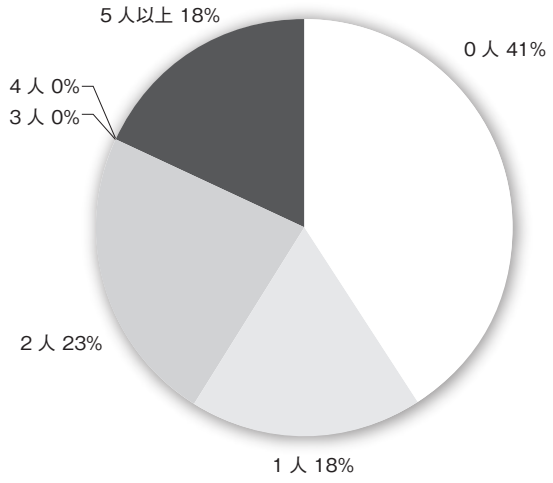
新陽性者PGM参加者からの声については、35ページをご参照いただきたい。

［参加前アンケート］

年代（n=17）

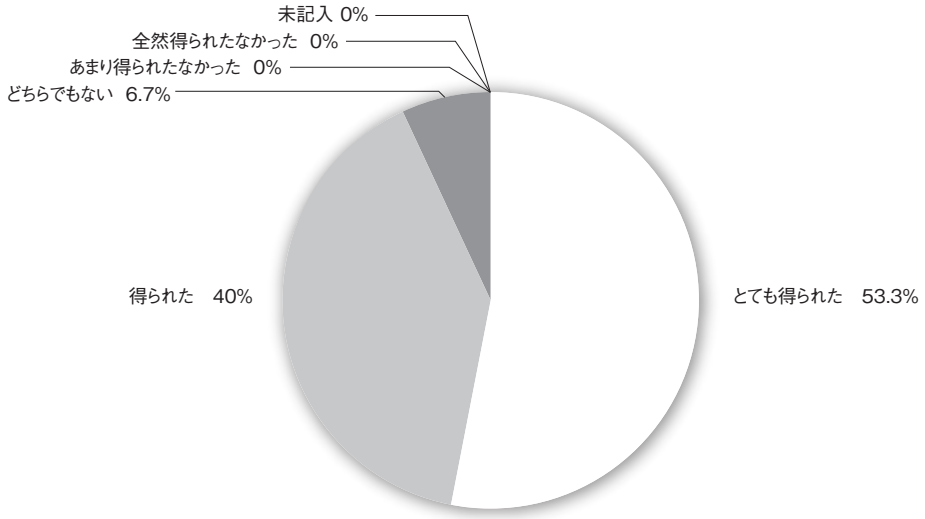


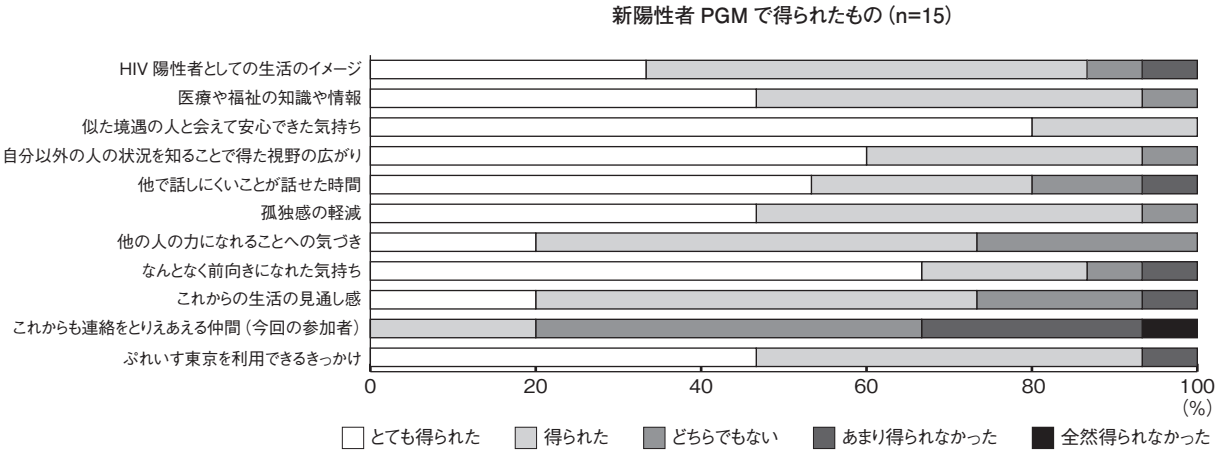
周囲への通知人数（n=17）



［参加後アンケート］

期待していたものが得られたか（n=15）





(A)-(1)-2　新陽性者PGM同窓会

新陽性者PGM同窓会は、「新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)」の参加者の「その後」を共有するプログラムとして2012年にスタートした。

2015年度は実施がなかったが、従来のミーティング形式のニーズは他のプログラムで満たされるようになってきたため、違った形式での開催を検討中である。

(A)-(1)-3　ミドル・ミーティング(40才以上の男性陽性者)

毎月第2土曜日に開催されているミドル・ミーティングは、基本的には40代以上の男性HIV陽性者のミーティングである。今年度は11回開催して、のべ213名の参加があった。半数以上の回で、その回が初参加という人が数名おり、参加者の幅は広がってきている。大人数でも2時間のミーティングがスムーズに進行できるように、自己紹介のタイムキープや、途中で2グループに分かれて、それぞれで話題を深めて、最後にお互いに報告し合うというような進行の工夫を行っている。また、会場のレイアウトについても、より大人数に対応できるよう、毎回、机や椅子の配置を変更するということも行っている。参加者の中には、遠距離から時間をかけて参加する方もいる。また、一人での参加が難しい方については、参加時と帰宅時にバディ・スタッフが付き添っている。参加者同士、定期的にお互いの顔を見て、近況を聞き合いながらまた次回お会いしましょうねと散会する。この場が互いに励まし合う、定期的に挨拶をかわすサポート・ミーティングとなっている。

(A)-(1)-4　U40ミーティング(10代、20代、30代の男性陽性者)

U40ミーティングは、10代から30代までの男性HIV陽性者のためのプログラムである。今年度は12回のべ134名の参加があった。曜日や日にちを固定せずに平日と土曜日を織り交ぜて開催しており、その時によって参加人数のばらつきはあるが、半数近くの回に初参加が数名おり、感染告知から長い参加者との間で積極的な交流が見られる。U40が初参加のプログラムとなる参加者数は12名にのぼり、PGM同様ネスト・プログラムへの入り口としての役割も果たしている。参加人数が多い回には、ミドル・ミーティングと同様にグループに分けて進行するといった工夫も行っている。また年に2回ほど、質問を紙に書いて箱に投函し、くじ形式で読み上げてみんなで答えるという方法を取っており、匿名性が保たれることで普段訊きづらいことが訊けると参加者に好評である。毎回その回が初参加となる方に優先的に話題提供をしてもらっているが、比較的感染から日が浅い参加者に対して先輩が経験などを語ることがある一方で、逆に感染から年数が経った参加者がフレッシュな意見を聴いて初心に返るという場面もある。進行は引き続きピア・ファシリテーターであるスタッフ2名で行っていて、近年研修を修了した若手のファシリテーター候補の育成を始めている。ミドル・ミーティングと並び、近況や悩みなどを共有するサポート・ミーティングとして機能している。

(A)-(1)-5　異性愛者のための交流ミーティング

男女各1名の呼びかけ人と相談員が話し合いを重ねて、2011年9月に立ち上げたミーティングである。現在、原則として奇数月の第4土曜日と偶数月の第3金曜日に開催している。2013年5月からは、ネスト・プログラムのファシリテーター研修を修了した、同じ立場の2名のピア・ファシリテーターが司会進行を担当している。今年度からさらにもう1名がファシリテーターに加わり、チーム体制で進行をする方向で準備中である。2015年度は12回開催して、のべ136名(ピア・ファシリテーター3名のべ20名含む)が参加した。子づくり、男女の恋愛、結婚など、他のミーティングではなかなか話し合いづらいテーマを気兼ねなく話し合う事ができるミーティングとなっている。異性愛の陽性者が交流できる場は限られており、この場を通じて難しさを共有できる仲間づくりが広がって、活発なミーティングとなっている。

(A)-(1)-6　Women's Salon(女性陽性者のためのプログラム)

Women's Salonは女性陽性者のためのプログラムで、他

の参加者と交流しながら、女性同士で安心して情報をわかち合う場である。進行については、女性ファシリテーター３名がチーム体制で担当している。2015年度は3回開催し、のべ15名が参加した。近況報告から恋愛まで、話がつきることのない女子会となっている。

昨年度から予約不要のプログラムに移行して、ゲストを招いて行うプログラムは、「専門家と話そう」や「ピア＋トーク」で、女性向けを開催している。今後も、ネットワーク作りの手助けになれるような場、女性が気軽に集まれる会にしていく予定である。

(A)-(1)-7　ミックス・トーク10(MT10)

年代や性別、セクシュアリティといった枠を越えて、さまざまな人と少人数でじっくり話したい…という要望を受けて立ち上げたプログラムである。参加は先着10名とし、定員となった場合にはキャンセル待ちとなる。進行は３名のピア・スタッフがチーム体制で担当し、普段なかなか密に話す機会のない参加者同士が和やかにじっくりと話せる場となっている。途中で2グループに分かれてそれぞれでテーマ別に話題を深め、後にお互いに報告しあうという進行上の工夫も行っている。今年度は3回開催、のべ25名参加(ピア・ファシリテーター３名のべ6名含む)。今後も年に数回のペースで開催を予定している。

(A)-(1)-8　陰性パートナー・ミーティング

陰性パートナー・ミーティングは、奇数月の第1土曜日に開催されている。今年度は6回の開催で、のべ39名が参加した。男性だけでなく、女性のパートナーの参加もあり、セクシュアリティ、既婚の有無などを問わず多様な参加者が集っている。陽性者の周囲で生活する人たちにとっては、他ではなかなか話せないことを話すことができる場となっている。2001年１月に始まって2016年2月まで、122回のべ489名が参加している

(A)-(1)-9　もめんの会(母親を中心とした親の会)

もめんの会は、年に3～4回開催されている。2015年度は4回のべ10名が参加した。子どもからその事実を知らされて10年以上経つ人もいれば、最近知らされてその事実を受け止めるのに苦労している方もいる。子どもの年齢も10代から50代までと非常に幅広く多様だ。もめんの会は、子どもには言いづらい親としての思いをお互いに聞き合う会となっている。

パートナーや母親などの家族が、他の場所でHIV陽性者とともに生活することに起因する様々な思いを吐き出す場はなかなか得られない。どんなに有能な専門家の言葉よりも、時には「私もそうだったの」という一言に勇気づけられることもある。ミーティングが成り立つためには、その場をあたためていてくれる同じ立場のメンバーたちがいてくれることが開催の必要条件となる。こうした、「私も大変だったときに他のメンバーに支えられたから、参加できる時にはきます」というお母さんたちの存在で、この貴重なサポートの場がたもたれている。

また、事前の連絡は必要であるが、父親の参加も可能となった。

(A)-(2)学習会／ワークショップ／セミナー

HIVと長く付き合いながら、自分らしく生きていくために必要なスキルを身につけるためのワークショップや、専門家からの情報や、社会制度の基礎など、陽性者に役立つ情報を提供する学習会、企業の人事担当などを招いて行う「就職支援セミナー」などを開催している。

(A)-(2)-1　ストレス・マネジメント講座 ～ストレスとうまくつきあうためのワーク～

HIV陽性者のためのストレス・マネジメント講座は、今年度、全2期を実施し、第24期から第25期の講座を開催した。平日の夜間開催であり、のべ43名が参加した。

各期は全3回のプログラムからなり、ストレスに関するワークをしながらマネジメントスキルを身につけることをめざした。実施日と各回の参加者数は次のとおりである。

【第24期】

第1回　2015年5月11日(月)　14名
第2回　2015年6月15日(月)　 9名
第3回　2015年7月　6日(月)　11名

【第25期】

第1回　2015年10月20日(火)　2名
第2回　2015年11月17日(火)　2名
第3回　2015年12月　8日(火)　5名

各回の内容は参加者数や事前アンケートによる参加者のニーズによって調整を行うが、基本的には第1回で「ストレス反応」について学習し、第2回では「思考パターン」を知り、第3回に「ストレス対処法(コーピング)」の見直しを行う。ストレスに伴う心身の状態に自覚的になることや、否定的で極端になりやすい思考や認知について学習することで、ストレスに対する自分の構えや傾向を知ることができる。また、より健康的な対処法を考えることで、ストレスに直面したときに、悪循環に陥らないように積極的な対処をすることができる。

参加者のストレス状態や生活状況はさまざまであるが、参加者同士で話し合うことで、自分の状態や傾向について新たな気づきを得ることができる。HIVにまつわる不安や恋愛や性に関する話題も出ることが多く、他の参加者と話し合うことで、安心感が得られたり、新たな対処法に気づいたりするようであった。

今後、参加者のニーズの多様性に合わせながら、有意義なグループワークとなるようにさらに改良しながら取り組んでいきたい。

次年度も継続的に開催する予定なので、多くの方の参加をお待ちしています。

（報告：野坂 祐子）

(A)-(2)-2　アサーティブ・コミュニケーション　自己表現のABC

相手も自分も大切にする自己表現＝アサーティブなコミュニケーションを身につける、2回構成のワークショップ形式の講座である。ストレス・マネジメント講座を受講してから参加すると、より効果的なプログラムとなっている。

2013年1月に新プログラムとして始まり、2015年度は、7月に第6期、1月に第7期が行われた。講師は、パフスクールで「再出発のための自分史」を主宰し、NPO法人アサーティブジャパン認定講師である沢部ひとみさんである。2日間連続の参加が条件ということもあり、遠方からも参加しやすいように土日連続開催としている。HIV陽性者を対象にしているので、関連した内容を盛り込んでいただいている。ロールプレイングでは、普段の人間関係のなかで抱えている課題をテーマとするなど、より実践的に役立つプログラムとなっている。参加者からはフォローアップ・プログラムの開催を望む声もあり、今後の検討課題となっている。

【第6期】

第1回　2015年7月18日（土）　5名

第2回　2015年7月19日（日）　5名

【第7期】

第1回　2016年1月30日（土）　8名

第2回　2016年1月31日（日）　7名

(A)-(2)-3　専門家と話そう

2015年度の「専門家と話そう」は、下記の通り2回開催した。

「HIV陽性者と子づくり」では、治療法の進歩に伴い、HIV陽性者による子づくりが現状ではどう考えられ、整理されているのかを、第一線でHIV診療を担当する医師をお招きしお話を伺った。今回はHIV陽性者の男性・女性だけではなく、パートナーの男性・女性、親も対象としたSpecial開催とした。

「クリニックのドクターと話そうⅡ」では、品川駅前のクリニックで診療を始めた元東大医科学研教授の岩本医師をお迎えして、HIV診療の歴史や現状などについて話していただいた。

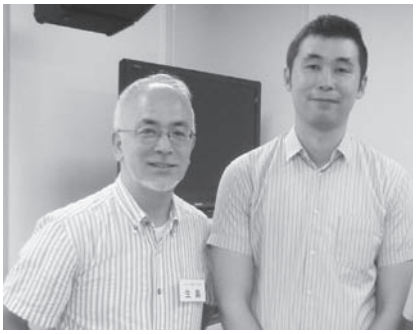
いずれの回も、後半の質問コーナーではたくさんの質問に対してひとつひとつ丁寧に答えていただき、充実した学習会となった。

第15回「HIV陽性者と子づくり」

・日　時　2015年6月13日（土）

・ゲスト　村松　崇さん（東京医科大学病院臨床検査医学科医師）

・参加者　18名＋1名（医療従事者：オブザーバー参加）



村松 崇さん（右）
司会の生島（左）

第16回「クリニックのドクターと話そうⅡ」

・日　時　2015年9月26日（土）
・ゲスト　岩本　愛吉さん（品川イーストクリニック感染症内科／元東京大学医科学研究所）
・参加者　14名

岩本 愛吉さん（左）
司会の生島（右）

(A)-(2)-4　ベーシック講座「知っとこ！社会福祉制度」

2011年1月からスタートしたプログラム。今年で開催はまる5年となった。「基本のキ」をつかんでより良い制度利用ができるよう、わかりやすく解説している。「講義形式」というよりは、参加者が疑問に感じているところや興味を持っているところなどを中心に話を進行していく。担当者の変更に伴いタイトルも一新して、年に2回の開催を予定している。

・日　時：5月27日（水）、11月18日（水）
・参加者：のべ　5名

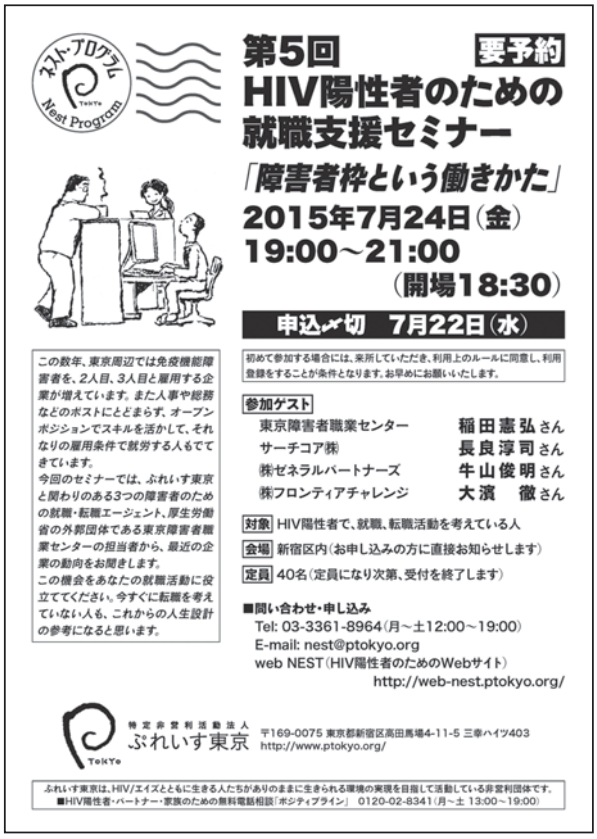
(A)-(2)-5　ベーシック講座「HIVってどんな病気？」

2014年6月からスタートしたプログラム。新陽性者PGMのなかで行っている「医療情報セッション」の出前講座として、基本的なHIV／エイズについてレクチャーを行う。年に2回開催を予定している。今後、陽性者だけではなく、家族やパートナーといった周囲の方を対象とした回も開催する予定である。

・日　時：7月17日（金）
・参加者：1名

(A)-(2)-6　就職支援セミナー

企業の人事担当者などを招き、企業はどのような目線で応募者を見ているのか、求人情報、社内の情報管理や配慮はどうなのかなどを話していただき、陽性者の就職・転職活動に役立ててもらうセミナーである。2015年度は7月24日（水）に第5回を開催した。参加者は23名であった。今回は特に「障害者枠という働きかた」というテーマで、業種・業態の異なる企業の人事担当者などにきていただき、お話を伺った。後半には、活発な質疑応答が行われた。



(A)-(3)交流会

2011年1月に「トークサロン」としてスタートしたプログラムは、今年度より「交流会」と名称を変更した。境遇や立場がより近い陽性者同士で集まって、日ごろ疑問に思っていることや経験を可能な範囲で共有しつつ、おしゃべりしなが

ら考える場である。また、さまざまな経験をもつHIV陽性者を迎えて話を聞くというプログラム「ピア＋トーク」も開催している。その他、カップル交流会、年末パーティなどのイベント的なプログラムも行っている。

(A)-(3)-１　「就職活動サポートミーティング」

一般枠で就職活動をしている人、障害者枠で就職活動をしている人など、就職活動といってもいろいろあるが、お互いの状況を聞き合いながら自分の方向性を考えるきっかけをつかんでもらう場である。現在、毎月1回、水曜日と土曜日の交互開催となっている。

メンバーのなかから就職して卒業するという方が出てきて、その後、ミーティングに成功体験を共有するために報告にきてくれるなど､実践的な情報が得られる場となっている。メンバーは入れ替わりながらも、毎回、2～8名の陽性者が参加し、自分の就職活動の方向性を考えたり、不採用という結果を受け取りながらも、心が折れないように互いを励まし合う場となっている。

2015年度　12回　開催　　参加者　のべ　56名

(A)-(3)-２　「介護職として働く陽性者の交流会」

介護の仕事をしていると、利用者さんがケガしたり、ひっかいたり、つねったり、暴力行為をしたりなどする場合がある。このトークサロンは介護に従事している陽性者同士で、仕事の悩み､将来のことなどを話し合う場である｡介護職ミーティングでは、働き方を変えること（キャリアチェンジ）を検討中の人たちからの参加も受け入れている。実際ミーティングに参加しながら、介護職員初任者研修に参加し、就職に至った人たちもいる。現在、2ヶ月に一度、偶数月に開催している。

2015年度　6回　開催　　参加者　のべ　52名

(A)-(3)-３　「看護師として働く陽性者の交流会」

日ごろHIVを持ちながら看護師として働くなかで、疑問に思っていたり不安に思っていることについて同じ立場の人同士で集まり、おしゃべりしながら考えてみる場である。介護職と同様に、同じ立場の陽性者と話してみたいという要望から生まれた会である。2013年1月にスタートして､現在は、2ヶ月に一度、奇数月に開催している。現在は看護師だけではなく、医療現場で働く有資格者の参加も受け入れている。

2015年度　6回　開催　　参加者　のべ　45名

(A)-(3)-４　「障害者枠で働く陽性者の交流会」

障害者枠で働いている方々の交流や情報交換の場として、2015年1月のプレ開催を経て正式にプログラム化された。障害者枠ならではのメリットやデメリット、働き方に対する考え方などを共有することで、お互いの悩みの解決や今後の方向性を考えるきっかけとなる場である。現在のところ、年に数回の不定期開催となっている。

2015年度　4回　開催　　参加者　33名

(A)-(3)-５　「教師として働く陽性者の交流会」

教師として働く陽性者の交流の場として、2015年3月のプレ開催を経て正式にプログラム化された。学校という環境のなかで働くことの悩みや困難などをわかち合い、同じ立場で考えたいという要望を受けて生まれたプログラムである｡「障害者枠で働く陽性者の交流会」と同様、現段階では年に数回の不定期開催となっている。

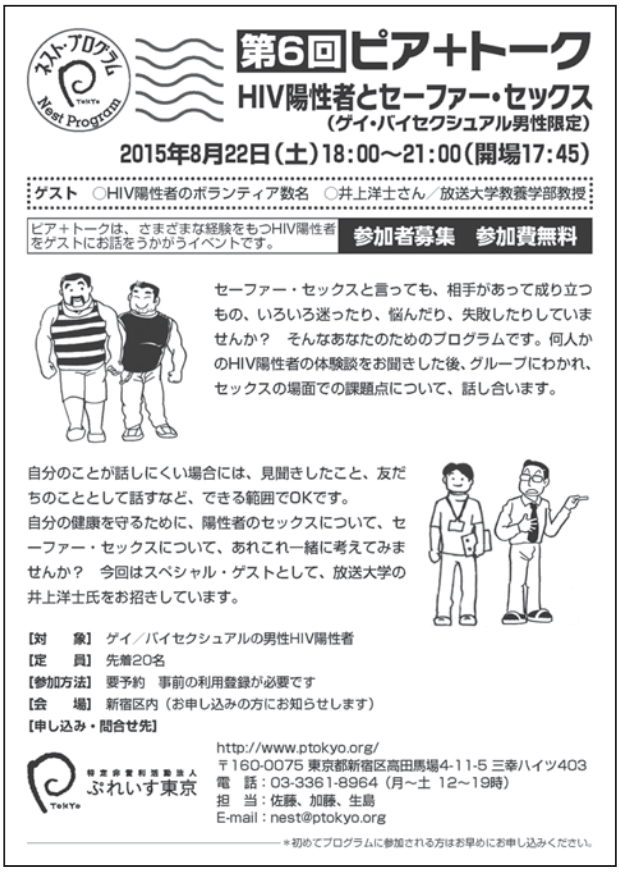
2015年度　4回　開催　　参加者　24名

(A)-(3)-６　第６回ピア＋トーク「HIV陽性者とセーファー・セックス（ゲイ／バイセクシュアル男性限定）」

HIV陽性者スピーカー３名と講師に井上洋士氏（放送大学）を招き、グループ・ワークなども交えながら男性同士のセーファー・セックスについて考える機会となった。

※参加者の感想文を33ページに掲載しています。

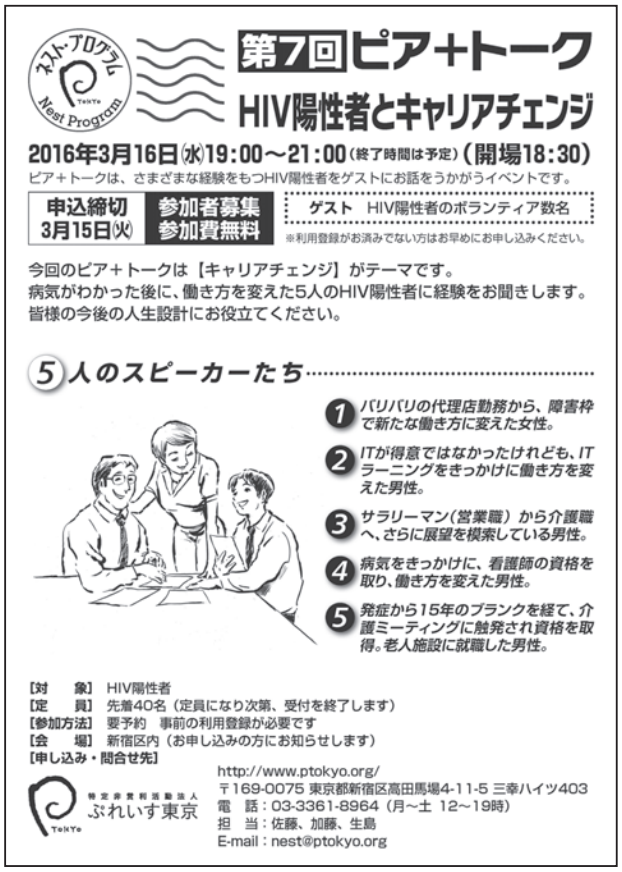
・日　時　2015年8月22日（土）
・参加者　16名（講師を含む）



(A)-(3)-7　第7回ピア＋トーク「HIV陽性者とキャリアチェンジ」

病気がわかった後に働き方を変えた5人のHIV陽性者を招いての開催。資格を取り業種を変えたり、多忙な仕事から障害者枠に変えるなど、多様な生き方について経験を伺った。

・日　時　2016年3月16日（水）
・参加者　28名



(A)-(3)-8　カップル交流会（＋／＋or＋／－カップル）

カップル交流会は、陰性パートナー・ミーティング参加者からの「カップルで参加できる場が欲しい」との声で開始した。陽性者と陰性者、陽性者同士のカップルで参加可能なイベントであり、カップルが持ち回りで世話人として企画・運営に主体的に関わっている。参加するカップルも、同性愛、異性愛、陽性者と陰性のパートナー、陽性者同士、英語で会話するカップルと、多様である。特に異性愛ミーティングの参加者の参加が増えており、男女も多く参加するイベントになってきている。本年度は、10月に1回開催された。

また、イベントだけではなくもっと気軽に参加できる場が欲しいという要望を受けて「カップル交流会カジュアル」がスタートした。過去にふたりでカップル交流会に参加した方、陰性パートナー・ミーティング参加者はひとりでも参加が可能で、予約不要の情報交換の場として機能している。1月開催の初回は19名の参加があった。

・第23回カップル交流会「秋のクルーズとランチ」
　2015年10月25日（日）
　世話人1組と7組のカップル 計16名

※『カジュアル』参加者の感想文を35ページに掲載しています。

(A)-(3)-9　年末パーティ

12月13日（日）に開催された年末パーティには、参加者、ネストスタッフ、事務所スタッフを含め、57名が参加した。合同研修からネスト・プログラムのネストスタッフ研修を経てボランティアとなったスタッフには、今年も当日の買い出しやセッティング、後片付けまで積極的に関わってもらった。全員に簡単な自己紹介をしてもらい、参加者のおひとりに歌を歌ってもらうなど、和やかかつ賑やかな会となった。また、各ネスト・プログラムの説明や参加しての感想などを、実際にプログラムに参加している方から話していただいた。しばらくぶれいす東京から遠ざかっていた方から最近アクセスされた方まで、実に幅広い参加者の方々が集い、大変盛り上がった。2時間半があっという間に過ぎ去り、楽しいひとときとなった。

※参加者の感想文を36ページに掲載しています。

(B)人材育成・研修

(B)-(1)　ネスト・スタッフ育成

ネスト部門の人材育成・研修は、2012年度に初めて行った。2011年1月より利用登録制がスタートし、利用者の安全性が大幅に向上した。これまでの利用登録者は788人（2016年3月末現在）となり、ネスト・プログラムの数や参加者が増えてきている。多目的室の入場時のチェックなど、ゲートキーパー的な役割を担うボランティアベースの人材（セクレタリー）の必要性が増大している。また、グループ・プログラムのファシリテーターなど、HIV陽性者を含む多様な人材がプログラム運営のなかでますます重要となってきている。

現在、「ボランティア合同研修」→「ネストスタッフ研修」から、プログラムのファシリテーターやセクレタリーへとつながる流れを継続しており、増加するプログラムや参加者への対応のなかで大きな役割を担っている。プログラムにも参加経験のある陽性者当事者が、研修を通じてスタッフとして活躍することも増えている。

2015年度も新人ボランティア合同研修修了者を対象に、ネスト部門のボランティア募集を行い、11月3日(火･祝)に、ネスト部門を希望した10名(男性：8、女性：2)と、過去に合同研修を修了して他部門で活動中の2名、ピア・プログラムの担当スタッフ2名が参加して、「ネストスタッフ研修」を行った。プログラムでは、ファシリテーションのスキルに関するもの、自己の参加動機を振り返るような参加型のワークショップを行った。

その後、セクレタリーやグループ・プログラムのファシリテーター候補者に、個別、またはグループでオリエンテーションを行っている。

昨年の日本エイズ学会学術集会において、ネスト・プログラム・コーディネーターの佐藤郁夫が、「HIV陽性者のためのピア・ミーティングの運営と当事者の運営参加に関する考察」と題した発表を行った。そこでは、ピア・スタッフの参加割合が増加することが、利用者全体の増加につながると報告している。

(B)-(2)　地域における当事者支援のための支援プログラムの効果

2013年度にスタートした「地域における当事者支援のための支援プログラム」は、ぷれいす東京が20年に渡り積み上げてきたプログラム運営のノウハウを共有し、各地のHIV陽性者や周囲の人たちへの支援の実践に役立ててもらうことを目的としたプログラムであるが、今年度は昨年度同様に残念ながら中止となった。

昨年立ち上げの際に協力した新潟のピア・ミーティング「らっくら」について、昨年の日本エイズ学会学術集会においてその後の状況に関する報告があった。年に数回というペースながら、継続的に開催されているとのことだった。運営体制などにまだ課題はあるようではあるが、今後改善を重ねながら継続して行くとのことである。ぷれいす東京も、今後も可能な限りサポートをして行きたいと考えている。

Ⅳ．最後に

ネスト・プログラムでは、利用者である当事者の声から、その要望に応える形で新規プログラムの企画を行ってきた。今年度は全く新たに立ち上がったプログラムはなかったが、これまでイベントを中心とした開催だった「カップル交流会」において、予約不要の「カジュアル」が始まった。平日の夜の開催にも関わらず、19名もの参加があり、ニーズの高さを感じた。

また、研修修了者から次々と人材が育ち、いくつかのプログラムにおいて複数名のファシリテーターによるチーム担当制を行っている。ローテーションを組むことで担当スタッフの調整がしやすくなり、参加者にとってもさまざまな組み合わせの進行を経験することで、より多様なグループのあり方を体感してもらえることが期待される。この方式は、今後も押し進めて行く予定である。

今年度は、新規利用登録の数は前年と比較して減少した。昨年度大きな増加が見られた既存のプログラムへの参加人数も、今年度は落ち着いている。しかしながら、利用者のさまざまなニーズに応えるべく、プログラムの内容や進行の改善などを順次行っており、そのなかでますますボランティア･スタッフの力が必要となってきている。ぷれいす東京は、2003年よりボランティア希望者のための3日間に及ぶ合同研修を行っている。そこには、HIV陽性者や周囲の人たちも含まれている。そうした方々のなかから、HIV陽性者、周囲の人のためのネスト・プログラムに参加を希望する人たちが出てきた。一方で、グループ･プログラムにおける受付業務、ピア・ファシリテーターを担う人材育成が急務になり、2012年度からネスト･プログラムの研修を開始した。これまでは、相談員と新陽性者PGMのコーディネーターが個別に声かけをして、ピア・ファシリテーターやスタッフ・ファシリテーターをリクルートしてきたが、この研修を立ち上げることで人材育成のステップが整理されることになった。そして、ピア・ファシリテーターは新陽性者PGMだけに止まらず、他のグループ・プログラムにも関わる機会が増えている。

また先に記載した通り、Webの統合によってこれまで以上にネスト・プログラムへのアクセスが便利になった。Webのフォームから直接プログラム参加の申し込みが可能となり、参加者の感想文などの閲覧もしやすくなった。ぷれいす東京に関わるさまざまな方の声を直接反映する「ぷれいすVoice」や、ネスト・ニュースレターのPDF版置き場など、サイトを訪れた人が使いやすく便利だと感じられるような工夫を随時構築している。

謝辞

今年度も多くの個人のみなさまと団体からご寄付をお寄せいただきました。社会情勢が厳しくなっているなかでご支援いただいたことを深く感謝いたします。助成していただいた東京都福祉保健財団、ご寄付をお寄せいただいたEY税理士法人、MSD株式会社、オフィス Two I(五十音順、敬称略)、そして多くの個人のみなさまに改めて御礼申し上げます。

ゲイ雑誌「サムソン」に、支援者の語りが毎月掲載されております。また、ゲイ雑誌「Badi」で、2014年2月号(2013年12月発売)から2016年2月号(2015年12月発売)まで連載を行い、ぷれいす東京のスタッフ3名が交代で執筆をしておりました。その執筆者の原稿料を活動収益金とさせていただいています。

(文責：生島 嗣、佐藤 郁夫、加藤 力也、原田 玲子)

Ⅴ．感想文

新陽性者PGM参加者のアンケートより（抜粋）

- 混乱してて不安しかなかった自分から、これからの事をしっかり考えられる自分に変わったと考えられた。参加して本当に良かった。
- 参加前は右も左もわからない状態だったが、今は自分の病気や取りまく環境が把握できて、自ら歩んでいけるように思える。
- 立場の違うファシリテーターが2人いたので、先輩としてのアドバイスをもらえたり、一般的な話に落としこんだりというのがあったのが良かった。
- 同じ境遇にある人が居る。それぞれの立場で、それぞれのやり方で頑張っていることを知れたこと。
- 安心感。これから先、行きていける感じがした。
- 参加前の状況が思いうかんできました。戻りたくないなーと思いました。そして、前向きになれててよかったと感じました。
- 2ヶ月前の自分では想像できないくらい心が軽くなりました。
- 不安100%→不安50% 希望50%
- 薬の不安などの悩みが、皆さん同じで、そういう事をshareできた事は、ありがたかったです。

カップル交流会カジュアル参加者の感想文（「ネスト・ニュースレター」2016年3月号掲載より）

■「フタを開けてみたら」

よし（男性／ゲイ／陰性パートナー）

はじめての試みで開催したカップル交流会カジュアル。予約もなく、来たいと思ったら途中からでも良く、必ず二人一緒でなくてもいい、という肩肘をはらずに気軽に参加できる会を企画し開催しました。

よりたくさんのカップルに来てほしいな～と思ってましたが、平日の夜なのでどうかなという不安もありましたが、初参加を含めて総勢19名も参加してくれて、本当に嬉しかったです。

ただ初めての開催なので、手短とはいえ全員から話しを聞いたため時間がなくなり、今後どのように会を進めていけばいいかが、課題かなと思いました。でもこの会が軌道に乗り、たくさんのカップルの良き場所になればと願っています。

■「その先が知りたくて」

516号（初参加／男／ゲイ/30代／陰性パートナー）

付き合って間もなく相方が陽性者と知り、陰性者の私としては知識も情報も乏しく不安な日々を過ごしていました。このプレイはOK？こんなのはどうなの？など自問自答の暮らしの中、相方に誘われて初参加したカップル交流会。陰性者の私としては少しでも不安を拭えるようになればと思っていました。

幅広い世代のカップルの皆さんが、自分の立場や相方との向き合い方を話して下さり悩んでいるのは自分だけじゃないんだなぁと肌で感じる事が出来ました。自分の口から不安な日々を初めて話せる事が出来てどこかほっとしました。本当はずっと誰かに聞いてもらいたかったのかも知れません。それだけでずっと楽になりました。

不安がゼロになった訳ではありません。それでも僕らがこれから付き合って行くためにこれからもアドバイスを遠慮なくもらいに行きたいと思います。

■「茶菓子とお漬物と“お互いの愛”」

OPA（初参加/40代／ポジティブ）・
Deigo（初参加/20代／ネガティブ）

交際歴3年半のゲイカップルです。交際開始の三か月後に僕のHIV感染が発覚。その事実をきっかけに同居を始め。現在に至っております。昨年の夏にぷれいす東京の存在を知り、『ミドルミーティング』に数回参加させて頂いております。常々、ネガティブのパートナーさんが抱える葛藤、疑問、不安の声を聴いてみたい、僕のパートナーの心の負担を少しでも軽減したいという思いから、今回の交流会に参加させて頂きました。

お一人、ストレート同士、ゲイ＆ストレート、20年以上のお付き合い、昨年の12月にカムアウトされたばかり、僕たちを含めた初参加組と、多岐に渡ったカップルの方々の貴重なお話を聴くことができました。

それぞれに持ち寄った茶菓子やお漬物（笑）を頂きながら、温かくも時には神妙にお話を伺うといった雰囲気の中、“真っ直ぐな心”を持ち合わせた方々との交流はとても有意義なものでした。様々なお話、エピソードの中で共通していたのは“お互いの愛”でした。思わず拍手を送りたくなるようなエピソードも伺え、改めて“大事なこと”を確認することができた会でした。また参加させて頂きます。ありがとうございました。

第6回ピア＋トーク「HIV陽性者とセーファー・セックス」参加者の感想文（「ネスト・ニュースレター」2016年2月号掲載より）

■「よくわからないから、話せる」

ぴーぽくん（26歳／男性／感染告知年:2012年）

ぷれいす東京さんの会に参加させて頂くのは今回で2回目でした。テーマはずばり「HIV陽性者とセーファーセックス」。その場にいた人達の共通点はたった2つ。「ゲイ（又はバイ）で、HIV陽性者である」こと。面識もほとんどない方たちとセックスについて語り合うなんて、ハードル高っ…という考えはすぐに杞憂に終わり、「よくわからない」相手だからこそ話せることがあるんだなと実感できました。

進行内容は2班に分かれ意見を発表し合ったり、3人の先輩方の一問一答コーナーがあったりと、なかなか濃密＆ハード。皆さんのぶっちゃけトークに妙に感心したり不覚にも爆笑してしまう場面もありました。

でも、よくよく考えればこれって私達HIV陽性者にとっては永遠の課題であったりして。考え方も人の数だけあって当たり前だな～と思う場面もありました。帰りの電車の中で皆さんの発言を思い出しながらつくづく実感しました。スタッフの皆さま、参加者の皆さま、貴重なお時間ありがとうございました。

■「ひとりじゃない」

シン（感染告知年:2012年／服薬歴2年／初参加/40代）

「仲間がいるって本当に素敵な事だな」

今回参加させていただいたピア＋トークが終わった時に、まず真っ先にそう思えました。

最初、円を作って一人一人の顔が見渡せる席に着いた時は、みんな若干うつむき加減でどこかぎこちない表情をしていましたが、3時間共に共有した時間の後にはみんなの顔には安堵と笑顔がありました。

普段親しい友達とも中々話す事のないHIVの事やセーファーセックスについて、赤裸々にいろいろな話ができた事で、ほとんどの方が初めて会う方々ばかりでしたが、終了後には何とも言えない結束感や安心感が生まれました。

HIV感染告知を受けたあの日、頭が真っ白になり、家族や友達になんて話したら良いんだろう、仕事は今後どうしたら良いんだろう、治療や通院はどのようにしたら良いんだろう、そんな分からない事だらけで不安になった日から、今ここにこうして同じような事で不安を抱え、悩みながらも一緒に歩んで行ける仲間がいる事、普段誰に話したら良いのか分からない事でも話ができる場所があると言う事を知ったのが何よりも心強いです。

もしも、今あの日の自分のように不安や心配で押しつぶされるような気持ちになっている人がいたら、是非知ってほしいことがあります。それはあなたは決してひとりではないって事、そしてあなたと共に歩んでくれる仲間がいる、あなたを受け入れてくれる場所があるという事を、是非心に留めて自分のペースで大丈夫だから一歩一歩前に向かって進んでみませんか？

きっと今の自分を思い出して、笑顔で明日を迎えられる日が来ますよ、一緒に。

■「怖さや孤独感が軽くなった」

akashi

「SEX」できっとこの病気に感染。そのことが頭と身体にしみついているのか、告知後から人と肌を重ねるSEXはゼロ！！（頭の中で想像することで疑似恋愛している感じでした。）

1番は自分が感染したように相手へ感染させることへの不安。病気への偏見などたくさんのネガティブ思考でどんづまり。今回のトークで1番感じたのは、病気に対する無知！！情報量のなさです。きっとお医者さんやスタッフさんに何かあれば聞くという他人まかせだったからと思います。（反省）

そして自分は1人で解決するには限界があると感じていたので考え方は様々でも、同じ病気の人の話を聞くことで、自分の中の怖さや孤独感などが軽くなったと思います。全てが悩み0になることは難しいかもしれませんが、支えてくれる人がいるってスゴイと思います。

まず自分から動いて知ろうとするアクションも必要だと。トークに参加して感謝です。ありがとうございました。

■「ナマセックスにだってワケがある」

せき

今回、参加者と同じくHIV陽性者として進行役を行う「ピア・ファシリテーターをしてほしい」との打診を受けたものの、結果は一参加者としてとても有意義なものでした。

スピーカーの話やアンケート調査の結果を聞いて驚いたのは、自分自身では全くありえない、ナマで抜き差しするセックスをする人が結構な数でいることです。そしてそうした人でも何かしらの考えがあるのだなということが分かったことでした。何がいい悪いじゃなく、この多様性に触れ、Safe SexでなくSafer Sexであるその意味を改めて考えるいい機会にもなりました。何より、参加者の方々の声を聞くことで、自分自身のセックスのあり方を再確認できたことは気持ちをスッキリさせてくれるものでした。

人生の中で、セックスの話をじっくりする時間は滅多にあるものではありません。従って今回のような場は、自分自身を理解するとともに、どこかアタマの片隅で居心地悪く残っているセックスにおけるリスクを、ただ不安や恐怖で終わらせず、自分なりの答えにすることで、結果として今後の人生をよりよくする大切なきっかけになると強く感じました。主催の方の準備・実施は大変と思いますが、ぜひ継続していただきたいと願っています。

年末パーティ参加者の感想文（「ぷれいす東京Webサイト」2016年2月掲載より）

■「初めての体験」

サリー（女性/40代）

私はこのぷれいす東京のプログラムに参加したのは、2回目の新参者です。この病気を知ったのは、2か月位前…。パートナーのいきなりエイズからでした。この2か月の間が、もの凄く長く感じます。いろんなことがバタバタ起きて、精神的に参っていたところ、病院でこちらを紹介されました。内服治療は、諸々の書類が揃ってから開始予定となっています。

以前参加したのは、異性愛者の会でした。泣いてばかりの2時間で、他の方々には、迷惑をかけてしまったかもしれません。だけど私には、心を落ち着かせてくれる時間になりました。このような場がある事に感謝しました。私だけじゃ無いんだ…。みんな同じ経験をされて来たから、みんなわかってくれる。嬉しかったです。

今回は、いろんな方がいらっしゃる、年末パーティ。ちょっと楽しみにして来ました。ホントにいろんな方い

らっしゃいました。女性は4名ほど。異性愛の男性も数人…。こんなにも男性が居ても、全く見向きもされないのは、初めての体験でした。逆に女性の数が少なくても、何も気にならない空間でもありました。不思議な体験です。性別やセクシュアリティは違っても、共通の話題がある。みんな頑張って生きて行こう。

今回の会では笑って過ごせ、また元気を貰えました。いつも穏やかな口調と笑顔で対応して下さる、スタッフの皆さん、生島さん、ありがとうございます。来年も沢山プログラムに参加して、元気を取り戻したいと思ってます！！

■「忘れる、忘れない」

オヤジ（50代／男性／服薬歴15年）

感染者は、ポジであるという事実を忘れてはいけないが、それと同時に、つかの間忘れないとハードな実社会で闘えないというジレンマを抱えている。いつも感染のことで思い悩んでいては、仕事ができないからだ。

今回、5年ぶりでイベントに参加させていただいた。しばらくぶりのオヤジの再来でも、懐かしがってくださるスタッフの方々の笑顔が心にしみる。

パーティがたけなわを過ぎた頃、ネスト・プログラムの様々なミーティングの紹介があった。なんと、ミーティングの多様さよ。この流れは、色々な理由によるのだろう。しかし、大きな流れとしては、「死」から遠ざかったことによって、余裕が生まれ、感染者に対応するイベントが多様性を帯びたのではないか（と勝手に想像する）。

15年前は、亡くなっていった近親者たちの思い出が記憶に生々しく残っていたり、自分自身が生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされていたり、飲みにくく回数の多い薬の服用や強い副作用に悩まされたりで、概ね医学上の問題で、感染者もスタッフ陣も右往左往していたように思う。

……そんな時代が去って、現在では、ある職種に限定されたミーティングや恋人同士の会が催されていたりもする。それは、結構なことだ。しかし、あの時代を生き抜いたオヤジとしては、たまにイベントに参加させていただくことで、「楽しみ」と同時に、日々実社会に没入している自分を、感染という現実に呼び戻すための、「戒め」ともしている。

■「少し気持ちが楽になった」

さとし（30代／男性）

陽性者だと分かって、1か月くらいで、誰にも悩みを相談できなく、落ち込んで過ごす日々が続いていました。誰かに話しをしたい、相談してみたいと思い、会員になりました。会員になって、すぐ参加できるイベントが年末パーティだったので、少し不安な気持ちもありましたが行ってみました。

ほかのプログラムにも参加したことがなかったので、どんな風に話をふればよいのか？どの程度まで質問してもいいのか？最初、戸惑っていました。

他の参加者は、誰も自分のように深刻で暗い顔して、ふさぎ込んでいる人はいなく、フレンドリーで、自分からも徐々に話せるようになりました。

他の参加者の方に、自分のネガティブな話を聞いてもらったら、「最初はそうだよね～。しばらくして体調落ち着いたら、楽に過ごせるよ」と言われ、少し気持ちが楽になり、それだけでも年末パーティに参加した甲斐があったと思います。これから他のプログラムにも参加してみようと思います。

■「初手伝いと初参加」

ラインデリア（男性/ゲイ/30代/感染告知2005年/服薬歴11年）

ネスト・プログラムの年末パーティに参加することと、そのお手伝いとして活動することを今回、同時に初体験しました。無理なく自分にできることで役に立てれば～と思っていましたが、参加者自身で会話の輪が出来たり和やかな空気を作られていたので、安心しました。

一人一人の自己紹介が終わると一気に親近感が湧き、参加者の歌で盛り上がりがクライマックスになりました。用意された軽食と飲み物で腹も満たされ、また和んだ雰囲気で心も満たされて充実した時間が過ごせました。個人的には最後のケーキにテンションMAXになり、参加してよかった！と思ってしまいました（笑）。次回のパーティではスタッフからの出し物に期待して、さらに盛り上がりたいと思いました

■

じゅん（30代/男性/ゲイ/感染告知年2010年/服薬開始2012年）

初めて参加させて頂きました。たくさんの方が参加されていて、同じ仲間がたくさんいるんだなと勇気づけられました。

サンドイッチやケーキまで頂いて、どうもごちそうさまでした！

あまり多くの方と話はできませんでしたが、プログラムの紹介などあったので、今度はプログラム参加してみようと思いました。

1. スタッフ研修

バディ・スタッフとして活動するには、基礎研修を受けた上で部門の研修を修了することを条件としている。基礎研修は、HIV/AIDSに関する知識を身につけるとともに、自己のHIV/AIDSのイメージを認識すること、そしてバディとしての関わり方をどのようにもつか、自分自身でイメージしてもらうことを目的としている。基礎研修は、年に1度の各部門合同での「合同研修」にて、部門研修は「バディ・ワークショップ」にて行っている。

(1)基礎トレーニング

●合同研修

今年度は2015年9月6日、13日、23日の3日間で行なわれた。この研修は各部門合同であり、研修項目も共通したものとなっているが、バディ部門のみならず、ぷれいす東京の全体の活動とHIV感染症の関連領域も学び、幅広い視点と知識を得てもらうことを目的としている。（詳細は6ページを参照）

（実　績）

2015年度の研修の終了時点での活動希望者は14名となった。

(2)一日ワークショップ（8時間）

バディとして活動を始めようとする自分自身を見つめ直すこと、またクライエントがどのような状態にあるのか理解を深め、その上でバディの役割とは何か、クライエントとの関係性について、自分がバディとして何ができるか、等を考えてもらうことがこのワークショップの目的となっている。また、ワークショップの中では、実際の利用者に協力いただき、利用者の生活についてお話していただくなどしている。

（内　容）

・アイスブレーキング
・自分の最初の喪失について
・自分がバディだったら（仮想体験）
・HIV陽性者と語る
・喪失を体験するワークショップ
・分かち合いの時

（実　績）

2015年11月8日（日）に開催。13名が参加、修了してバディの登録を行なった。

2. スタッフ・ミーティング/交流会

●バディ活動スタッフのためのミーティング

活動中のスタッフを対象として、バディ・ミーティングを行っている。午前ミーティングは、奇数月/第1土曜日/11:00～、偶数月/第1木曜日/11:00～に開催、夜間ミーティングは第3木曜日の19:00～で開催した。なお木曜日の午前ミーティングについては参加者が少ないため、参加がある場合にのみの開催とした。

参加者は2～8名程度で、それぞれが担当しているクライエントとの関わりについて、担当者同士やコーディネーターと相談できたり、お互いにアドバイスしあえる場となっている。また、必要に応じて、個別にクライエントに関わる個別ミーティングやスーパーバイズも実施している。

また、不定期ではあるが、バディ同士の交流を目的とした交流会も開催している。

（実　績）

バディ・ミーティング	2015年度は19回（中止 5回）開催し、のべ81名が参加
個別ミーティング	2015年度は18回実施

3. 登録バディのフォローアップ・トレーニング

● フォローアップ研修

基礎トレーニングを終了したスタッフを対象とした研修となっており、待機中のバディに陽性者との関わりについてイメージする機会や、関係の深い問題について知識を得て、考える機会を提供している。

また、既にバディ活動を行っているスタッフが、自分とクライエントとの関係について、バディの役割について、客観的にとらえる機会になることを目的としている。

4. スタッフの構成（2016年4月末現在）

(1)性別

男　性	36人
女　性	25人
合　計	61人

(2)年齢

20歳代	4名
30歳代	9名
40歳代	33名
50歳代	12名
60歳代	1名
70歳代	2名

5. 2015年度バディ活動実績

(1) 派遣依頼

・前年度より活動を継続	18名
・活動休止中	5名
・新規依頼	2名
・再依頼	1名
合　計	26名

・バディ派遣終了		3名
派遣終了理由	死亡	2名
	ニーズの消失	1名

※2016年3月末現在の派遣状況

・活動休止中	6名
・派遣継続中	17名
合　計	23名

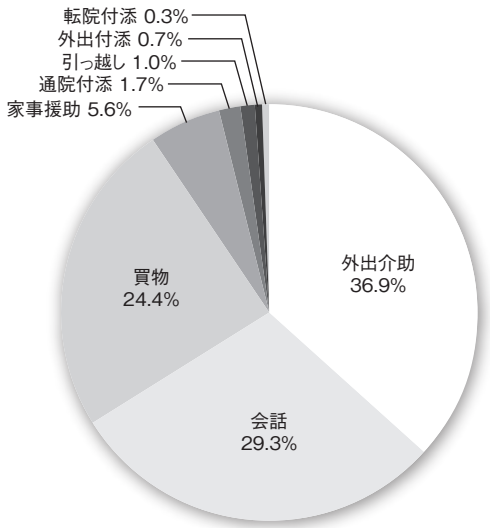
(2) 活動バディ・スタッフ

派遣依頼21名(休止中5名を除く)に対し43名のスタッフを派遣した。(利用者1名に対する実人数でカウント)

(3) 活動内容

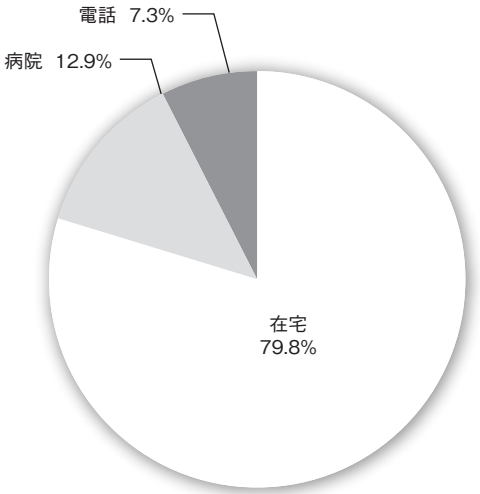
今年度のバディ派遣件数は、スタッフの報告をまとめたところ287件であった。そのうち、在宅訪問は229件(79.8%)、病院への訪問は37件(12.9%)、電話によるコミュニケーション(訪問連絡等の電話は件数に含まず)は21件(7.3%)であり、今年度の総活動時間は約620時間となった。

全体の内容別活動のまとめ (n=287)



新規に依頼を受けた派遣は2名、以前利用したことのあった方の再依頼が1名であった。新規の派遣内容は、外出介助、家の片付けなどの家事援助、再依頼は入院時の外出の同行で、3名とも継続になっている。今年度は活動が終了となるケースが3件で、2件はクライエントの死亡による終了、1件はニーズの消失による終了であった。なお、死亡された2件は、いずれもHIVの関連症状とは別の疾患で亡くなられた。

主な活動先 (n=287)

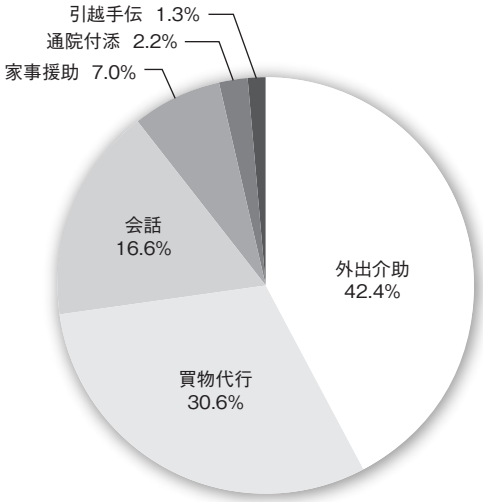


(4) 訪問先とサービス内容

●在宅訪問

在宅訪問での主な活動内容について、合計で229件の活動があった。内容別では、外出介助が一番多く106件(36.9%)であった。次いで買物代行が70件(30.6%)、会話が38件(16.6%)、家事援助が16件(7.0%)、通院付き添いが5件(2.2%)、引越しの手伝いが3件(1.3%)等となった。引越しは、入院中の方の在宅への引越しであった。外出介助や買物での活動が増えているのだが、どちらの活動においても会話をしながら活動しているケースがほとんどであった。内容としては、車椅子利用者だけでなく、視覚に障害のある方の歩行介助、杖歩行の方の外出介助/付添いもあった。

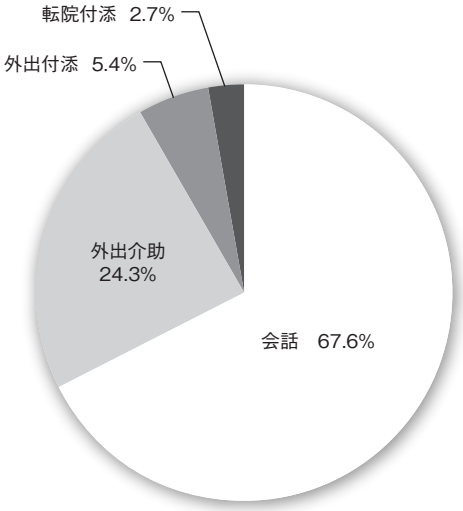
在宅での活動内容 (n=229)



●入院先訪問

入院先訪問は、昨年度より件数が増加して、合計で37件の活動となった。活動内容は、会話が25件(67.6%)、外出介助が9件(24.3%)、あとは外出の付添いが2件(5.4%)、転院の付添いも1件(2.7%)となった。

病院での活動内容（n=37）



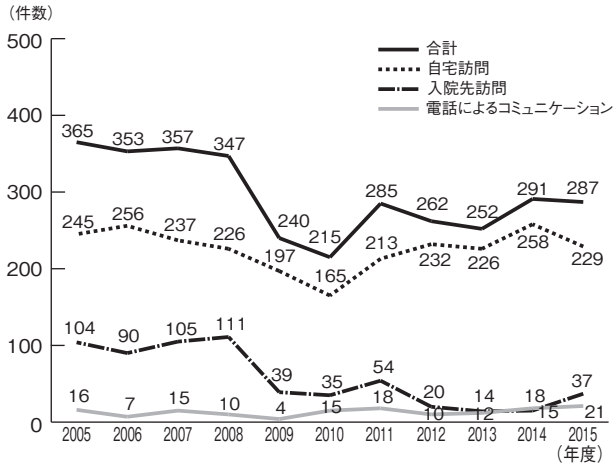
6. まとめ

●派遣件数は横ばい、活動内容は変化

派遣件数は、昨年度より4件の減少があったがほぼ横ばいであった。新規派遣は2件、過去に利用した方からの再依頼も1件あった。新規の2件については、外出介助の方と精神疾患を持つ方の家事援助での依頼で、その後も活動が継続されている。全体の総活動時間は約620時間と減少したが、要因はリハビリ通院の利用で頻度の高かった方が、身体機能の低下に伴いバディの外出介助が難しくなったため、買物代行や会話での活動に変更となり、支援時間が減ったことがあげられる。ただ、他のケースにおいては、利用者の身体機能の低下により活動時間がよりかかるようになったケース、外出同伴から外出介助になったケース、複数科の受診で時間が長くなったケースなどがみられた。活動の変更にあたっては、基本的には利用者本人と相談しながバディにできることを検討するが、場合によって利用者の公的サービスのケース会議に参加することもあった。

病院での活動が今年は37件あり昨年度と比較すると増加がみられた。これはリハビリのための長期入院になるケースが2件あったためであった。1件は脳幹梗塞による機能低下のリハビリ入院で、もう1件は糖尿病の悪化により足の切断があった方のリハビリ入院であった。なお、1件は在宅に戻ることが難しくなり、地方の施設に入所し活動休止に、もう1件は在宅に戻ることになり、入院中の家探しも支援し、現在は定期訪問での外出介助、会話での活動を継続となっている。

年次活動件数の推移



●クライエントの傾向

クライエントの傾向は、身体に何らかの障害をもちつつ在宅で生活をしている方で、単身の中高年の男性が占める割合が非常に高くなっている。ちなみに、継続派遣の17名中15名が男性の単身世帯、また身体や精神に何らかの障がいのある方で、半身麻痺等による車椅子使用や杖歩行などの歩行困難が11名、視覚障害が2名、精神障害が2名となっている。

●クライエントとの関わり

クライエントとの関わりは、長期的な派遣が多く、7年以上の関わりを持っているケースは12名であった。うち9名は10年以上の関わりを持ち続けている。ただし、最長で19年継続していた方は亡くなられて今年度で活動が終了した。終了したケースは、周囲との関係が閉塞的な方の自宅に訪問し、お茶などのおもてなしを受けながら会話を行う活動であった。

長期派遣が増えるにあたり、HIV感染症以外の病気、加齢やその他の疾病等で身体に障害を持つケースがみられるようになってきた。これまでは発症時の後遺症で障害が残った方の支援が多かったが、今後はそうした障害を既に持っている方が、更に上記のような理由で身体の機能が低下し、より介助を必要とする方が増えることが考えられる。

既に機能低下がみられる方では、バディでは介助が難しいケースもでてきているが、介護以外の部分、既存サービスの中では得られにくい、セクシュアリティも含めた話し相手、行政のサービスが不足する所でのバディの活動が求められていることがあり、バディのできる範囲で、できるだけ柔軟な対応ができればと考える。

家族等と同居しているケースは少なくなってきているが、支援している家族の負担は大きく、相談できる場所は少ないため、バディが継続して関わることがクライエント本人だけでなく、家族やパートナーの支援になるケースもあるため、こうした活動を今後も継続したい。

クライエントとの関わり期間

関わった期間	件数	うち継続
7年以上	9	8
5年以上7年未満	6	5
1年以上5年未満	9	8
1年未満	2	2
合計	26	23

●外部サービスへの作用や連携

クライエントの中には、医療や福祉のサービス提供者との関係性が良くないケースもあり、そこにバディが関わることでバランスがとれるようになることもある。バディの日常的な生活への支援は限界があるが、今後もこうした困難さを持つケースについては、医療機関や在宅サービス機関と連携をとり、クライエントの社会参加の支援、生活の質の向上につながる活動ができればと考える。今年度も、ケースの状況の変化に伴い、ケースカンファレンスに行政に呼ばれ参加するケースがあった。今後もこうした地域の支援者との関わりを維持していきたいと思う。

7. 今後の活動にむけて

●活動の継続性と体制づくり

より介護が必要となるケースが増えることを踏まえて、バディはあくまでもボランティアとしての関わりであるが、利用者の安全と、関わるバディの安全を考えて、基礎的な介助の知識や技術を身につける機会も持つようにしたい。昨年度から、利用者の身体機能の低下がみられるケースがでてきており、バディとしては、クライエントの状態の変化にも寄り添い、できることを一緒に考えていければと思う。

派遣するコーディネーターの立場として、活動時間が長くなる依頼も多いため、バディにとって負担を軽減できるような体制づくり、環境づくりを、クライエントとも相談しながら、時には福祉サービスの関係者とも連携し、調整しながら、バディとクライエントの関係性、バディが安心して活動できる環境の調整を大事にした活動を続けていきたいと考える。

継続課題として、スタッフの数が潤沢な状態ではなく、曜日や時間によっては利用者のニーズに十分に対応できない場合もある。特に、平日での活動はかなり難しい状況が昨年に引き続き続いている。病院での活動など、様々なニーズに対応できるよう、継続的にスタッフの確保にも励んでいきたい。

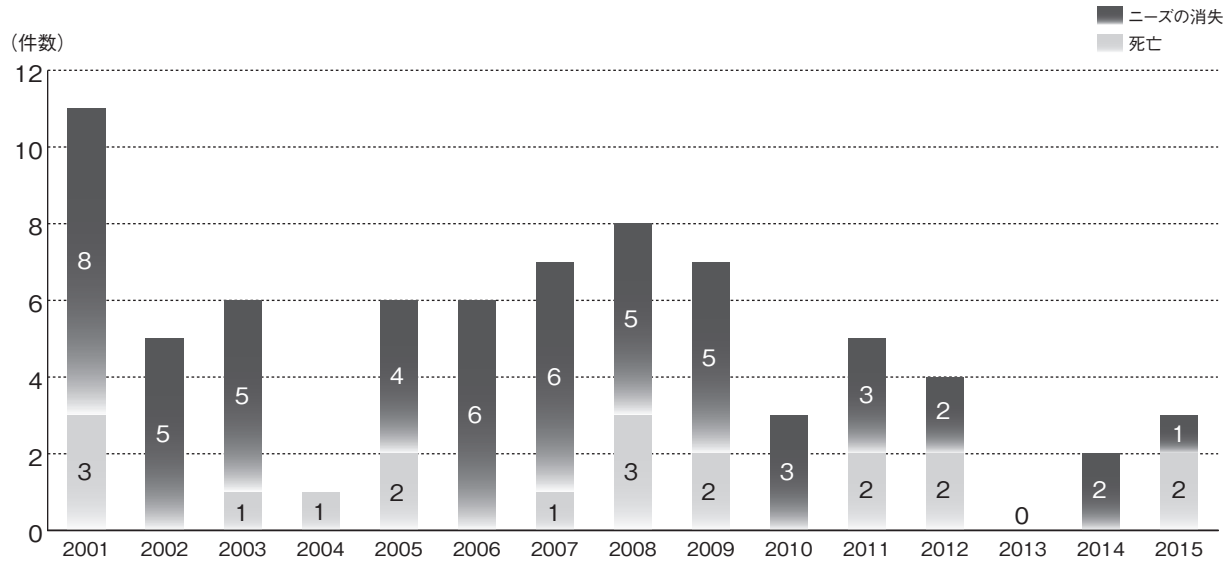
最後に、日頃から活動を続けていただいているバディ・スタッフの皆様、今年度も活動にご協力いただき、本当にありがとうございました。今年度は、利用者の急な体調の変化、死亡など、予期せぬことが多かったのですが、バディのみなさんに、臨機応変に対応いただき助けられました。本当にありがとうございました。

バディ活動は、協力いただけるバディ・スタッフあっての活動です。コーディネーターとして、力不足が否めないのですが、今後もみなさんの力を借りて、応援していただきながら、バディ活動の運営に努めていきたいと思います。

今後ともご協力いただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

（文責　バディ・コーディネーター　牧原／九岡）

活動の終了理由



(1) ぷれいす東京　相談サービス報告

ぷれいす東京では、HIV陽性者とその周囲の人へ、電話や対面、E-mail/faxなどによる相談サービスを提供している。電話・対面による相談については、2009年4月以降、厚生労働省の委託事業として、HIV陽性者とそのパートナー、家族のための専用の相談電話「ポジティブライン」0120-02-8341（月～土：13：00～19：00）と、プライバシーに配慮した個室で行う「対面相談サービス」（月～土：12：00～19：00）を提供している。なお相談は原則匿名で行っている。対応は、HIVに関する電話相談や直接的なケアを担当してきた相談員（社会福祉士/医師）、3人が担当した。

■相談／連絡期間

2015年4月1日～2016年3月31日

■相談／連絡件数

電話による相談	1251件	
対面による相談	732件	
メール/fax/書簡による相談	824件	（7～3月）
合計	2807件	

■相談者の背景

▼電話相談、対面相談（メール/fax/書簡は除く）

のべ合計1983件（男：1849 、女：134）

HIV陽性者	1750件	(1697:53)
パートナー/配偶者	65件	(51:14)
家族	50件	(15:35)
専門家	58件	(40:18)
その他/不明	39件	(31:8)
確認検査待ち/判定保留	21件	(15:6)

「家族」の内訳(50)

母親(28)、きょうだい(9)、父親(4)、いとこ(4)、家族(3)、親族(1)、養父(1)

「専門家」の内訳(58)

医療機関(22)、福祉関連(10)、就労関連(9)、保健所(3)、地域団体(1)、その他(13：弁護士、検察官など)

「その他」の内訳(39)

友人/知人(13)、元パートナー(3)、判定保留者のパートナー/夫(2)、判定保留で後に陰性(2)、性的関係のあった人(1)、不明(5)、感染不安とおぼしき方(13)

■相談者の年代

10代	10件
20代	96件
30代	470件
40代	750件
50代	281件
60代	69件
70代以上	6件
不明	301件

■ 新規相談（電話・対面）のまとめ(n=264)

属性		（男:226 女:38）
HIV陽性者	162	（155:　7）
パートナー/配偶者	35	（ 26:　9）
家族	17	（　8:　9）
専門家	12	（ 10:　2）
その他/不明	20	（ 14:　6）
確認検査待ち/判定保留	18	（ 13:　5）

当該年度における新規相談は264件で、昨年度の342件より減少していた。電話/対面の相談全体に占める新規相談の割合は、16.3%から13.3%に変化した。新規相談に占める陽性者の割合は、ほぼ6割と変化なかった。例年のごとく、パートナーは同性間の男性パートナーからの相談が多く、家族は母親からの相談が多かった。ここ数年、陽性の子供を持つ父親からの相談も受けるようになり、「母親の会」への父親参加の希望も聞かれている。専門家は、医療従事者以外が多く、背景としては、企業人事、派遣会社、就労支援事業所などの就労関係の方、障害者支援センターや福祉事業所、そして弁護士、検察官など薬物に関連した方など、様々であった。その他については、友人/知人、元パートナー、判定保留者のパートナーなどからの相談であった。今年度も確認検査待ち/判定保留中の方からの相談があったが、予想外の告知であったり、状況の説明不足や、確認検査が出るまでの支援不足からか、混乱した状態での相談になることが多いように思われた。

相談者の居住地/発信地は、関東地方が多く全体の76%

居住地/発信地	
関東	201
近畿	21
九州/沖縄	12
北海道/東北	10
東海	9
中国/四国	8
甲信越/北陸	2
海外	1

ほどを占めているが、その他の地域からも相談が寄せられていた。

情報提供者	
情報・ネットワーク（ネット・冊子等）	154
医療や行政などの専門家	52
人的ネットワーク（他陽性者・家族等）	24
地域のネットワーク（電話相談・団体）	17
その他	8
不明	9

相談をするきっかけとなった情報源としては、インターネットや冊子などをもとに、相談者が自ら情報を集め、連絡に至ったという方が半数以上を占めていた。一方、医療や行政の専門家から紹介を受けた者はほぼ2割で、他の陽性者や家族などの個人的なネットワークから勧められた方があとに続いた。

新規に相談があったHIV陽性者において、どこで検査を受けたか、どのような経緯でHIV感染を知ったかをまとめた。ただし、相談の中で聞き取れた情報をもとにしており、対象となるHIV陽性者162人中、118人の傾向である。

検査を受けた機関（n=118）	
病院（外来）	55
保健所／検査所	37
病院（入院）	13
自主検査キット	4
その他	3
献血	2
不明	4

検査のきっかけ（n=118）	
自発的（症状あり）	33
自発的（症状なし）	32
その他の症状（医師の勧め）	22
HIV関連の症状（医師の勧め）	16
献血	3
性的接触があった人からの通知	3
健康診断のオプション	2
妊婦健診	1
その他	5
不明	1

HIV検査が行われた場所は、医療機関の外来／入院など、医療機関の受診によるものが68件で、保健所／検査所での37件を大幅に上回っていた。一方、自主検査キットでの陽性も4件あった。

検査を受けたきっかけには、大きく分けて自発的な検査の64件と、医師の勧めの38件があり、前者は少なくとも自らHIV感染の可能性について考えており、後者にはいわゆる「いきなりエイズ」が含まれていることになる。その他には、献血や性的接触があった人の通知、健康診断のオプション、妊婦健診での判明、海外の薬の治験前の検査での判明等もあった。

■電話／対面相談によせられた内容項目

HIV陽性者からの相談について、相談記録をもとに内容を1～9の項目に分類し、詳細をまとめた。複数の項目に該当する相談内容であった場合は、それぞれの項目に含めて集計している。

周囲の人の相談、専門家からの相談や連携については、それぞれの属性で内容をまとめた。

1　検査や告知に関する相談 45
2　告知直後の漠然とした不安 143
3　対人関係に関する相談 464
4-1　生活に関する相談 823
4-2　制度に関する相談 301
5　心理や精神に関する相談 939
6　病気や病態の変化や服薬 289
7　医療体制や受診に関する相談 204
8　医療機関以外の支援体制・リソースへのアクセス 20
9　連絡等のコミュニケーション 631

▼ 周囲の人からの相談 257
▼ 専門家（外部）からの相談や連携 75

1　検査や告知に関する相談：45

この項目では、HIVの検査や告知の際に特に混乱が大きかった事例、対応に問題があったとされる相談の詳細をまとめている。一般的な医療の場におけるHIV検査のきっかけは、高熱が続くなどの体調不良があるなかで医師から勧められたり、関連する他の疾患（アメーバ赤痢、結核、梅毒、尖形コンジローマ）があるなかでの検査の提案などであった。また、何らかの手術、内視鏡の前などに行われるルーティン検査の一つでHIV検査が実施され、陽性が判明するなどの事例もあった。

1　検査や告知に関する相談	
判定保留時の不安や対応	20
告知の状況	17
検査の信憑性	3
検査機関の対応	2
その他	3

さらに、何らかの持病で通院していた主治医から「心あたりは？」と聞かれ、あえて他機関で検査をうけ、陽性を知った事例、婦人科での検査の後に電話があり不安になった事例、また会社の健診で体調不良を相談したら、HIV感染の可能性

を医師から指摘され、あえて他機関で検査をうけた例などがあった。保健所/検査所の迅速検査で、判定保留／確認検査待ちの結果を受け取り、再度訪問することになったがプライバシーが不安だとの声も寄せられた。検査や告知の場面ではプライバシー管理の徹底が前提ではあるが、それ以上に自分の陽性が知られると不利益を被るのではないかという予測が、まだまだ根強く残っていることを物語る相談の数々であった。

検査を受けることのなかに、自分がHIV陽性の結果と向き合う準備、例えば陽性者として生活するイメージがあるかないかで、混乱の度合いは大きく異なっていた。また、自分の感染の可能性をどのくらい見積もっていたかによっても受け止め方は変わっており、「自分は異性愛者なのに」、「前回の検査では陰性だったのに」、「行為は気をつけていたのに」といった方は、混乱の度合いが大きかったように思われる。こうした点も踏まえて、医療者はHIV陽性（スクリーニングも含めて）の結果を告知する必要があると思われる。

検査を受けに行く動機としては、「大切な人ができたので」、「アンセーフな性行為をしたので」、「体調不良があったので」など、その文脈は様々であった。こうしたプロセスと告知された結果は本人のなかで結びついていく。陽性という事実と感染経路がセットになり、それまでのライフスタイルが秘密となり、それがバレてしまうことをも不安に思う。対応する際には、非難せず、相手の安全を担保するスタンスや環境が大切である。

本人の混乱が大きかった例としては、スクリーニング検査で要確認とされ、WB法（ウエスタンブロット法）で陰性、PCR（核酸増幅検査）の結果待ちの方の相談があった。医療側の対応は適切であったが、結果を待つ間の本人の混乱は大きなものがあった。また、スクリーニング検査で要確認となり、結果を待つ間に、即日検査を受けてみたいという方や、確認検査が自費で３万円かかるといわれたという相談も寄せられていた。

プライバシーへの不安などから、自主検査キットを利用した人たちからの相談も寄せられた。こうした人たちがいざ要確認となった場合には、確認検査を行なう医療機関でのプライバシーも不安になることがあるようだ。郵送検査で要確認となった後の、医療への結びつきをどのように安全に確保するのかが、重要な課題である。

既に感染を知るHIV陽性者からは、通知せずに受診した医療機関で無断にHIV検査をされてしまった方、服薬してウイルスが検出限界以下になればHIV抗体検査も陰性になると思っていた方、などの相談が寄せられていた。

2　告知直後の漠然とした不安：143

当項目は、原則告知後3ケ月以内の方を対象にしている。相談をされるタイミングは、HIV陽性の告知直後のみではない。発症した方では、退院直後に自宅に戻ってから不安になる場合がある。手帳の手続きなどが一段落した方では、その一息ついた拍子にふと不安になる例もみられた。また、ネット上の情報を見すぎて、最悪の状況になるのでは、突然倒れてしまわないかなど、不安がより強くなっている方が多くみられた。今年度は、告知直後から他の陽性者がどうしているのか知りたいという方からの相談も増えており、ネットの情報だけでなく、同時に実際に会ってみたいというニーズがあったようである。

2　告知直後の漠然とした不安	
漠然とした不安や混乱	49
身体状況に関する不安	38
生活のイメージ	23
他陽性者との交流	22
プライバシー不安	9
その他	2

3　対人関係に関する相談：464

3　対人関係に関する相談	
相手との関係性	192
HIVの通知	50
恋愛	47
性に関する相談 （sexやセクシュアリティ、セイファーセックス）	46
結婚や離婚、子づくりなど	43
トラブル	32
プライバシー	4
検査（受検勧奨等）	2
その他	48

相談の対象者	
パートナー/配偶者	135
家族	57
周囲	40
友人/知人	38
元パートナー	34
他陽性者	30
性的関係のあった人	28
会社	13
行政	7
NGOスタッフ	2
その他	20

自分のHIV陽性が判明した後、周囲のこれまでの人間関係がどう変化してしまうのかを不安に思う相談が多く寄せられた。その事実を周囲の誰に伝えるのか、思い悩む相談者が多い。それを含めて、対人関係の相談の対象となった相手としては、パートナー／配偶者が最も多かった。次いで家族、周囲の人、友人など身近な人から、過去の人間関係や、地域で関わりを持つ人など様々であった。

相談では、感染の事実を伝えた方がいいという思いと、伝

えた結果生じうる事態に対する不安や恐怖、その両方が語られることが多い。また、なかには言わないでいることに罪悪感を感じてしまう人もいる。通知後の反応は、これまでの人間関係や、性的なコミュニケーションの有無などによっても異なってくる。しかし、周囲にはなかなか話せない内容だからこそ、第3者的な相談資源を活用して、事前のシミュレーションをする相談者は多く存在する。

こうした相談は、感染初期のみならず様々な場面で起こりうる。職場におけるHIVに関する情報の取り扱い方や、障害者枠での就労に関する相談が最近増えている。（次項目参照）その他、性的な関係性、人への依存、薬物使用、国籍や滞在資格などの問題がからんだ相談も寄せられていた。

4-1 生活に関する相談：823

4-1　生活に関する相談	
就労／就学	481
住宅問題／ホームレス（野宿生活）	82
外国人	74
法律問題	50
経済的な問題	48
生命保険	29
海外渡航（留学）／海外からの帰国	16
健康診断	15
医療費	4
その他	24

「生活に関する相談」についての相談内容は、ここ数年ほぼ同じ傾向で、就労に関する相談が全体の約6割を占めている。HIV陽性であることを前提にして、就労と療養の両立、社会との関わりを考えていくことは、とても重要な課題であり続けている。相談の多くは、就労の継続や転職に関する相談、離職中で今後の就労をどのようにするのか、就労経験のない方の就職や職業訓練に関する相談などであった。

住宅相談は、生活保護世帯の方の近所トラブルや、居住環境の問題などの相談が寄せられる一方、路上や簡易宿泊所等で暮らす相談者や、触法施設からの出所者で居住場所がない人からの相談が寄せられていた。

法律問題では、在日外国人からの滞在資格に関する相談、離婚問題、薬物使用と逮捕、HIVに関わる就労の制限について、診療拒否、同性間パートナーの公正証書の作成、債務整理など、多様な相談があり、必要に応じてHIVに理解のある専門家の紹介を行った。また、海外渡航（留学／駐在）や海外からの帰国に関する相談もあった。外国での就労と滞在資格については、ビザの取得に陰性証明が必要な国もあり、既存のネットの情報だけでなく、大使館や関係NGOに直接問い合わせるなど、本人と一緒に確認作業を行ったりしている。

4-2 制度に関する相談：301

制度に関する相談は、昨年に比べて100件以上の増加がみ

4-2　制度に関する相談	
障害者の制度利用 （手帳取得、自立支援、重度医療、障害者控除、施設入所）	125
生活保護	74
障害者雇用	25
健康保険 （高額療養、傷病手当、付加給付、後期高齢者医療）	20
障害年金	15
プライバシー	14
サービス利用時の対応	6
ビザ	5
失業給付	1
その他	16

られた。中でも障害者の制度利用に関する相談が50件ほど増えていた。制度利用に関する相談の中では、転職時や就職時に障害者手帳や医療費の助成制度を使っても会社にバレないだろうかという相談が多かった。関連して、転職時、就職時に会社の保険を使っても病気がバレないかといった、健康保険の使用に関する不安も多く寄せられていた。また、障害者の制度利用の中には、障害者の就労継続支援事業の枠での就労を検討する方、実際に就労している方からの相談もあった。障害者雇用については、積極的にその枠で就労を希望する方、一般就労とどちらがいいかを検討している方から、障害者枠での就労のメリット、デメリットに関する相談が多くみられた。生活保護に関して、更生施設に入所中の方や、在宅療養中で経済的に困難な状況にある方の相談など、対応が難しいものがあった。

5　心理や精神に関する相談：939

5　心理や精神に関する相談	
精神疾患（抑うつ障害、適応障害、統合失調症、その他）に関する相談	496
薬物依存	177
精神科の受療に関する状況	88
精神的な不安定さ	50
その他の依存傾向 （アルコール、セックス、ギャンブル、対人、その他）	39
人間関係の閉塞感	27
HIVの受容	19
ストレス	17
自殺念慮	16
セクシュアリティの受容	5
その他	5

1から9に分類した相談内容の項目のうち、今年度最多の相談件数となった。このうち「精神疾患」に関しては、本人から申告があった場合のみを集計しており、抑うつ障害、適応障害、統合失調症などを持つ方から、治療を継続している障害や疾病との付き合い方、付き合う中での生活に関する相

談などが多く寄せられていた。また、定期的に通院状況や治療状況を報告しながら、自分の状態を客観的にみて、バランスを取ろうとする方も見受けられた。今年度も薬物依存の問題を持つ方からの相談が増えており、定期的に対面で相談を継続される方が多くみられた。中には、薬物の再使用で拘留されて連絡を受ける方もあれば、服役が終わるタイミングに封書で出所後の生活相談、生活保護受給の調整依頼をされる方もあった。

この項目に相談が多く寄せられる背景には、精神疾患や薬物依存を抱えること自体、長期的な経過を要し、時に不安定となり易いことがあげられる。これらはHIV感染と影響しあい、さらに複雑な状況を引き起こす。例えば、抗HIV薬のアドヒアランスを左右したり、陽性者本人が各科主治医の間に立たされるなど、医療面への影響がでることがある。またHIV、精神、薬物、その他、それぞれを支援する場における情報開示の難しさから、周囲との関わりを持てずに孤立することもある。根本的な部分にセクシュアリティの問題が介在する例も多く、人間関係の構築に苦労されている様子がうかがえる。それぞれ本人なりの対処法を模索するなか、我々が提供する「相談」という機会が、安心かつ長期的に関わりを持てる場の１つとして認識されているのではないかと考える。

6　病気や病態の変化や服薬：289

6　病気や病態の変化や服薬	
その他の疾患	115
服薬の継続	48
HIVの関連症状	26
CD4の変化	24
副作用	18
投薬前の不安	17
入院中の病態	11
その他	30

今年度も「その他の疾患」に関する相談が多く見られた。具体的な疾患名は以下の通りであるが、HIV感染症になったことで、実際に他の疾患を合併した際に治療の難しさを感じたという相談もあれば、HIVと合併することで重症化してしまうことはないかといった、予測に基づく不安の相談もあった。

その他の疾患（順不同）
骨折の後遺症、B型/C型肝炎、梅毒、淋病、コンジローム、蜂窩織炎、脳梗塞、脳血栓、皮膚疾患、白内障、肝臓がん、子宮頸がん、ベーチェット病、尿路結石、肺炎、感染性胃腸炎、咽頭炎、熱中症、原因不明の体調不良、花粉症などのアレルギー症状、副鼻腔炎、帯状疱疹、脂漏性皮膚炎、椎間板狭窄/ヘルニア、肺炎、難聴、その他

また、長期的に服薬を続けることによる飲み疲れ、さらに具体的な服薬の自己中断に関する相談、発症して判明した方でのCD4が回復しないことへの焦りや不安に関する相談もあった。HIVの関連症状としては、以下のものがみられた。

HIVの関連症状（順不同）
悪性リンパ腫、トキソプラズマ脳症、サイトメガロ網膜炎、HAND（HIV関連神経認知障害）、ニューモシスチス肺炎、免疫再構築、進行性多発性白質脳症、その他

7　医療体制や受診に関する相談：204

7　医療体制や受診に関する相談	
医療従事者とのコミュニケーション	83
医療・検査機関の選択	43
他科受診	30
歯科受診	20
通院や服薬の中断・拒否	15
セカンドオピニオン	1
その他	10

医療従事者とのコミュニケーションにおいては、医師や看護師とのコミュニケーションの取りにくさ、信頼関係の築きにくさに関する相談が多く寄せられていた。今年度は、地方在住で身体的な不安が強い方から、本人の意向と医療者側の対応に相違があり、医療資源の少ないなか窮地に立たされているといった相談があった。また、医療機関の院内連携の不備に対する不満、かかりつけ病院の救急外来での対応に関する不満などもあった。また、かかりつけの医療機関以外で、近所の開業医や歯科クリニックを受診する際の、HIVの通知に関する相談もあった。今年度も、金銭的な問題や精神疾患の影響などで、通院や服薬の自己中断をした方からの相談があり、本人と医療をどうやってつなげていくか、難しい相談が複数あった。

8　医療機関以外の支援体制・リソースへのアクセス：20

8　医療機関以外の支援体制・リソースへのアクセス	
ぷれいす東京のサービスの問い合わせ	10
他陽性者との交流	4
その他の機関・リソースの利用	2
外国の情報（ビザ、医療機関、医療状況）	1
地域の支援団体	1
その他	2

ぷれいす東京のサービスに対する問い合わせでは、ネストプログラムの具体的な内容、バディの活動範囲や依頼方法、対面相談の利用の仕方など、提供されるサービスに対する事前の確認があった。また、他陽性者との交流は、漠然と自分以外の陽性者と会ってみたいという問い合わせで

あった。その他の機関・リソースの利用では、陽性者のSNSや女性陽性者のワークキャンプについて、地域の支援団体ではSAC(セクシュアル・コンパルシプズ・アノニマス)に関する問い合わせがあった。

9　連絡等のコミュニケーション：631

9　連絡等のコミュニケーション	
近況報告	353
ネストプログラムの利用	88
利用登録	68
面談の調整	49
積極的な協力・参加	19
その他	54

今年度も件数が多い項目となっているが、昨年度に比べると減少していた。これは、頻回に相談される方が減ったことが影響していると思われる。原因ははっきりしないが、引きこもり気味だった方が就労する、通所サービスを利用する、精神疾患のある方が安定する、などの変化によるものではないかと考えた。このように、この項目の件数が多くなる要因のひとつに、電話や対面による相談を定期的なコミュニケーションの場として利用している方の存在がある。傾向としては、周囲にHIVのことを話せる相手のいない方、地方の方、自宅療養中で引きこもり気味の方、精神疾患や薬物依存のある方などがあげられる。また、定期的な通院の報告をされる方もあり、カウントされやすい項目である。今年度もネストプログラムの参加連絡や、事前に必要な利用登録での来所が一定数あった。積極的な参加としては、ぷれいす東京でのボランティア活動、ネストプログラムのスピーカー等での協力があった。

▼ 周囲の人からの相談：257

・パートナー/配偶者　：65件
・家族　：50件（母親(28)、きょうだい(9)、父親(4)、いとこ(4)、家族(3)、親族(1)、養父(1)）
・その他/不明　：39件
※その他は相談者の属性の内訳を参照

(3)対人関係に関する相談	99
(2)通知を受けた直後の漠然とした相談	32
(9)連絡等のコミュニケーション	27
(4)-1 生活に関する相談	22
(5)心理や精神に関する相談	22
(6)病気や病態の変化や服薬	15
(1)検査や告知に関する相談	13
(4)-2 制度に関する相談	13
(7)医療体制や受診に関する相談	7
その他	4
(8)支援機関・リソースへのアクセス	3

パートナー/配偶者からの相談は、男性が51件と多かったが、女性からも14件寄せられていた。女性では配偶者からの相談が多かったが、女性パートナーからの相談も数件寄せられていた。出会ったばかりの男性からカミングアウトされての相談、結婚予定の相手からHIVの通知を受けた経験など、周囲に話せる場がなく、ネットで調べて電話をしたということであった。男性からの相談は、ゲイ男性からが多いものの、女性パートナーから陽性だと知らされたという声もあり、多様な立場への対応が必要だと思われた。

妻からの相談のなかには、夫が自分以外の相手とセックスをして、病気をもらってきた事実が許せないという気持ちについての相談や、HIV陽性の夫が今でも男性との性行為を続けていることを知り、受け入れられないでいるとの声も寄せられていた。

男性同士のカップルでも同様に、様々な相談が寄せられていた。つきあってしばらくしてからカミングアウトされた、つきあい始めに2人でブライダルチェックを受けたら相手が陽性だった、長くつきあっている彼氏の感染がわかったが自分は陰性だった、陽性の彼氏に自分以外のセックス相手がいて、その事実を受け入れがたい等々。また、出会った相手に最初からHIV感染を知らされてはいたが、薬物依存についても判明し、それだけは止めて欲しいという相談もあった。

また、セイファーセックスの具体的な行為に関する相談や、外国人パートナーの来日に際しての相談、陽性の夫との体外受精による子づくりについてなど、2人の関係性を継続する為の相談も寄せられていた。

家族からの相談の多くは関東地方からだったが、その他、全国各地に及んでいた。相談では「息子の感染がわかった」、「娘が陽性者だった」、「夫のきょうだいが陽性だった」、「家族の中では自分だけが知っている」、「離れて暮らす陽性の息子が心配」など、家族の感染を知った戸惑いが多く語られていた。さらには、「洗濯は一緒ではダメなのでしょうか」、「尿にHIVはいますか」といった基本的、具体的な相談も寄せられていた。

家族やパートナーからの相談のなかには、「子どもが引きこもっている」、「子どもの感染にまつわり法的なトラブルが発生している」、「子どもが逮捕された」、「パートナーの調子が悪くなってしまった」、「陽性の彼氏が脳症になってしまった」など、より困難な状況で連絡してくる方もおり、陽性者の周囲には支援を必要としている人たちが多数存在することを認識し、それぞれの立場を尊重しつつ、協力しながら対応していくことが重要だと考えた。

▼ 専門家(外部)からの相談や連携：75

ここでは電話と対面による相談のみをまとめたが、実際にはメールでのやりとりも多く、それを含めればより多くの専門家たちとの連携が存在している。

医療機関における主な連絡相手は、拠点病院の外来や病棟

専門家の属性	
医療機関	22
福祉関連	10
就労関連	9
保健所等	3
地域団体	1
その他	13

(9)連絡等のコミュニケーション	39
(4)-1 生活に関する相談	9
(8)支援機関・リソースへのアクセス	9
(4)-2 制度に関する相談	6
(3)対人関係に関する相談	5
(7)医療体制や受診に関する相談	3
(2)通知を受けた直後の漠然とした相談	1
(5)心理や精神に関する相談	1
(6)病気や病態の変化や服薬	1
その他	1

の看護師、コーディネーターナース、カウンセラーやソーシャルワーカー、医師などであった。

HIVと就労に関する相談を企業の人事から寄せられることがある。また、障害者枠で就職活動をする陽性者も多く、関連した企業や支援事業所からの連携に関する連絡も増えている。

陽性者が薬物使用で逮捕された際の国選弁護人から連絡を受けて、拘留中の面会に至ることもあった。また、東京検察庁社会復帰支援室から相談を受けた事例もあった。

精神的な問題、逮捕、失業などをきっかけとして、住む場所を失うことがあり、そうした困難状況での相談が増えている。貧困で家を失う、同居人から部屋を追われるなど、定住場所を失った人たちについて、他機関と連携しながら相談を進めている。

薬物依存からの回復をどのように支援するのか、HIVの団体だけでなく、薬物関係の施設、自助グループ、専門医療機関、行政機関との連携は必須と考えるが、今後はアジアの中でのネットワークづくりなどが、より求められると感じている。

■1年を振り返って

今年度においては、対面相談は横ばい、電話相談は減少の傾向がみられた。電話相談減少の要因のひとつには、例年と比べて頻回なHIV陽性者からの相談が少なかったことがあげられる。告知直後や合併する精神疾患の悪化など、一時的に相談件数が増える方はみられたものの、1年を通じて頻回な相談をされる方は少なかったように思う。

相談者の属性は、HIV陽性者がほぼ9割を占めており、その他の周囲の人の傾向も含めて、あまり大きな変化はみられなかった。新規相談のみに注目してみると、パートナーと判定保留の割合がわずかに増加し、専門家からは減少していた。「その他/不明」の中には、当初は陽性者やその周囲の人として相談をしてきていたが、後になって感染不安だったと判明したため、本来の相談対象ではなかった例がいくつか含まれている。

相談内容の傾向も、昨年度と比べて大きな変化はみられなかったが、心理や精神、生活に関する相談、制度に関する相談で増加がみられ、3項目で相談の約半数を占めた。多くのHIV陽性者は、治療することで体調面は安定するといわれているが、生活を継続していく上で、HIVが関連することで問題が生じたり、不安になることが起こるようである。例えば、転職/就職するタイミングで、健康保険や自立支援医療等の制度を使うことで会社にバレないか、入職時に健康状態を「問題なし」と申告したことが後で問題にならないか、職場の健康診断で病気がバレないか、といった相談が、例年に比べて多くみられた印象である。

精神疾患を持つ方では、もともと長期に療養が必要とされたり、不安定になることも多い状況のなか、むしろHIVについては安定しているという方が多かった。ただ、人間関係の問題を繰り返したり、セクシュアリティに関連した話題が続いたりと、相談が継続される傾向にはあった。また後述するように、精神の影響がHIVの治療中断に結びつくような例が続いた。さらに、HIVに加えて精神疾患を持つことで、就労の継続や就職活動に困難さが生じている例も見受けられた。

自分の持つ障害を伏せる不安を持たずに、就労できる形を希望して、障害者枠や障害者就労継続支援事業での就労を目指す方や、障害者就労移行支援事業を利用して就労準備をする方も増えてきた印象である。

対応が困難だった相談としては、発達障害を併せ持ち定住する場のない状態で治療を中断していた方、地方在住で引きこもり気味となり服薬中断をした方などがあった。また、薬物依存においては、薬物で逮捕・拘留された方や、出所前の方からも相談があり、弁護士や行政の担当者、専門医療機関、当事者の自助グループ等とも連携しながら対応をしなければならない事例があった。

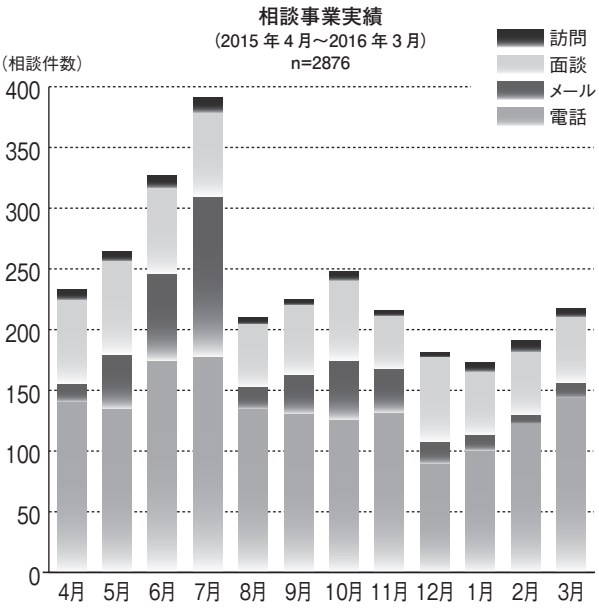
最後に、ここ何年も同じことを書き続けているのだが、薬物依存や精神疾患、その他身体障害など、多様な難しさや生きにくさを持つ陽性者からの相談が増える傾向にあるため、今後も多様な相談ニーズに対応すべく、医療機関や専門機関、行政、当事者団体など、地域の支援者とつながりを広めつつ、HIV陽性者のサポートネットワークの構築に貢献できればと考える。また、ここ数年、電話相談の減少傾向が続いているため、利用者のニーズの変化や、サービス内容の評価など、把握・検討すべき課題は多い。今年度のぷれいす東京WEBサイトのリニューアルを踏まえて、まずはより多くの方に相談事業を知ってもらい、利用してもらうべく、WEB上の広報を積極的に行っていきたい。そして、相談事業で得られた、様々な生きにくさを抱える陽性者や、その周囲の人の声を少しでも社会に届け、HIV感染症の理解が広まるよう努力し続けていきたい。

（文責：牧原/生島/福原）

(2) HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業

本事業は厚生労働省による事業受託として7年目に入った。今年度もSHARE（特定非営利活動法人 シェア＝国際保健協力市民の会）、任意団体Criativos-Projectとぷれいす東京の3団体にて運営を行った。「HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業（ピア・カウンセリング等による支援事業）」は、HIV陽性者（エイズ患者を含む）やパートナー、家族を対象にピア・カウンセリングや電話・対面による相談サービスを提供することを通して、その社会生活を支援し、生活の質を高めることを目的としている。

●3団体合計の月別相談件数の実績



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
訪問	9	8	11	13	6	5	8	5	4	8	10	7
面談	69	77	71	69	52	58	66	44	70	52	52	54
メール	15	45	71	132	18	32	49	36	18	13	7	13
電話	140	134	174	177	134	130	125	131	89	100	122	143

※メール相談には、ぷれいす東京のものは含まない。

Ⅰ　事業の概略

本事業は、以下の7つの柱からなっている。

①HIV陽性者参加型のピア・カウンセリングとグループ・プログラムの実践

②HIV陽性者を含むスタッフの研修及び育成

③HIV陽性者の社会参加のためのサポート

※①～②に関しては、P25 部門報告（ネスト）をご参照ください。

④フリーダイヤルによるHIV陽性者と周囲の人のための電話相談

・今年度は、HIV陽性者による電話相談開始のための準備ミーティングを開催

⑤ピア・カウンセリングを支える対面相談

※⑤に関しては、P42 部門報告（HIV陽性者と周囲の人/確認検査待ちの人への相談サービス）をご参照ください。

⑥在日外国人への相談サービスの提供

⑦その他の事業

・地域における当事者支援のための支援プログラム

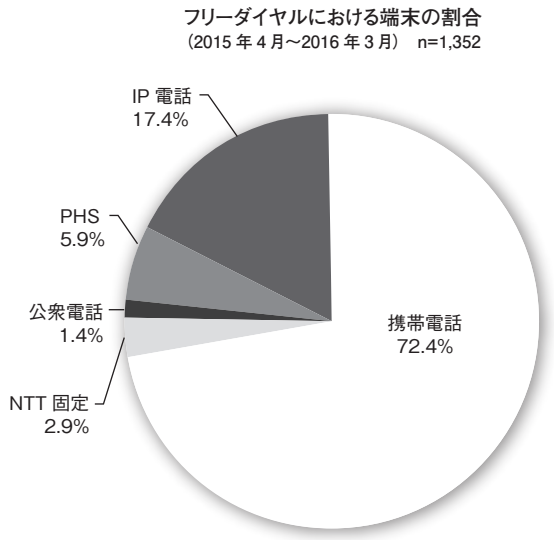
・利用登録

Ⅱ　事業の実績

④フリーダイヤルによるHIV陽性者と周囲の人のための電話相談

ここではフリーダイヤル（ぷれいす東京のみ電話相談で導入）の効果について考察する。

NTTカスタマーセンターの集計のため、無言電話や間違い電話も含む。通話総数は1,352件（2015年4月～2016年3月）だが、それ以外（話中で途中で切った等）が、4,716件あった。通話率で言うと22.3%となり、繋がりにくい時間帯があったと想像される。



昨年に比較すると、携帯電話からのアクセスが70.6%から72.4%に、IP電話は13.9%から、17.4%に少し増加した。また1.4%と少ないが公衆電話からのアクセスもみられ、入院中などに気持ちの整理や情報が少ない状況での相談ができる環境を確保していると思われた。HIVの専門でない医療機関で告知をされた場合など、スマートフォンや携帯電話の検索で、この電話番号にたどりつき、相談に至るケースも多い。

また地域別のデータで考察すると、東京都727件（51.4%）、関東甲信越489件（34.6%）、近畿52件（3.7%）、中四国40件（2.8%）、北海道、東北、東海、海外、九州と続いており、東京を中心として全国から相談が寄せられている。

⑥在日外国人への相談サービスの提供

●相談者（＊1）と対象者（＊2）の属性

（＊1）相談者…実際に相談してきた人

（＊2）対象者…サポートを必要している人

主な相談者はHIV陽性者からの相談がもっとも多く、のべで657件となっており、次いで専門家173件、家族34件、パートナーとその他がそれぞれ16件となった。確認検査の結果を待っている間の相談が2件あった。言語によるコミュニケーション課題をもつ方が多く存在し、そうした方の心理的なケアに貢献していると思われる。

○相談者の属性（のべ件数）n=896

HIV陽性者：657件（男：578、女：79、その他：0）
パートナー：16件（男：16、女：0、その他：0）
家族：34件（男：31、女：3、その他：0）
専門家：173件（男：90、女：83、その他：0）
その他：16件（男：9、女：3、その他：4）

○対象者の属性（のべ件数）n=896

HIV陽性者：817件（男：658、女：157、その他：2）
確認検査待ち：2件（男：0、女：2、その他：0）
（陽性者の）パートナー：0件
（陽性者の）家族：30件（男：30、女：0、その他：0）
その他：47件（男：37、女：6、その他：4）

●国籍と言語

対応言語について、相談事業全体では、ポルトガル／スペイン語による相談が多く、主にCRIATIVOS、一部をSHAREが対応をしていた。相談者の多くは、ブラジルとペルーの出身者で、国籍は不明だが、ポルトガルやスペイン語を話す地域の人たちからのアクセスも含まれていた。

タイ語による相談は、主にSHAREに寄せられており、他にフィリピン、中国、台湾、ミャンマーなどのアジア諸国からの移住労働者たちからの相談もあった。また、数は少ないがその他の多様な言語によるコミュニケーションの支援ニーズも存在していた。

相談者の国籍／言語（のべ人数）n=896

ペルー：376／スペイン語圏：181／
ブラジル：171／フィリピン：54／タイ：35
日本（語）：18／ガーナ：14／中国：10／台湾：8／
ミャンマー：8／ネパール：4／スリランカ：2／
モンゴル：2／ジンバブエ：2／インド：1／
韓国or北朝鮮：1／ベトナム：1／不明：8

ぷれいす東京以外の日本語による相談は、主に専門家や周囲の人たちからの相談となっていた。

●相談者の相談手段（のべ人数）n=896

相談や支援の手段はメールが最も多く、次いで電話、訪問／同行、来所面談と続く。対応するエリアが広範囲に及ぶため、メールや電話による対応を中心にせざるを得ない状況があった。

○電話による相談（n=348）

・HHIV陽性者：173（男：135、女：38、その他：0）
・パートナー：11（男：11、女：0、その他：0）
・家族：19（男：16、女：3、その他：0）
・専門家：132（男：63、女：69、その他：0）
・その他：13（男：9、女：3、その他：1）

○メールによる相談（n=451）

・HIV陽性者：406（男：400、女：6、その他：0）
・パートナー：4（男：4、女：0、その他：0）
・家族：15（男：15、女：0、その他：0）
・専門家：26（男：23、女：3、その他：0）

○訪問／同行（n=94）

・HIV陽性者：76（男：41、女：35、その他：0）
・パートナー：1（男：1、女：0、その他：0）
・専門家：14（男：4、女：10、その他：0）
・その他：3（男：0、女：0、その他：3）

○来所面談（n=3）

・HIV陽性者：2（男：2、女：0、その他：0）
・専門家：1（男：0、女：1、その他：0）

●相談者の年齢層（n=896）

対象者の年齢層は、40代：365件（40.7%）、20代：187件（20.9%）、30代：152件（17.0%）、50代：105件（11.7%）、10代：21件（2.3%）と続き、その他60代以上があった。

○相談者の居住地域（n=896）

拠点ブロックが存在する各地域から相談が寄せられており、最も多いのが関東甲信越（東京以外）で479件（53.5％）、東京321件（35.8%）、近畿28件（3.1％）、海外16件（21.8%）東北16件（21.8%）と続いた。海外からも相談が寄せられており、母国との連携も相談ニーズとして同時に存在していることがうかがわれた。

○相談時間（n=445／n=総相談件数—メール相談数）

相談時間は、30分未満315件（70.7%）、30～59分30件（6.7%）、60～119分87件（19.6%）、120分以上13件（2.9%）となった。

○相談内容

電話相談では、「医療体制・医療との関わり・連絡」が120件で最も多く、「病気や病態の変化に伴う不安や混乱」77件、「通訳/翻訳」73件、「在留資格や法律上の相談」60件、「医療費や支払いについて」58件、「服薬・副作用に関する相談」57件、「パートナーに関する相談」56件、「通訳派遣及び調整」54件と続いた。その他「HIV検査や告知に関する相談」「社会資源活用の情報提供」「母国情報の提供／帰国支援」「海外移住と渡航支援」などの相談もあった。

メールの相談でも、「医療体制・医療との関わり・連絡」が最も多く365件、「社会資源活用の情報提供」46件、「通訳/翻訳」40件、「母国情報の提供／帰国支援」27件、「海外移住と渡航支援」26件、「病気や病態の変化に伴う不安や混乱」25件、などの相談が寄せられていた。

来所面談は、全体件数が9件だったので、内容は省略させていただく。

訪問/同行では、「通訳/翻訳」が圧倒的に多く84件、「医療体制・医療との関わり・連絡」38件と続いた。

全体としては、「医療体制・医療との関わり・連絡」524件(36.0%)、「通訳/翻訳」197件(13.5%)、「病気や病態の変化に伴う不安や混乱」109件(7.5%)が多く寄せられた内容であった。

各団体が提供したサービスの内容は以下のとおり。

■CRIATIVOS

電話相談(n=217)、メール相談(n=444)、
訪問/同行(n=75)。
相談者の国籍は、ペルー(376)、スペイン語圏(181)、
ブラジル(166)、等。

■SHARE

電話相談(n=36)、メール相談(n=0)、
来所面談(n=1)訪問/同行(n=1)。
相談者の国籍は、タイ(17)、フィリピン(17)、
ガーナ(3)、等。

Ⅲ　事業の広報について

相談サービスの広報は、フリーダイヤルや外国語相談などの電話番号を掲載した印刷物の配布及びインターネットの活用により行なっている。またHIV陽性者本人やパートナー、家族にはもちろんのこと、行政や医療を含めた専門家／支援者への認知の向上にもつとめている。

(2)のまとめ

2020年にむけて、外国語での相談ニーズは高まると予測されている。今後、相談体制の見直しは急務であるが、本事業だけの対応では限界もあり、今後の課題となっている。

日本語主体のぷれいす東京による電話や対面での相談サービスでは、電話と対面でのサービス提供が多くを占めている。外国語相談では、メールが最も多く、次いで電話となっている。これは遠隔地からの相談が多く寄せられていること、また医療従事者などの専門家への言語サポートなどが多く存在することが背景に存在する。

ぷれいす東京の相談窓口へはHIV陽性者からの連絡が最も多く、女性からの割合は6.9%となっている。外国語相談では、支援を必要とするHIV陽性者の約19%が女性であった。専門家からの外国語相談へのニーズとしては、医療体制・医療との関わりなど、HIV陽性者の対応に関する相談であったり、それに伴う、心理的な問題、パートナーに関する相談など、HIV陽性であることを知った医療機関や本人への心理的なケア、情報提供をもとめられていた。そして、通訳やビザに関する情報、母国の情報提供が多く求められていた。

今後は、定住者にむけた相談だけでなく、旅行者などの対応も増えることが予想され、HIVを取り巻く相談の他言語による対応ニーズはますます増えていくことが予想される。

（文責：佐藤/生島/牧原）

1. 研究事業

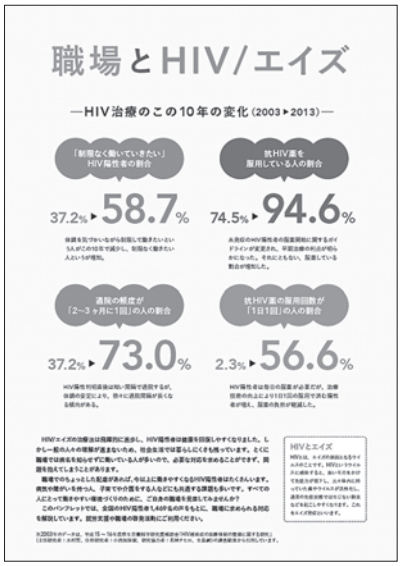
ぷれいす東京は、当事者の視点を生かした独自の研究や、厚生労働科学研究費補助金による研究など、さまざまな調査研究を実施しています。また、調査研究で得られた成果を冊子やWeb、学会発表等を通じて情報発信し、普段の支援・予防啓発活動などにも活用しています。ぷれいす東京Webサイトの新コンテンツ「調査や活動から見えたこと」(http://www.ptokyo.org/know/insights)でも研究活動の一部を紹介していますので、ご覧ください。

● 厚生労働科学研究費補助金

前年度に3か年の研究事業を終えた厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業「地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究」を引き継ぎ、今年度に「地域においてHIV陽性者と薬物使用者を支援する研究」がスタートしました。前研究班同様、研究代表者として理事の樽井、研究分担者として代表の生島が関わるほか、ぷれいす東京のスタッフが協力しています。55ページからの「厚生労働科学研究報告」をご覧ください。

11月29日には、この研究班の調査結果を広く周知するために、研究成果発表会「HIV陽性者とメンタルヘルス～薬物使用は生き辛さの現れか？」(主催：公益財団法人エイズ予防財団)を企画・運営しています。詳しくは、Newsletter No. 88(2016年2月号)4ページの記事をご参照ください。

また、今年度の成果物として、パンフレット「職場とHIV/エイズ―HIV治療のこの10年の変化(2003→2013)―」を発行しています。2003年度より5年に一度実施してきた、HIV陽性者の生活実態調査から得たデータを紹介し、HIVをとりまく医療の進歩と、その社会参加を支える就労の場にいまだ残る課題について啓発する支援ツールです。就労支援の現場などでお役立てください。



「職場とHIV/エイズ―HIV治療のこの10年の変化(2003→2013)―」
- HIV/エイズの治療と健康状態
- コラム「新しい治療法の開発で、長生きが可能に！」
- HIV陽性者の働き方と職場
- 職場のチェックポイント

左記の制作物や報告書などは、平成20～22年度および平成24～26年度の研究事業の成果とあわせ、下記の研究班Webサイトに掲載しています。

「地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト」
地域においてHIV陽性者と薬物使用者を支援する研究班
http://www.chiiki-shien.jp/

また、ゲイ・バイセクシュアル男性を対象に、HIVと薬物使用を含む性の健康に関する情報を分かりやすくまとめて発信するWebサイト「Love Life and Sexual Health (LASH)」を新設しました。HIVと恋愛やセックスにまつわるコラムやニュース、インタビュー動画やリソース集など、随時コンテンツを拡充していきます。

「Love Life and Sexual Health (LASH)」地域においてHIV陽性者と薬物使用者を支援する研究班
http://www.lash.online/

また、昨年度に開始した厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「効果的

な献血推進および献血教育方針に関する研究」（研究代表者：白阪琢磨）に、研究分担者として生島が参加し、「ハイリスク層の献血に関する意識・行動調査」を実施しました。

● その他研究協力

国立国際医療研究センターの平成27年度国際医療研究開発費「UNAIDSが掲げる臨床評価指標90-90-90達成のための男性同性愛者に対する新しいHIV検査システムの構築に関する研究」（主任研究者：岡慎一）に協力し、毎週木曜日19～22時ほかイベント時に、検査キット「HIVcheck」配布場所に計3名の相談員を派遣しました。詳しくは、62ページの報告をご覧ください。

● 学会発表

・第29回日本エイズ学会学術集会・総会（11月30日～12月1日　於 東京）

「薬物使用経験のあるHIV陽性MSMの心理社会的要因 ― 生態モデルによる分析から ―」（口頭）

「NPOによる対面相談のニーズとその対応に関する考察」（口頭）

「HIV陽性者のためのピア・ミーティングの運営と当事者の運営参加に関する考察」（口頭）

「HIV陽性者と周囲の人への相談事業における新規HIV陽性相談者の背景について」（示説）

※その他、シンポジウムやセミナーなどでも発表しました。

2. 研修事業

ぷれいす東京では、HIV/エイズの一般知識、HIV陽性者支援、性教育やセクシュアリティ、人権などをテーマに、学校や企業、専門家の集まりなどへ向けた講師派遣や研修の企画・運営を行っています。

今年度は、日本性教育協会の協賛で11月3日に東京性教育研修セミナー「学校でのLGBTへの新たなとりくみ？～文部科学省通達をうけて当事者と考える」を開催しました。詳しくは、Newsletter No. 88（2016年2月号）6～7ページの記事をご参照ください。

講師派遣では、HIV陽性者の支援経験が豊富な相談員やセクシュアリティの専門家、性教育の専門家などが出講しています。企業や教育機関、保健所を含む行政機関、医療機関、国際協力団体などの研修を受託し、独自の研修企画の立案も行っています。JICA青年海外協力隊エイズ対策集合研修（シェア＝国際保健協力市民の会に運営協力）や新人スタッフ合同研修（詳しくは、6ページの「部門報告（事務・総務）」をご覧ください）などでも採用している、包括的な研修プログラムの依頼にも対応しています。

講師派遣や研修をご希望の方は、ぷれいす東京Webサイト「講師派遣・研修の依頼」（http://www.ptokyo.org/know/lecturers）から「講師派遣依頼書」をダウンロードして必要事項をご記入の上、事務所にメール（office@ptokyo.org）かFAX（03-3361-8835）でご送付ください。

2015年度の講師派遣・研修実績は以下の通りです。

● 一般対象

2015年

4月18日「産業医・産業看護の立場から難病患者・中途障害者の就労継続支援を考える研究会」（参加者48名）
26日 映画「トークバック 沈黙を破る女たち」Living Together朗読ワークショップ（参加者5名）
28日 岡山県研修会（参加者32名）
5月15日 IT企業（参加者10名）
19日 IT企業（参加者12名）
6月24日 akta「デリヘル研修会」（参加者7名）
7月 3日 特例子会社（参加者10名）
27日 ヘルパー派遣NPO（参加者15名）
8月 8日「がん経験者のための就活ブック～サバイバーズ・ハローワーク～」出版記念トークイベント（参加者70名）
10日「ACT UP&TALK OUT」（参加者60名）
31日 東北HIV検査担当者研修（参加者19名）
9月 5日「LGBT職場環境アンケート報告会 データを職場環境改善のチカラに in 東京 2015」（参加者90名）
5日 東京迂回路研究フォーラム「対話は可能か？」（参加者60名）
15日 茨城HIV感染症研究会（参加者45名）
24日 株式会社クレディセゾン（参加者24名）
27日「HIV/AIDS支援サポーター養成講座in浜松2015」（参加者12名）
29日～30日
沖縄県研修会（参加者9名）
10月 3日「第5回AIDS文化フォーラムin京都」（参加者120名）
9日 埼玉県研修会（参加者21名）
24日～25日
中四国MSW研修会（参加者42名）
11月 4日 内閣府「東南アジア青年の船」ディスカッションプログラム“Health Education（Measures against HIV/AIDS）”（参加者33名）
6日 千葉県保健所研修（参加者14名）
15日 青年海外協力隊エイズ対策集合研修（参加者3名）
12月 3日 東京都エイズ予防月間講演会「働く世代に多いHIV/エイズ ～誰もが働きやすい職場とは～」（参加者90名）
9日 Pharma Delegates（参加者109名）
11日 トークセッション「We ARE Here ―日本でHIV/エイズ支援に関わる、ということ」（参加者20名）

14日　東京女子大学（参加者140名）
14日　東京障害者職業センター雇用管理サポート講習会「免疫機能障害の基礎知識と雇用管理」（参加者24名）
18日　akta「デリヘル研修会」（参加者10名）
25日　IT企業（参加者16名）

2016年
1月 9日　community center ZEL（参加者7名）
14日　静岡県エイズ対策担当者向け講演会（参加者43名）
14日　アルコール関連問題と福祉研究会（参加者20名）
19日　世田谷区職員研修会（参加者51名）
23日　武蔵野会感染症対策研修会（参加者26名）
2月 5日　法務省人権擁護委員学習会（参加者25名）
6日　社会福祉法人武蔵野会（参加者32名）
6日「平成27年度HIV/AIDS症例懇話会」（参加者50名）
11日　エイズ＆ソサエティ研究会議 第123回フォーラム「東京エイズウィークス2015→16」（参加者28名）
21日「HIV陽性者による第29回日本エイズ学会参加報告会」（参加者30名）
23日　板橋区「エイズ・HIV感染症の最新知識について～支援者として知っておきたいこと～」（参加者24名）
26日　JICA九州課題別研修「HIV/エイズ予防および対策～ MDG6達成にむけて～」（参加者10名）
28日　青年海外協力隊エイズ対策集合研修（参加者6名）
3月13日「UNITED IN ANGER　A History of ACT UP」上映会「怒りを力に-ACT UPの歴史」（参加者42名）
25日　akta「デリヘル研修会」（参加者8名）

● 教育機関対象

2015年
6月19日　大田区立大森第四中学校（参加者182名）
7月 2日　東京工業高等専門学校（参加者208名）
15日　東京都立板橋高等学校（参加者240名）
17日　東京都立城東職業能力開発センター江戸川校（参加者74名）
11月 5日　早稲田大学本庄高等学院（参加者325名）
18日　東京都立忍岡高等学校（参加者229名）
26日　台東区立浅草中学校（参加者160名）
12月 4日　台東区立御徒町台東中学校（参加者135名）
7日　千葉県立清水高等学校（参加者40名）

2016年
1月12日　上野学園中学校（参加者49名）
3月 9日　台東区立駒形中学校（参加者93名）
11日　台東区立上野中学校（参加者52名）
24日　東京都立大泉桜高等学校（参加者480名）

職場におけるHIV/エイズ研修（東京障害者職業センター「雇用管理サポート」事業など）といった一定のニーズがあるものに対しては、相談・支援や予防啓発の活動と連動させた取り組みを幅広く行っています。詳しくは、ぷれいす東京Webサイト「職場や学校、サービス提供者の方へ」（http://www.ptokyo.org/consult/workplaces_schools）や「企業や行政などでできること」（http://www.ptokyo.org/know/corporations）をご覧ください。

（文責：大槻）

平成27年度厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策政策研究事業
総括研究報告書

地域においてHIV陽性者と薬物使用者を支援する研究
（H27-エイズ-一般-001）

研究代表者：
樽井正義
（特定非営利活動法人ぷれいす東京理事／慶應義塾大学名誉教授）
研究分担者：
生島 嗣
（特定非営利活動法人ぷれいす東京代表）
大木幸子
（杏林大学保健学部看護学科教授）
肥田明日香
（医療法人社団アパリ アパリクリニック院長）

研究要旨

目的：私たちの社会ではMSMにおけるHIV感染に性行動と薬物使用とが関連しており、薬物使用に関しては、使用している･していないという単純な排他的二分があるのではなく、使用を勧誘され断る・断らない、使用を止める・続ける、回復への方策が得られる・得られないなど、時間軸に沿ったいくつかの分岐点があり、選択が分かれることが指摘されている。本研究では、MSM（HIV陰性者と陽性者、薬物未使用者と使用者）を対象とする面接調査および質問紙調査を実施して、それぞれの分岐点で使用あるいは不使用に導く諸要因を明らかにする。また不使用を促すために、地域の諸機関（医療、行政、NGO）に求められる支援を検討する。

方法：3年計画の1年目である今年度は、次のように分担研究を進めた。

a. MSMの薬物使用･不使用に関わる要因の調査（生島）：2年目に予定されているゲイスポット利用者に対するアンケート調査の質問紙を準備するために、性行動と薬物使用（性的指向と行動、HIVの知識・感染予防・検査、薬物使用、メンタルヘルス上の問題等）について、ゲイスポット関係者への面接調査を行った。

b. 地域の相談支援機関利用による薬物使用HIV陽性者の回復事例の調査（大木）：薬物の使用、依存の形成、そしてそこからの回復といった継起する分岐点を経験したMSMの陽性者に対し、半構造化面接を行い、薬物の使用と不使用の分岐点で作用する諸要因、相談機関や治療機関とのかかわりを調査した。

c. 薬物使用者による依存症クリニック受診経緯の調査（肥田）：依存症治療施設のグループプログラムに参加した経験をもつMSMおよびTGを対象に、診療録を用いて後方視的調査を行い、このグループのプロフィール（薬物使用歴、感染症罹患、メンタルヘルス、来診経緯等）を明らかにした。

d. 薬物依存からの回復を支援する社会資源の調査（樽井）：拠点病院の医療者が直面する問題である通報義務と守秘義務および診療義務との関係について、関連する法規の法学者による解釈と、行政、司法の判断例を検討した。

成果：ゲイスポット利用者に対する質問紙を準備する面接調査によって、薬物を使用する理由として性的な快楽や快感が挙げられたが、その背景に、セックスに没入して精神的不安を軽減させ、孤独感をなくすニーズがあることが語られた。また自分よりも相手の快感や満足を高めることも目的とされていた。加えて、生育環境における精神的健康や対人関係の困難等が挙げられ、薬物使用には幾つもの因子が影響していることが認められた。

依存症からの回復を経験したHIV陽性のMSMへの面接調査からは、セクシュアリティ、HIV感染、薬物使用を周囲に秘密にする生きづらさが使用継続を促していること、それを明かして受け容れられる医療機関、相談機関による支援が、回復を助けていることが示された。

依存症クリニックを受診するMSMおよびTGの診療録を用いた後方視的調査から、30～40歳代の受診者については、違法とされていなかった薬物をセックスドラッグとして使用し、その規制後に覚せい剤に移行して依存症になるという過程が伺えた。感染症については、薬物使用者一般の調査結果とは反対に、HIVが多くHCVは少なかった。また3分の1のケースでは、受診を勧めたのはHIV診療機関、陽性者相談機関であった。

通報義務については、法律は医師に麻薬、大麻、あへんの慢性中毒の届出を、また公務員に犯罪の告発を義務づけているが、公務員には守秘義務が、医療者にはさらに診療義務もある。いずれの義務を優先させるかは、法学者の解釈と行政、司法の判断によれば、医療者と公務員の職務に照らした裁量に委ねられることを示した。

A. 研究目的

本研究に先行する「地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究」（平成24～26年度）により、私たちの社会ではMSMにおけるHIV感染に薬物使用が関連していること、使用の背景にはセクシュアリティ、さらにはHIV陽性ゆえの社会的な孤立感と自己肯定感の低下があることが示された。そして薬物使用に関しては、使用している・していないという単純な排他的二分があるのではなく、使用を勧誘され断る・断らない、使用を止める・続ける、回復への方策が得られる・得られないなど、時間軸に沿ったいくつかの分岐点があり、選択が分かれることが認められた。

これを受けて本研究では、MSM（HIV陰性者と陽性者、薬物未使用者と使用者）を対象とする面接調査および質問紙調

査を実施して、それぞれの分岐点で使用あるいは不使用に導く諸要因を明らかにする。また不使用を促すために、地域の諸機関（医療、行政、NGO）に求められる支援を検討する。これらの成果を踏まえ、MSMに対しては薬物不使用を促す啓発資材を、また地域の諸機関に対しては、薬物に関する相談への対応に有用な資料を開発し提供する。これによって本研究は、薬物使用とHIV感染との予防に資することを目的とする。

B. 研究方法

a. MSMの薬物使用・不使用に関わる要因の調査（生島）：MSMが人間関係を広げ、セックスの相手を探すスポットであるハッテン場、クラブ、webツール等の利用者に焦点を絞り、性行動と薬物使用について（性的指向と行動、HIVの知識・感染予防・検査、薬物使用、メンタルヘルス上の問題等）、約1,000名を対象として2年目に質問紙調査を行う。そのために1年目には、準備した質問紙のドラフトをもとに、それらゲイスポットの関係者14名に対し個別に面接調査を行い、質問紙を完成させた。この調査を通じて、いくつかの分岐点で薬物の使用あるいは不使用を促す諸要因を明らかにし、使用を止め感染を予防する方向へ導く介入策検討の資料とした。

b. 地域の相談支援機関利用による薬物使用HIV陽性者の回復事例の調査（大木）：MSMの陽性者であり、薬物使用、依存の形成、そしてそこからの回復といった継起する分岐点を経験した8名に対し、半構造化面接を行い、薬物使用の契機、薬物の使用と不使用の分岐点で作用する諸要因、相談機関や治療機関とのかかわり、回復の助けになった支援内容を調査した。逐語録から、薬物使用の開始、継続、回復の各分岐点で経験された諸契機を抽出し分析した。この調査は2年目にも継続して実施し、調査対象を関係機関（拠点病院・保健所・NGO）の支援者にも拡げる。

c. 薬物使用者による依存症クリニック受診経緯の調査（肥田）：依存症治療施設のグループプログラムに参加した経験をもつMSMおよびTG、65名を対象に、その診療録を用いて後方視的調査を行い、このグループのプロフィール（薬物使用歴、感染症罹患、メンタルヘルス、来診経緯等）を明らかにした。この調査は2年目にも継続し、さらに面接調査（個別5名、グループ10名）も実施して、とくに受診と回復を促す契機を検討する。

d. 薬物依存からの回復を支援する社会資源の調査（樽井）：HIV診療拠点病院や陽性者支援NGOにおいて、陽性者と薬物使用者の支援に際して求められる情報を収集し整理する。1年目には、拠点病院の医療者が直面する問題であるいわゆる通報義務と守秘義務および診療義務との関係について、関連する法規の法学者による解釈と、行政、司法の判断例を検討した。2年目には薬物不使用への支援策として、自助グループであるダルクやNAの活動、マトリックスモデルやリカバリーダイナミクスなど依存症回復プログラム等について調査する。

e. HIV感染と薬物使用に関する啓発・支援資材の開発（全員）：3年目の課題として、これら4分担研究の成果を踏まえて、MSMに対しては、それぞれの分岐点において薬物不使用を促す啓発資材を、また地域の諸機関に対しては、薬物に関する相談に利用することができる資料を開発する。

（倫理面の配慮）

「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に準拠して研究計画書を作成し、特定非営利活動法人ぷれいす東京等各研究者の属する機関の倫理委員会の審査を受け、承認された。面接調査では対象者からインフォームド・コンセントを取得し（a、b）、既存資料を利用した調査ではウェブサイトと院内掲示により情報開示を行った（c）。

C. 研究結果

a. MSMの薬物使用・不使用に関わる要因の調査（生島）：ゲイスポットを利用するMSMを対象とする性行動と薬物使用についての質問紙調査（1,000名）の準備として、性的指向と性行動、HIVの知識・感染予防・検査、薬物使用、メンタルヘルス上の問題等18項目（下位項目約100）の質問を試作し、これを用いてゲイスポットの関係者を対象に面接調査（14名）を実施して、項目の修正と回答所要時間の調整を行った。面接調査では、薬物を使用する理由として性的な快楽や快感が挙げられたが、その背景に、セックスに没入して精神的不安を軽減させ、孤独感をなくすニーズがあることが語られた。また自分よりも相手の快感や満足を高めることも目的とされていた。使用しない理由としては、薬物の危険性が挙げられた。それには使用者の異変や逮捕という身近で目撃した経験が伴っていた。また、日常生活や性生活での満足、使用の違法性、使用による現在の人間関係崩壊への恐れも理由として語られた。

b. 地域の相談支援機関利用による薬物使用HIV陽性者の回復事例の調査（大木）：薬物の常用と依存症からの回復を経験したHIV陽性のMSMを対象とする面接調査（8名）により、使用開始と不使用の分岐点において、家族関係や友人関係において居場所がないこと、そうした日常からの解放とセックスパートナーとの一体感とを希求することが、使用へ傾斜する背景にあることが見られた。さらに、MSMでありHIV陽性であることに薬物使用を加えた3つを周囲に秘密にすること、薬物使用でつながるパートナーとの関係に依存していることで、使用継続が促されることが示された。また回復への分岐点では、使用を隠した生活が明らかになることで生活を立て直す機会が得られること、医療機関や相談機関の支援者に受容されることで他者への信頼をもてるようになることが、薬物から離れる要因として示された。

c. 薬物使用者による依存症クリニック受診経緯の調査（肥田）：診療録の後方視的調査により、依存症クリニック受診のMSMおよびTG（65名）の薬物使用歴として、初めて薬物を使用したのは平均で23.8歳、使用薬物はラッシュが29.5%、ゴメオが27.9%、覚せい剤が13.1%であること

が示された。初診の平均年齢は36.2歳、依存薬物を使い始めたのは平均で29.0歳、その87.7%は覚せい剤だった。セックスドラッグとして使用した経験を持つのは92.3%だった。併存疾患については、HIV感染症が80.0%と高く、HBV感染、梅毒は各21.5%、HCV感染は6.2%だった。全国の有床精神科医療施設を対象とした薬物関連障害患者に関する先行調査ではHCVは3割近く、HIVは1%をはるかに下回っており、それとはかなり異なる数値が本調査では示された。他の精神科疾患は47.7%で、なかでもうつ病は29.2%だった。受診を紹介した機関は、HIV治療施設が20.0%、依存症回復施設が20.0%、依存症関連病院が13.8%、司法関係が9.2%、HIV陽性者支援団体が7.7%だった。

d. 薬物依存からの回復を支援する社会資源の調査(樽井):HIV診療拠点病院における使用者への対応において、多くの医療者が直面する問題の一つである患者に対する診療義務、守秘義務と薬物使用の通報義務との関係について、法律は医師には麻薬、大麻、あへんの慢性中毒の届出を、また公務員に犯罪の告発を義務づけているが、公務員ではない医療者には告発義務はない。他方で公務員には守秘義務があり、加えて医療者には診療義務もある。それらの義務が対立するとき、法学者の解釈と行政、司法の判断においては、必ずしも常に告発義務の履行が優先されるわけではない。いずれの義務を優先させるかは、医療者と公務員の職務に照らした裁量に委ねられるとされていることを示した。

D. 考察

薬物を使用する方向に促すいくつかの因子が、2つの面接調査から示された。MSM集団では薬物は性的場面で用いられることが多いが、性的快感を得るという目的の背景には、精神的不安の軽減や人とのつながりの希求という因子が存在しており、それが薬物使用を促進する可能性が示唆された。薬物使用は一つの要因のみでなされるのではなく、生育環境における精神的健康や対人関係のありよう(家族関係の困難、同性集団からの疎外、居場所のなさ)を含むいくつもの因子が影響している。またゲイスポットは、MSMに支援的な関係を提供するとともに、薬物が身近にある場でもあり、性的関係において使用へ誘われやすい場でもある。重なりあう複数のリスクに着目し、いくつかの分岐点においてそれぞれのリスクに介入することが必要と考えられる。

薬物を使用しない、使用を止める方向を支える介入についても、面接調査から示唆がえられた。MSM、HIV陽性、それに薬物使用、この3つを秘密にすることが生きづらさを生み、使用を促すことにもなる。反対に、これらを秘密にしなくともよい場は、使用しない生活を支えることになる。陽性者を支援する医療機関や相談機関には、まずは使用の現実をそのままに受けとめる姿勢が求められる。また、使用者を支援する機関にも、セクシュアリティへの理解が求められる。さらに言えば、使用の背景にある性的マイノリティとしての生きづらさをなくし、自己肯定感を高めるには、私たちの社会におけるセクシュアリティへの理解を進める必要がある。

HIV陽性のMSMのほぼ半数が薬物使用の経験を持つが、その多くは使用を止めている。依存症となってクリニックを受診した35歳前後のMSMには、25歳前後でセックスドラッグとして当時は違法とされていなかった薬物を使用し、それが違法となった30歳前後で覚せい剤へ移行し、その後数年して止めるために受診したという経歴が伺える。しかしこの10年間にMSMと薬物が関わる状況は変化しており、初診時に20代が14%含まれていることから、現状については別途検討が必要と思われる。

受診を促した機関の3分の1が他の依存症関連機関であるのは、受診者がMSMであることも一因と思われる。また約4分の1がHIV関連機関であることは、それらと一部の依存症クリニックとの連携が進みつつあることを示しているように思われる。

E. 結論

薬物使用は医療の課題である。依存症は治療を要する精神疾患だが、使用の背景にメンタルヘルスの問題が存在することが、本研究の2つの面接調査によっても示唆された。薬物使用の要因として、好奇心や快感と並んで、日常生活においてセクシュアリティ、HIV陽性、薬物使用が周囲に知られる不安、それを隠す罪悪感からの逃避が、また常用の要因として、それらを周囲に秘密にすること、自分でも受容できないことによる生きづらさがある。また使用しない要因としては、使用の違法性と健康と治療にとっての有害性・危険性についての考慮があること、回復への契機としては、秘密にしなくともよい人間関係の形成、使用を刑事問題だけでなく健康問題として受け止める姿勢があることも示された。この疾患に関わる医療者、支援者には、こうしたメンタルヘルスの問題を視野に入れ、適切に対応するための情報が求められる。

(文責:樽井)

厚生労働科学研究費補助金
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業

効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究

研究代表者：
白阪琢磨
（独立行政法人国立病院機構大阪医療センター 臨床研究センター）

HIV感染ハイリスク層への情報伝達方法及び意識調査の研究（ダイジェスト版）

研究分担者：
生島 嗣
（特定非営利活動法人ぷれいす東京）
研究協力者：
岩橋恒太
（特定非営利活動法人akta）
市川誠一
（人間環境大学看護学部 特任教授）
藤田彩子
（東京大学大学院医学系研究科）

研究要旨

本研究では、安全な献血血液確保のための有効な情報伝達のあり方および普及啓発方法を検討し提示するため、ハイリスク層の一つであるMSM（Men who have Sex with Men）における献血についての意識や行動の実態を明らかにすることを課題とした。

今年度は、献血でHIV陽性が判明したMSM２名および献血習慣のあるMSM １名を対象に、来年度に実施予定のwebアンケートのためのパイロットとしての聞き取り調査を実施した。インタビューシートを作成し、半構造化面接を個別に実施している。生涯の献血教育に触れた機会、献血時の問診を受けた経験について聞きとりを行った。加えて、これまでのMSMとしての気づき、性行動、HIV検査行動に聞き取りを行った。

結果、今回のインタビュー協力者の献血への動機は、協力者に限定すれば、すべての人が社会貢献で検査目的ではなかった。また、ウィンドウピリオドについての知識の浸透が不十分である点、現行の献血対象の排除項目の説明がMSMには必ずしも説得力のあるものにはなっていない可能性、さらには「差別的」だと受け取られことが、排除項目の説得力を弱めている可能性が示唆された。

A. 研究目的

我が国は、少子高齢化による人口動態、臓器移植の推進などにより献血液の需要が一段と高まると予測される。一方で若者の献血離れなどにより、需要に対する供給は不足すると推計されており、将来の高まる需要に見合った献血の確保は極めて重要である。

他方、昨今献血によるHIV感染事例が問題となった。若林、生島らのHIV陽性者を対象にした調査によれば、感染判明がのきっかけが献血であるものが3.1%あった。感染の可能性の認識は他の手段に比べると低いものの、そのうち27.2%は献血時にHIV感染可能性がある程度以上あったと回答している。市川、塩野らによる一般人口を対象とした調査からは、過去6か月間の献血経験をもつMSM（Men who have Sex with Men）がある一定割合がいることが報告されている。しかし、その背景については不明な点が多くより詳細な調査が求められている。

そこで本研究では、安全な献血血液確保のための有効な情報伝達のあり方および普及啓発方法を検討し提示するため、ハイリスク層（MSM）における献血についての意識や行動の実態を明らかにすることを目的とする。

B. 研究方法

1. MSMを対象とする献血に関連する経験に関する調査

本研究は、MSMを対象とし無記名自記式ウェブ調査を行う。本調査に先だって、適切な質問紙作成のためパイロット調査を行う。その後、パイロット調査をもとに修正を加えた質問紙を用いて、本調査を行う。

①パイロット調査：質問紙作成のため、献血で陽性が判明したMSMおよび献血習慣があるMSM、3名程度を対象に、個別の半構造化された質問紙を元に聞き取り調査を行う。献血や検査に至る経過について面接し、事例を収集する。その内容に基づいて調査項目案の妥当性を考査する（面接時間30～60分）。面接内容は研究参加者の同意のもと録音する。リクルートは、HIV陽性MSMの場合はぷれいす東京に対面相談で来所経験がある者から、献血習慣があるMSMの場合は機縁法で、協力を依頼する。調査項目については②の調査目的および先行研究との比較検討のために、下記のように作成した。詳細は本報告では省略。

・属性
・自己のセクシュアリティの認識や行動
・献血経験、動機、知識
・HIV検査受検経験
・献血／エイズ教育に触れた経験
など、全26問

②本調査：MSMを対象にしたクラブ来客者や一般MSM向けホームページ利用者を対象とし、今年度の①のパイロット調査をもとに作成した質問を用いて、ウェブ調査を次年度以降に行う。リクルート方法は、クラブ来客者の場合はQRコードまたはURLを案内、一般MSM向けホームページ利用者の場合はホームページにバナー広告を出稿し、200人を目標に、ウェブ調査へリクルートする。

2. 献血と、特にMSMに関する諸外国のウェブ上での表記の比較

献血血液へのHIV混入防止のための諸外国における対策に関する先行研究（杉本和隆［2005］:日本エイズ学会誌）に準じ、対象地域をベルギー、英国、スウェーデン、カナダ、またその他、フランス、オーストラリア、アメリカの献血施策について、ウェブ上での表記の比較を実施する。各国の献血協力に関する、一般的な適格性について、どのような質問、条件を設定しているのかについて、インターネット上に公開されている情報を整理することを目的に実施している。なお、サーベイ対象の文献については、英語で提供されているものに限定した。

倫理面での配慮

調査内容は研究参加者の同意のもと、フィールドノートの作成およびICレコーダによる録音を行ったが、個人情報とデータについて、研究目的以外には使用しない。データは編集・集計して発表するため、個人情報は守秘され、厳重に管理される。

パイロット調査対象者のうちHIV陽性者についてはぷれいす東京の利用者であり、分担研究者（生島嗣）とは支援者被支援者の関係にあるため、研究参加への強制力が働く恐れがある。そのため、研究参加者に対し、本研究の参加は、参加者の自由な意思であり、不参加の場合でもいかなる不利益が生じないことを、説明文書に明記するとともに、口頭での説明時に強調する。また、答えづらい質問には答えなくてよいことを伝える。

C. 研究結果

1. MSMを対象とする献血に関連する経験に関する調査

インタビュー実施期間は平成28年１月で、インタビュー協力者のリクルートは2015年11月～12月に実施した。インタビュー協力者の概要は下記の通りである。

第１ケース

40代、ゲイ、HIV陰性。現在東京都居住で、東京都で育つ。大卒、自営業。献血は18才で初めて行った。これまでに100回以上献血をし、そのうち80回程度は20代の大学生のとき。現在でも献血に行くことがある。HIV検査は定期的に受検している。

第2ケース

40代、バイセクシュアル男性、HIV陽性。現在東京都居住で、神奈川県で育つ。大卒、休職中。献血は25～26才で初めて行った。2015年に献血でHIV陽性が判明。感染がわかるまで30回ほどの献血を行っていた。HIV検査は、自発的にHIV検査を受けたことがなかった。その理由として、男性とセックスの機会を持つようになったのが40代になってからであり、また、自分の性行動のリスクが低いと考えていたため。

第3ケース

40代、ゲイ、HIV陽性。現在東京都居住だが、北海道や九州地方など、学齢期は地方で過ごした。大卒の後、専門学校を卒業し、会社員となる。献血は23才で初めて行った。2001年に献血でHIV陽性が判明。感染がわかるまでに7～8回の献血経験。HIV検査は過去に何度か検査を受けたことがある。また、不特定多数との性行為をしていた訳ではなく、自分の性行動のリスクが低いと考えていたため。

以下では主に、4つのテーマに分けて、インタビューデータを整理する。

結果①献血の動機

HIV検査目的で献血を利用している/いた人は、今回のインタビュー協力者にはいなかった。HIV検査については、別に不安があれば保健所などで検査を受けていた。第１ケースのインタビュー協力者の場合、現在は時間に縛られることをさけるため、郵送検査を活用していた。

「将来結婚しないから、他の形で貢献をしたいと思っていた」、「必要としている人がいる」というボランティア感覚など、全てのインタビュー協力者が「社会貢献」を理由としていた。一方で、非正規雇用だと健康診断を受ける機会がないため、「誰かに役立つことが8割、健康診断として献血で知ることのできる他の数値を利用したいという思いが２割」との回答もあった。 また、社会貢献を裏付ける意識として、自らのHIV感染リスクの低くさが見受けられた。

結果②問診票の献血適格性に関する項目

問診票「6ヶ月以内に次のいずれかに該当することがありましたか。」のうち、「男性どうしの性的接触があった。」について、すべての回答者が、それに丸をつけるとせっかく貢献しようと思った献血ができなくなるので、該当しないと「ウソ」をついていたと回答した。

すべての協力者が、文言について合理的で納得ができるような説明とは感じなかったと答え、創意工夫が必要ではないかと話していた。疫学レベルで、新規HIVの新規感染のうち８割を男性同性愛者が占めていることは理解している。しかし、排除項目に入っていると、「差別されているような気がする」と答えていた。

結果③献血でのHIV陽性の告知とコールバックシステムの認知

献血後の検査結果は、「本人には告知されない」という情報が共有されていた。第１ケースのインタビュー協力者のような頻回献血経験者でも、「実際には告知されないことは知っている」と答えていた。　コールバックについては「献血が終わった後に、システムについて書いてある紙をもらった」、「看護師から採血した後に、毎回言われていた」など、「コールバック」という言葉は知らなくても、事後に申告できるシステムがあることについては、献血時に情報提供され、認知

されていることがわかった。

結果④HIV陽性告知時の対応
第2ケースのインタビュー協力者(2015年告知)
封書でまず「話したいことがあるので電話してください」といった内容のものが届き、電話で「HIVの再検査をしたい」といわれ、HIVの検査のできる拠点病院の予約した。拠点病院のまえで献血の担当者と待ち合わせをした。自分がショックを感じたり、混乱することはなかった。

第3ケースのインタビュー協力者(2001年告知)
「お伝えしたいことがあるので、血液センターに来てください」と連絡があり、血液センターに行き、そこで告知を受けた。告知を行った医師からはその場で、「検査目的で受けたわけではないよね？」と繰り返し聞かれた。

2. 献血と、特にMSMに関する諸外国のウェブ上での表記の比較

今年度は、英語によるインターネット上に公開されている情報を以下の国で行なった。アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、フランスについて、各国の一般的な適格性に関する質問項目を整理し、また、特に感染症や性行動、薬物使用に関する項目についての項目の整理を行った(詳細は本報告では省略)。なお、ベルギー、スウェーデンの情報については、インターネット上でアクセスしうる英語での情報が限定的だったため、十分に把握ができなかった。

MSMを対象とする献血の適格性に関する項目は下記の通りだった。

アメリカ
全てのMSMを献血から排除する事項を2014年に廃止し、過去12か月以内に、男性とセックスをした男性に禁止の対象を限定した。また、排除対象者へは寄付という社会貢献のための代案を提案している。

イギリス
過去12か月以内に、男性とオーラル/アナルセックスをした男性である(コンドーム、または他の予防法を使用していたとしても)

カナダ
カナダ赤十字は1977年以来、全てのMSMを排除する、ドナー資格基準を導入した。しかし、2013年、カナダの保健省は MSMの延期期間を、無期限から、最後に男性と性的接触を持った時から5年間に短縮した。 2016年には、MSMの延期期間を5年から1年に短縮する提案が保健省に提出される予定。

オーストラリア
過去12ヶ月の間に下記行為があったか。
男性とオーラル/アナルセックスをしましたか?コンドームを使用した”セーファーセックス”であっても該当します。(あなたが男性の場合) あなたが(コンドームを使って/コンドームなしで)男性とオーラル/アナルセックスをした可能性があると思う男性と(コンドームを使って/コンドームなしで)セックスをしましたか?
ただし、この情報提供がされる際に、「あなたが献血出来ない場合、それは医学研究に基づく安全上の理由のためです。我々 Blood Service は性的指向に基づいた差別は行いません。」といった説明がなされている。

フランス
HIV の感染拡大を止めるための手段として30年以上施行してきたMSMからの献血禁止の法律を、2016年に廃止することを決めた。MSMに対する禁止条項をどのように限定するかは、現在議論が行われているところ。

D. 考察

献血と、特にMSMに関する諸外国のウェブ上での表記の比較からは、現在のMSMに関する献血の適格性についての条項を明らかにすることができた。今回対象とした多くの国では、2010年代の間に禁止条項の変更に関する議論が起こり、ここ数年の間に実際に変更が起こっている。その背景には、性的指向に関する「差別」に関する議論の高まりがあるようだ。

日本の禁止条項と比較してみると、実際には諸外国で設定されている禁止事項のほうが、条件としては厳格なものが多かった。しかし、web上にその科学的な根拠が示されており、性的指向に関する差別に基づくものではないと献血協力者に明示するなどの工夫を行うことにより、献血協力者の信頼を得る努力がみられた。

それに関連して、インタビューでは、問診票の献血排除項目について、MSMのなかには合理的、説得力があると受け取らない人がいる可能性があることが明らかになった。場合によっては、「差別的」と受け取られ、排除項目の説得力を弱めているとインタビュー協力者からは、文言のさらなる改訂の希望が聞かれている。

今回のインタビュー協力者に限定していえば、どの協力者も献血の動機は「社会貢献」が主なものだった。HIV検査の代用として献血を利用している人は、今回のインタビュー協力者にはいなかった。むしろ、自己の感染の可能性が低いとの認識が、社会という認識のもとの献血行動の合理性を保っていると考えられる。

また、理由は理解できても、「献血を検査目的で受けるな」と声高に言われると、HIV陽性者で献血で感染がわかった協力者にとって、「自分がまるで犯罪者のように言われている気がして、同じ陽性者でも感染経路について話すことができない」と語っているインタビュー協力者もいた。

これらのことから、下記のことが明らかになった。日本における献血の適格性に関する情報提供のあり方について

MSMからの意見も反映して提供することにより、その適格性の設定の合理性、科学性の理解を得られる可能性があること。ただし、献血の安全性のために、適格性についてあまり声高に啓発が行われると、理解が得にくくなってしまうこと。今回の調査の規模では言い切ることはできないが、MSMの献血提供者には、HIV検査目的ではなく社会貢献の目的で行っている者が、いる可能性があること。そして、MSMに対して、定期検査の重要性の啓発や、献血教育だけではなく、感染経路、ウィンドーピリオドなどに関するエイズ教育が並行して実施される必要があると考えられた。

E. 結論

MSMを対象とする、献血経験に関するインタビュー調査により、上記内容について明らかになった。インタビュー協力者の中には、HIV検査の受検経験があり、行為や性行為の人数なども少ないなど、HIV感染の可能性がほぼ無いとの自己認識が、献血へのハードルを押し下げていた。そのことにより、MSMである献血協力者が、献血の適格性についての文言が「差別的」であると感じ、感染が低い自分なりの「社会貢献」への制限を限定解除してもしかたがないという、自分なりの合理性を得ることに作用している可能性がある。

ただし、今回のインタビュー調査の結果の限界は、人数は限られ、また機縁法でリクルートした協力者に限定した結果であることだ。今後は、インタビューシートおよびインタビュー結果の検討を通じ、次年度以降の量的手法を用いた本調査に活かしていきたい。

G. 研究発表

1. 論文発表

1)生島嗣. HIV陽性者支援の現場から～ MSM(男性とセックスをする男性)への支援を中心に. こころの科学 186号.52-56, 2016.

2)生島嗣. 信じて自分の秘密を打ち明けることから変化は始まった. 季刊セクシュアリティ 70号. 56-61, 2015.

3)生島嗣. 12月1日のエイズデーにHIV/エイズへの理解を深めよう. ひょうご人権ジャーナル「きずな」11月号. 兵庫県人権協会. 7, 2015. 4)生島嗣. HIV・HIV感染症―正しく知って、偏見のない社会を. いろいろな性、いろいろな生き方. ポプラ社. 62-63, 2015.

2. 学会発表

1)生島嗣、牧原信也、福原寿弥. NPOによる対面相談のニーズとその対応に関する考察. 日本エイズ学会、2015年、東京.

2)野坂祐子、生島嗣. 薬物使用経験のあるHIV陽性MSMの心理社会的要因―生態モデルによる分析から―. 日本エイズ学会、2015年、東京.

3)佐藤郁夫、加藤力也、生島嗣. HIV陽性者のためのピア・ミーティングの運営と当事者の運営参加に関する考察. 日本エイズ学会、2015年、東京.

H. 参考文献

1) 若林チヒロ, 生島嗣他：HIV陽性者の生活と社会参加に関する研究, 厚生労働省科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 平成25年度総括・分担研究報告書 地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究 , 39-96, 2014

2) 塩野徳史, 市川誠一他：日本の成人男性および成人女性における個別施策層の状況とHIV抗体検査行動, 性行動に関する研究, 厚生労働省科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 平成26年総括・分担研究報告書 MSMのHIV感染対策の企画, 実施, 評価の体制整備に関する研究, 303-320, 2014

3) 杉本和隆, 高西優子他：海外における献血血液へのHIV混入の防止対策：教育・面接等を中心としたスクリーニング方法, 日本エイズ学会誌, 7 (1), 23-30, 2005

4) 嶋根卓也, 日高庸晴他：インターネットによるMSMのHIV感染予防に関する行動疫学研究-REACH Online 2011-, 厚生労働省科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 平成24年度総括・分担研究報告書 HIV感染予防対策の個別施策層を対象にしたインターネットによるモニタリング調査・認知行動理論による予防介入と多職種対人援助職による支援体制構築に関する研究, 127-249, 2012

国際医療研究開発費 疾病研究分野「UNAIDSが掲げる臨床評価指標90-90-90達成のための男性同性愛者に対する新しいHIV検査システムの構築に関する研究」(26指122)への協力

国立国際医療研究センター エイズ治療・研究開発センター(ACC)の岡慎一氏が中心となり実施する研究に、NPO法人aktaとともに協力した。この研究の目的は、MSM(男性とセックスをする男性)のHIV予防啓発や陽性者支援を行っているNGOと、ACCが共同で、郵送を利用したHIV検査システムを開発し、MSMを対象にした新たなHIV検査の手段を提案することにある。今回の研究枠での検査はすべて無料匿名で実施された。

検査の受付や結果返しの窓口となるWebサイトの構築、MSM向け郵送検査の広報、検査キットの配布はaktaが中心となり実施し、検査前後の相談支援については、ぷれいす東京が相談員の派遣や電話相談で協力した。

HIV検査の希望者は、コミュニティーセンター aktaにて検査キットを受け取り、自己採血し、ろ紙に染み込ませた検体を郵送にて返信する。検体の検査はACCの検査室にて実施した。確認検査および陽性告知はACCまたは協力医療機関(東新宿こころのクリニック)で実施した。HIV感染が判明した場合には、ACCで保険診療に切り替えてHIV診療を受けることができる。また希望に応じて他拠点病院の紹介も行なった。

ぷれいす東京の具体的な関わりは、検査キット「HIVcheck」をコミュニテイセンター aktaにて配布する際に相談員を派遣し、キット受け取り来所者のうち、希望がある人からの相談を受けた。aktaでの配布時間は、毎週木曜日19～22時。土、日に臨時の配布会が実施され、さらに上野地区での配布会もあり、それぞれ相談員を派遣した。

相談の実績は、2015年8月～2016年3月までに、90人の方からの相談申し込みがあり、実際には83人の方の相談に対応した。

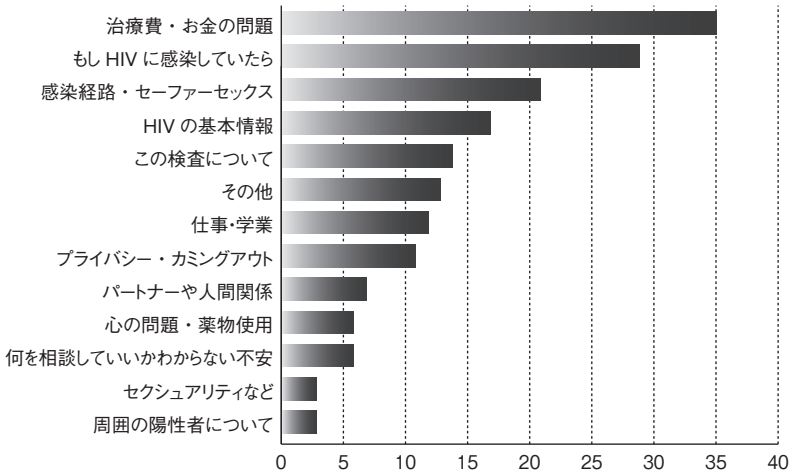
相談内容は、「治療費・お金の問題」:35件、「もしHIVに感染していたら」:29件、「感染経路・セーファーセックス」:21件、「HIVの基本情報」:17件、「この検査について」:14件、「仕事・学業」:12件、「プライバシー・カミングアウト」:11件、「パートナーや人間関係」:7件、「心の問題・薬物使用」:6件、「何を相談していいかわからない不安」:6件、「周囲の陽性者について」:3件、「セクシュアリティなど」:3件、その他:13件であった。(複数選択あり)

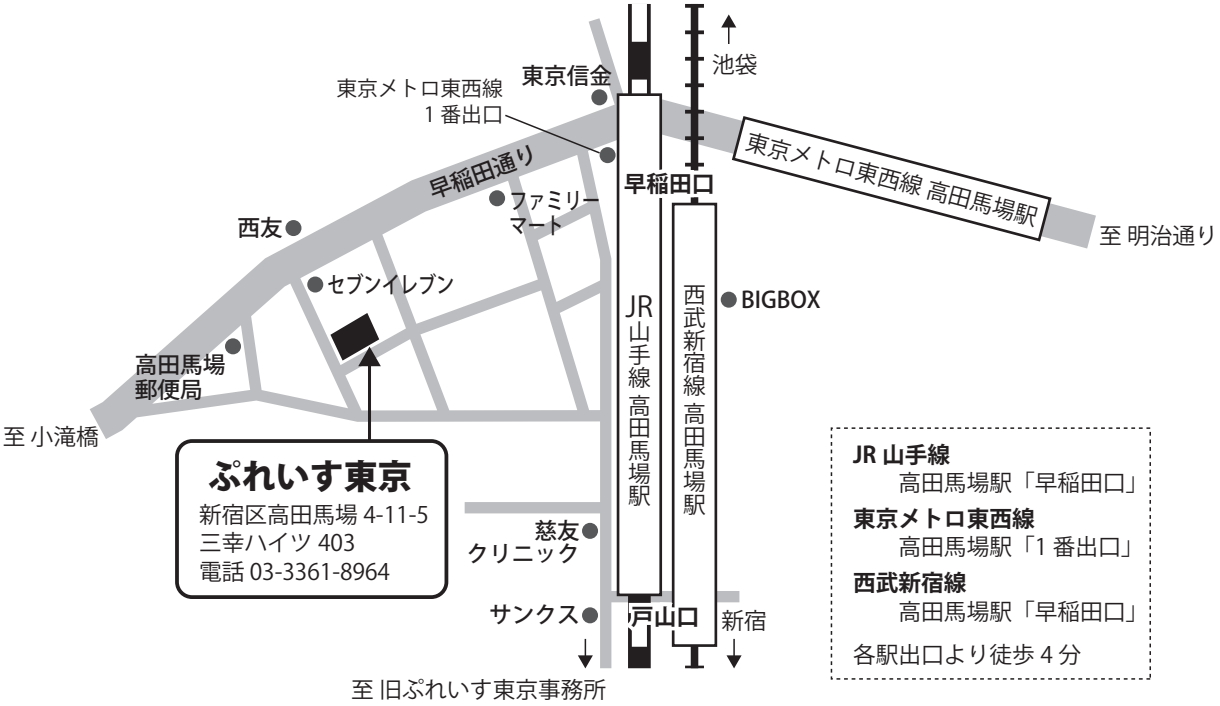
心あたりがありながらも、HIV検査を躊躇したり、先送りしていた例が散見された。「治療費がいくらかかるのだろうか?」とか「陽性になったら、じぶんはどうなってしまうのだろう」と事前に思い悩んでいたことがわかる相談者が多数存在した。感染不安の電話相談を利用している人たちより、より現実的な問題に不安をもっている印象を得た。

また、身近に陽性者の存在を認識して受験行動につながったケース、ゲイコミュニティーにおけるHIVの陽性率や他の性感染症との関連を尋ねるケースなど、MSMだからこその相談があり、MSMを対象とした新たなHIV検査の一手段としての可能性を感じられた。

文責(生島、佐藤、福原)

相談内容





ぷれいす東京　2015 年度年間活動報告書

2016 年 5 月 29 日発行

発行　特定非営利活動法人　ぷれいす東京
Positive Living And Community Empowerment TOKYO
〒 169-0075　新宿区高田馬場 4-11-5　三幸ハイツ 403
TEL：03-3361-8964　FAX：03-3361-8835　E-mail：office@ptokyo.org
ゆうちょ銀行振替口座：00160-3-574075 「特定非営利活動法人　ぷれいす東京」
URL：http://www.ptokyo.org/
Facebook：http://www.facebook.com/PLACETOKYO
Twitter：@placetokyo（http://twitter.com/placetokyo）
印刷　株式会社翔美